

---

加須市

---

# 本田遺跡

---

首都圏氾濫区域堤防強化対策における

埋蔵文化財発掘調査報告

2021

国土交通省 関東地方整備局  
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

## 序

埼玉県北部の県境を流れる利根川は、日本最大の流域面積を誇る大河です。利根川は万葉集の東歌に「刀祢河泊」と詠まれ、いにしえから豊かな文化を育んできました。飲用水をはじめ農業・工業用水として、また水運を利用した交通・輸送体系の整備など、さまざまな状況に応じて人々の暮らしと生活を支えてきました。

こうした恩恵の一方で、過去には幾多の恐ろしい水害を引き起こしてきました。昭和22年、カスリーン台風の襲来により利根川の堤防が決壊し、多大な被害が発生したことは今なお語り継がれています。国や自治体ではこうした災害を未然に防ぐため、様々な対策を講じています。首都圏氾濫区域の堤防強化対策事業もその一つです。

この事業地に含まれる加須・羽生・久喜地区には、既知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。今回、発掘調査を行った加須市本田遺跡もその一つです。この発掘調査は堤防強化対策事業に伴う事前調査として、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施しました。

発掘調査の結果、近世に造られた「水塚」が発見されました。「水塚」とは洪水に備えて高く盛土された水防施設のことです、先人の洪水に対する防御対策をうかがい知ることができます。調査例は少なく、自然災害との関わり方を明らかにする意味で、とても重要な事例と考えられます。

本書は、これらの発掘調査結果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及活用の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の調整に御尽力をいただきました国土交通省関東地方整備局、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、加須市教育委員会、地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

令和3年9月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 依 田 英 樹

## 例　言

- 1 本書は加須市外野地内に所在する、本田遺跡  
第1・2次調査の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。  
本田遺跡（Na69-041）  
第1次調査  
加須市大字外野字本田203-5  
令和元年12月25日付け教文資第2-34号
- 3 第2次調査  
加須市大字外野字本田203-5  
令和2年4月1日付け教文資第2-4号
- 4 発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 5 事業の委託事業名は下記のとおりである。  
発掘調査事業（平成31年度）  
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成31年度埋蔵文化財発掘調査」  
発掘調査事業（令和2年度）  
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における令和2年度埋蔵文化財発掘調査」  
報告書作成事業（令和3年度）  
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における令和3年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」
- 6 発掘調査・報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。発掘調査期間と担当者は以下のとおりである。  
発掘調査は第1次調査を令和2年1月1日から令和2年3月31日まで、第2次調査を令和2年4月1日から令和2年6月30日まで、青木

- 弘・劍持和夫が担当した。  
報告書作成事業は令和3年4月1日から令和3年7月31日まで、富田和夫が担当した。  
報告書は令和3年9月24日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第471集として、印刷・刊行した。
- 7 発掘調査における基準点測量は下記のとおり委託した。  
第1次調査 株式会社ソレイユ  
第2次調査 中央航業株式会社
  - 8 発掘調査における空中写真撮影は、下記のとおり委託した。  
第1次調査 中央航業株式会社  
第2次調査 株式会社シン技術コンサル
  - 9 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は福田 勝・富田が行った。
  - 10 出土品の整理・図版作成は主に富田が行い、遺構挿図については青木が行った。遺物は依田英樹・福田・山村 卓・水村雄功・滝澤 謙の協力を得た。
  - 11 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、IV-1～5の遺構を青木・富田、遺物を水村、V-1（1）、V-2（1）を青木、V-1（2）、V-2（2）とV-3・4、その他を富田が行った。
  - 12 本書にかかる諸資料は、令和3年10月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
  - 13 発掘調査・報告書刊行にあたり、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）  
加須市教育委員会 羽生市教育委員会  
石川元一 井上尚明 片山祐介 山崎吉弘

## 凡 例

1 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系  
国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 50' 00''$ ）に基づく座  
標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて  
座標北を示している。

B-3グリッド杭の座標はX=19920.000m  
Y=-18190.000m、北緯 $36^{\circ} 10' 45.7329''$   
東経 $139^{\circ} 37' 51.9976''$ である。

2 調査で使用したグリッドは、国土標準平面  
直角座標に基づく $10 \times 10\text{m}$ の範囲を基本（1グ  
リッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を  
組んだ。

3 グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から  
南方向にアルファベット（A・B・C…）、西  
から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アル  
ファベットと数字を組み合わせ、例えばC-  
3グリッドと呼称した。

4 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略  
号は、以下のとおりである。

S B …礎石建物跡 SK …土壤

5 本書に掲載した遺構番号は、発掘調査時に付  
した番号を踏襲したが、第1号性格不明遺構（S  
X1）は第1号土壤（SK1）とした。

6 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりで  
ある。但し、一部例外もあり、それについては  
図中に縮尺とスケールを示した。

調査区全体図 1:160

水塚盛土 1:80 1:160

基本層序 1:60

建物跡・蔵跡・土壤 1:60

石垣・石階段 1:60

陶磁器類・鉄製品 1:3

瓦 1:4

銭貨 2:3

石製品 1:8

土壁 1:6

7 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔  
標高（単位m）を表す。

8 遺構図中の斜線は調査における掘削範囲を示  
し、その他の網掛けは各遺構図に内容を示した。

9 石材計測表の凡例は表下部に示した。単位は  
cmである。

10 瓦・石材計測表の重量単位はkgである。

11 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。  
・大きさはcm・重さはg 単位である。

・（ ）内は推定値、〔 〕は残存値を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴  
的なものを記号で示した。

A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石

E：石英 F：軽石 G：砂粒子 H：赤色粒子

I：白色粒子 J：白色針状物質 K：黒色粒子

L：その他 M：チャート

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存  
程度を%で示した。

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。

・備考には注記№・煤の付着・推定生産地・文  
様の特徴等を示した。

12 本書に使用した地形図は、国土地理院発行  
1/50,000 1/25,000、加須市発行の1/2,500都  
市計画基本図を編集の上使用した。

13 調査時からの遺構数・名称の変更は以下のと  
おりである。

第1・2号土壤→第1・2号埋設桶

第1号性格不明遺構→第1号土壤

第1号石列（新規）

第1～3号排水管（新規）

# 目 次

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1	(3) 建物跡	23
1	発掘調査に至る経過	1	(4) 蔵跡	48
2	発掘調査・報告書作成の経過	2	(5) 埋設桶	55
3	発掘調査・報告書作成の組織	3	(6) 土壌	57
II	遺跡の立地と環境	4	V 調査のまとめ	58
1	地理的環境	4	1 水塚・蔵・建物の構築順序	58
2	歴史的環境	5	2 水塚盛土と基礎地業の関係	58
III	遺跡の概要	11	3 出土遺物の検討	59
IV	遺構と遺物	16	4 類例の検討	59
1	遺構と遺物	16	写真図版	
(1)	水塚盛土	16		
(2)	石垣・石階段	20		

## 挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第22図 第1号建物跡遺物出土状況（1）	34
第2図 周辺の地形	5	第23図 第1号建物跡遺物出土状況（2）	35
第3図 周辺の遺跡分布	8	第24図 第1号建物跡出土遺物（1）	37
第4図 遺跡位置図（1）	12	第25図 第1号建物跡出土遺物（2）	38
第5図 基本土層	12	第26図 第1号建物跡出土遺物（3）	39
第6図 遺跡位置図（2）	13	第27図 第1号建物跡出土遺物（4）	40
第7図 遺跡（水塚盛土）全体図	14	第28図 第1号建物跡出土遺物（5）	41
第8図 遺跡（水塚盛土）空中写真測量図	15	第29図 第1号建物跡出土遺物（6）	42
第9図 水塚盛土・石垣断面図	17	第30図 第1号建物跡出土遺物（7）	43
第10図 水塚盛土出土遺物	18	第31図 第1号藏跡（1）	49
第11図 石垣・石階段（1）	21	第32図 第1号藏跡（2）	50
第12図 石垣・石階段（2）	22	第33図 第1号藏跡（3）	51
第13図 第1号建物跡（1）	24	第34図 第1号藏跡（4）	51
第14図 第1号建物跡（2）	26	第35図 第1号藏跡出土遺物（1）	52
第15図 第1号建物跡（3）	27	第36図 第1号藏跡出土遺物（2）	53
第16図 第1号建物跡（4）	28	第37図 第1・2号埋設桶・出土遺物	56
第17図 第1号建物跡（5）	29	第38図 第1号土壤・出土遺物	56
第18図 第1号建物跡（6）	30	第39図 水塚の分類	60
第19図 第1号建物跡（7）	31	第40図 水塚の類例	60
第20図 第1号建物跡（8）	32	第41図 栗橋関所番士屋敷跡の建物跡	61
第21図 第1号建物跡（9）	33		

## 表目次

第1表 周辺の遺跡一覧表	9	第6表 第1号建物跡出土遺物観察表（3）	47
第2表 水塚盛土出土遺物観察表	19	第7表 第1号藏跡石材計測表	48
第3表 第1号建物跡基礎地業中の瓦・石屑 重量計測表	36	第8表 第1号藏跡出土遺物観察表（1）	54
第4表 第1号建物跡出土遺物観察表（1）	45	第9表 第1号藏跡出土遺物観察表（2）	54
第5表 第1号建物跡出土遺物観察表（2）	46	第10表 第1・2号埋設桶出土遺物観察表	57
		第11表 第1号土壤出土遺物観察表	57

## 写真図版

- |      |                                    |                                    |
|------|------------------------------------|------------------------------------|
| 図版1  | 1 調査区遠景（南東から）                      | 3 第1号建物跡礎石1-7                      |
|      | 2 調査区遠景（北から）                       | 図版11 1 第1号建物跡礎石1-7、S35、瓦敷4         |
| 図版2  | 1 調査区近景（垂直写真）                      | 2 第1号建物跡礎石2-0                      |
|      | 2 調査区近景（南西から）                      | 3 第1号建物跡礎石2-0、2.5-0、3-0            |
| 図版3  | 1・2 水塚全景（精査前）                      | 4・5 第1号建物跡礎石2-1                    |
|      | 3・4 水塚全景（遺構検出状況）                   | 図版12 1 第1号建物跡礎石2-1                 |
|      | 5～8 水塚全景（遺構精査状況）                   | 2 第1号建物跡礎石2-2                      |
| 図版4  | 1～4 第1号石垣                          | 3 第1号建物跡礎石2-3                      |
|      | 5 第2号石垣・第2号石階段                     | 4 第1号建物跡礎石2-4                      |
|      | 6 第4号石垣                            | 5 第1号建物跡礎石2-5                      |
|      | 7・8 第5号石垣                          | 6 第1号建物跡礎石2-5、S22～24、<br>3-5、瓦敷3南側 |
| 図版5  | 1・2 第1号石階段                         | 7 第1号建物跡礎石2.5-2                    |
|      | 3 第1号石階段・第2号石垣側面                   | 8 第1号建物跡礎石2.5-6                    |
|      | 4・5 第1号石階段側面                       | 図版13 1 第1号建物跡礎石3-0                 |
|      | 6～8 第2号石階段側面                       | 2・3 第1号建物跡礎石3-1                    |
| 図版6  | 1・2 第3号石階段                         | 4 第1号建物跡礎石3-2                      |
|      | 3～8 第3号石階段側面                       | 5 第1号建物跡礎石3-3                      |
| 図版7  | 1・2 第1号建物跡礎石列                      | 6 第1号建物跡礎石3-5                      |
|      | 3 第1号建物跡基礎地業                       | 7・8 第1号建物跡礎石4-1                    |
| 図版8  | 1・2 第1号建物跡礎石1-0                    | 図版14 1 第1号建物跡瓦敷6・9                 |
|      | 3・4 第1号建物跡礎石1-1                    | 2 第1号建物跡礎石4-2、4-3、5-3<br>周辺        |
|      | 5 第1号建物跡礎石1-1.5                    | 3・4 第1号建物跡礎石4-2                    |
|      | 6 第1号建物跡瓦敷1                        | 5・6 第1号建物跡瓦敷6（礎石4-2・<br>～4-3間）     |
|      | 7・8 第1号建物跡礎石1-2                    | 7・8 第1号建物跡礎石4-3                    |
| 図版9  | 1・2 第1号建物跡瓦敷1                      | 図版15 1～3 第1号建物跡礎石4-3               |
|      | 3 第1号建物跡礎石1-3                      | 4・5 第1号建物跡礎石4-4                    |
|      | 4 第1号建物跡礎石1-3.5                    | 6 第1号建物跡礎石4-5                      |
|      | 5 第1号建物跡礎石1-3.5、1-4、<br>1-4.5、瓦敷2  | 7・8 第1号建物跡礎石5-0                    |
|      | 6 第1号建物跡礎石1-4                      | 図版16 1 第1号建物跡礎石5-1                 |
|      | 7 第1号建物跡礎石1-5                      | 2 第1号建物跡瓦敷7                        |
|      | 8 第1号建物跡瓦敷3・8周辺                    | 3～5 第1号建物跡礎石5-3                    |
| 図版10 | 1 第1号建物跡礎石1-6                      | 6・7 第1号建物跡礎石5-6                    |
|      | 2 第1号建物跡礎石1-6、S25～34、<br>2.5-6、瓦敷8 |                                    |

	8 第1号建物跡瓦敷9	5~9 第1号藏跡出土遺物
図版17	1 第1号藏跡基礎検出状況	10~13 第1号建物跡出土遺物
	2 第1号藏跡北東隅角基礎検出状況	図版25 1・2 第1号建物跡出土遺物
	3 第1号藏跡基礎（北4）外側加工痕	3 水塚盛土出土遺物
	4 第1号藏跡基礎（西3・4）内側加工痕	4・5 第1号建物跡出土遺物
	5 第1号藏跡基礎（西5）内側加工痕	6・7 第1号藏跡出土遺物
図版18	1~5 第1号藏跡基礎地業堆積状況	8・9 第1号埋設桶出土遺物
図版19	1~5 第1号藏跡基礎地業検出状況	10 第2号埋設桶出土遺物
図版20	1~5 第1号藏跡基礎地業掘り方	11・12 水塚盛土出土遺物
図版21	1 第1・2号埋設桶瓦検出状況	13・14 第1号藏跡出土遺物
	2 第1・2号埋設桶	15 第2号埋設桶出土遺物
	3 第1号土壤瓦検出状況	16 水塚盛土出土遺物
	4 第1号土壤	図版26 1 水塚盛土出土遺物
	5~7 水塚土層断面	2~4 第1号建物跡出土遺物
	8 水塚基本土層断面	5・6 第1号藏跡出土遺物
図版22	1~15 第1号建物跡出土遺物	7 第1号建物跡礎石2~4, 5~2-No.1
図版23	1・2 第1号建物跡出土遺物	8 第1号建物跡礎石3~4-No.1
	3~7 第1号藏跡出土遺物	9 第1号建物跡礎石2, 5~2-No.1
	8~11 第1号建物跡出土遺物	10 第1号建物跡礎石S73
図版24	1~4 第1号建物跡出土遺物	11 第1号建物跡礎石3~2-No.1
		12 第1号建物跡礎石4~4-No.1

# I 発掘調査の概要

## 1 発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所では「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画【大臣管理区間】」に基づき、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業として、利根川右岸の堤防を拡幅し、強化する事業を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、国が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、利根川上流河川事務所長から平成17年1月20日付け利上沿第18号で、埼玉県教育委員会教育長宛て、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

事業予定期域については埼玉県指定旧跡や周知の埋蔵文化財包蔵地が所在すること、埋蔵文化財の詳細な状況等を把握するための確認調査を実施する必要がある旨を、平成17年3月17日付け教生文第1780号で回答した。

当該箇所については、平成22年7月に確認調査を実施し、近世の遺構や水塚が現存することが確認されたため、平成22年7月5日付けで遺跡台帳に登載された。埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成22年7月23日付け教生文第790-1号で、記録保存のための発掘調査が必要である

旨を回答した。平成29年と令和元年にも試掘調査を実施し、発掘調査を要する範囲を確定した。その後、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、発掘調査の措置を講ずることとした。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、生涯学習文化財課（当時）の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて定期的に会議を開催し、各種の調整を行った。

文化財保護法第94条第1項の規定に基づく国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長からの通知に対する、同条第4項の規定による埼玉県教育委員会教育長からの勧告は以下のとおりである。

平成24年2月16日付け教生文第4-1337号

文化財保護法第92条第1項の規定に基づく公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は以下のとおりである。

令和元年12月25日付け教文資第2-34号

令和2年4月1日付け教文資第2-4号

(埼玉県教育局市町村支援部文化資源課)

## 2 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

本田遺跡（地元では「ほんでん」と呼称するという）は、埼玉県加須市大字外野字本田203-5に所在する水塚を中心とする遺跡である。利根川の右岸に形成された自然堤防上に立地し、標高は約14mである。主要地方道羽生・外野・栗橋線の東側に隣接し、利根川現堤防から南に約0.1km離れた位置にある。水塚を構成する盛土は南北約30m、東西約20mの範囲に分布する。盛土の見かけの高さは約1.5～2mである。

発掘調査は首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴って当事業団が実施した。第1次調査（平成31年度）は、令和2年1月1日から令和2年3月31日まで実施した。

第2次調査は、引き続き令和2年4月1日から令和2年6月30日まで実施した。調査面積は591m<sup>2</sup>である。

#### 第1次調査

令和元年12月2日に埋蔵文化財発掘調査届を加須市教育委員会に提出し、事務手続きを行った。令和2年1月10日に柵を設置した。1月14日から1月17日にかけて碎石敷設工事・仮設通路工事・事務所設置工事・給排水設置工事を行い、調査体制を整えた。

1月20日には器材搬入と敷設工事、掘削重機を搬入し、併せて第1回目の高所作業車による盛土現況撮影を実施した。1月22日から1月24日まで重機による表土掘削を行い、1月27日からは補助員による遺構確認作業を開始した。測量用の基準点測量及びグリッド杭打設は、2月4日に実施した。

遺構確認作業の結果、水塚盛土1基、建物跡1棟、蔵跡1棟、埋設構2基、土壤1基、石垣5基、石階段3基、石列1条、排水管3基が検出された。遺構が検出された段階で2月13日空中写真測量と第2回目の高所作業車による盛土検出遺構の撮影

を行った。

順次遺構精査を行い、併せて遺構断面図・平面図、個別の写真撮影等の記録作成作業を実施した。

また、建物跡の基礎の掘削については掘削工事で対応した。令和2年3月3日、建物跡の基礎の状況を記録するために、空中写真撮影と第3回目の高所作業車による撮影を実施した。3月24日に埋蔵物発見届（加須警察署長宛て）と埋蔵文化財保管証（埼玉県教育長宛て）を提出し、3月31日第1次調査を終了した。

#### 第2次調査

第2次調査は、4月7日から補助員作業を再開した。第一面の遺構記録作成作業を中心に進め、その後、5月11日から5月15日まで第二面の重機掘削作業を行った。引き続き、補助員による遺構確認作業を実施したところ、礎石建物跡（第1号建物跡）の基礎地業、土壤、第1号蔵跡の基礎地業が確認された。遺構の精査作業及び平面図・断面図、写真撮影等の記録作成作業を実施した。基礎部分掘り下げには掘削工事を併用して対応した。

6月3日、空中写真撮影と高所作業車による撮影を実施し、6月12日補助員作業を終了した。6月15日現場の埋め戻し、6月22日事務所撤去、6月23日に柵・仮設通路を撤去し、碎石撤去を6月26日までに終えた。6月17日に埋蔵物発見届（加須警察署長宛て）と埋蔵文化財保管証（埼玉県教育長宛て）を提出し、6月30日第2次調査を終了した。

#### （2）整理・報告書の作成

報告書作成事業は、令和3年4月1日から令和3年7月31日まで実施した。

遺物は水洗・注記を行った後、接合・復元作業を行った。接合した遺物は実測図を作成し、計測値や特徴などを記入した。実測には磁気式三次元位置計測装置、正射投影画像撮影機を活用した。遺物実測図はトレースを行い、必要に応じて拓本

を探った。スキャナを使用してこれらをデジタルデータ化し、レイアウト編集して印刷用の挿図版下を作成した。また令和3年6月に遺物写真を撮影し、写真図版の版下データを編集・作成した。

遺構については、発掘調査で作成された平面図・土層断面図等を修正・編集して第二原図を作成した。パソコンを使用してデジタルトレースと編集作業を行い、印刷用の挿図版下を作成した。

遺構写真については、発掘調査で撮影されたものの中から選択・編集し、写真図版用の版下データを作成した。

タを作成した。令和3年6月下旬から7月にかけて、作成した遺構・遺物のデータ等をもとに原稿を執筆し、遺構・遺物の挿図と写真図版などを組み合わせて割付を作成した。完了後の7月30日、印刷業者に入稿し、校正を3回行い、令和3年9月24日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第471集『本田遺跡』(本書)を刊行した。

図面類・写真類・データ類・遺物等の諸資料は、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

### 3 発掘調査・報告書作成の組織

#### 平成31年度（発掘調査）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	高 津 導	調査部 部 長	黒 坂 植 二
<b>総務部</b>		調査部 副 部 長	吉 田 稔
総務部副部長	山 本 靖	主幹兼調査第一課長	栗 岡 潤
総務課長	新 井 了 悟	主 任	青 木 弘
		主 任 専 門 員	劍 持 和 夫

#### 令和2年度（発掘調査）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調査部 部 長	吉 田 稔
<b>総務部</b>		調査部 副 部 長	福 田 聖
総務部副部長	山 本 靖	主幹兼調査第二課長	渡 辺 清 志
総務課長	鈴 木 裕 一	主 任	青 木 弘
		主 任 専 門 員	劍 持 和 夫

#### 令和3年度（報告書作成）

理 事 長	依 田 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調査部 部 長	田 中 広 明
<b>総務部</b>		調査部副部長兼整理第一課長	福 田 聖
総務部副部長	上 野 真 由 美	整 理 第 二 課 長	金 子 直 行
総務課長	鈴 木 裕 一	主 任 専 門 員	富 田 和 夫

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

本田遺跡は東武伊勢崎線加須駅の北方約8kmにあたる加須市外野に所在する。標高は約14mである。遺跡の北側には利根川が南東方向に流れ、遺跡は利根川右岸の自然堤防上に立地している。遺跡の南側は加須低地に形成された広大な田園風景が広がる。

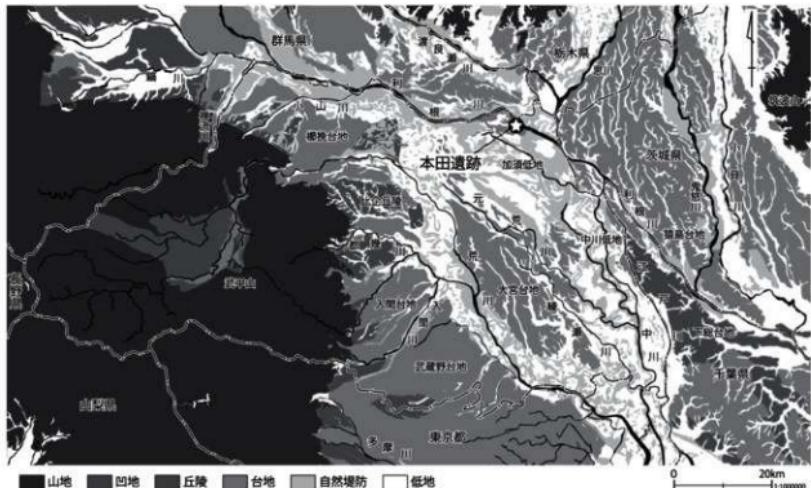
加須低地は、もともとは川口市北部から群馬県東毛地域へと連なる洪積台地の大宮・館林台地の一部であった。加須低地の形成には、利根川の堆積作用と関東造盆地運動と呼ばれる地殻変動に伴う沈降作用が大きく関わっている。

関東造盆地運動とは、関東平野の中心部が沈降する一方で、関東西部の山地や房総半島といった周縁部において地盤が隆起するという地殻運動である。遺跡の存在する加須市・羽生市周辺は一見平坦な沖積低地が広がっているように見えるが、場所によっては地下に埋没ロームが確認され、元

来起伏のある地形が形成されていたことが判明している。

羽生市小松1号墳は墳丘そのものが地下に埋没し、地下3mのローム面から古墳が発見された(矢口・瀧瀬1996・羽生市2014)。また、羽生市星敷裏遺跡では、地表下4mの埋没ローム台地上に縄文時代の集落が発見された(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2016、以下埼埋文と略す)。本田遺跡の西約2kmに位置する長竹遺跡からも埋没ローム台地の上に縄文時代後・晩期の環状盛土遺構が検出されている(埼埋文2014b)。

加須低地の地理的な特徴を挙げるとすれば、河畔砂丘の形成がある。河畔砂丘は日本国内では、木曽川、利根川の流域及び旧流路周辺に多く残されており、その中でも加須市の志多見砂丘は国内に残る河畔砂丘の中でも最大級のもので、平成26年(2014)には埼玉県指定天然記念物「中川低地の



第1図 埼玉県の地形

河畔砂丘群「志多見砂丘」に指定された。このように遺跡周辺の地形は、ローム台地の沈降作用と利根川をはじめとする河川の氾濫堆積物によって形成されたことがわかる。

利根川は、新潟県と群馬県の県境に位置する大水上山を源流とし、茨城県と千葉県の県境付近に位置する河口から太平洋へ注いでいる。流域延長は約322kmで信濃川に次ぐ日本第2位、流域面積は16,840km<sup>2</sup>で日本最大の規模を誇る。

本来の利根川は幾多の支流を形成しつつ、東京湾へ流れしており、会の川がかつての本流筋であつたと考えられている。日本最大級の河畔砂丘が連なる状況からもその名残を窺うことができる。近

世初頭頃までは羽生市上川俣で南方向（会の川）と東方向（浅間川）の二股に分かれた後、加須市川口で再び合流し、現在の大落古利根川、元荒川の流路を通じて東京湾へと注いでいた。

文禄3年（1594）徳川家康の四男で忍城主の松平忠吉の命を受け、家老の小笠原三郎左衛門により羽生市本川俣で、会の川の縮め切りが行われた。いわゆる利根川の東遷事業の始まりとも評されている。これら一連の「瀬替え」、河川改修事業により、利根川本流が東京湾に注ぐルートから現在の千葉県銚子市を経て太平洋に抜けるルートに変更されたのである。

## 2 歴史的環境

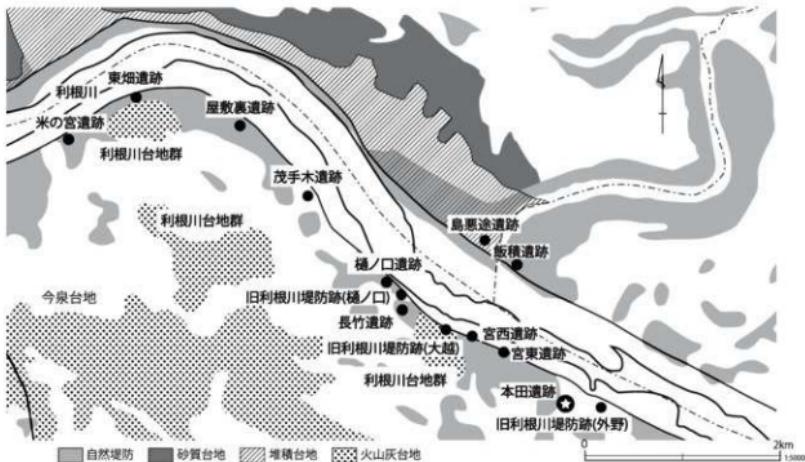
本田遺跡の所在する加須低地周辺は、台地の沈降と河川の乱流によって堆積土に厚く覆われている。そのため遺跡の分布は未だ不明な部分が多く、本来、現在よりも多くの遺跡の存在が予想される。本事業に伴う調査を含めて、周辺の歴史的環境を概観したい。

### 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、地形的な制約から発見される可能性が低く、羽生市谷田遺跡（35）、内谷遺跡（43）から、ナイフ形石器と剥片が出土している程度である。

### 縄文時代

本田遺跡の西約2kmには、縄文時代後・晩期の環状盛土遺構が発見された加須市長竹遺跡（5）



第2図 周辺の地形

が位置する。埋没ローム台地上に盛土遺構が形成され、多数の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、土壙、埋甕、遺物集中と、土器や石器、土偶など膨大な遺物が発見された。この中には床面に焼土を敷いた堅穴住居跡や全身人骨の残る墓跡が含まれ、縄文時代後・晚期の生活を復元するうえで欠くことのできない資料が得られた。それ以外にも早期後葉、条痕文系期の遺物が出土する土壙群、中期後半では、加曾利E式期の土器を伴う堅穴住居跡や土壙が検出されている（埼埋文2014b）。また、加須市（旧騎西町）の荻原遺跡で、中・後期の集落跡が調査されている（加須市2008・2020）。

利根川を上流に約4.5km遡ると、羽生市屋敷裏遺跡（32）がある。屋敷裏遺跡では縄文時代中期末葉～後期にかけての住居跡4軒と遺物包含層が調査された。やはり埋没ローム台地肩部に集落を構え、低地に移行する斜面に包含層が形成されていった（埼埋文2016）。羽生市発戸には、東京国立博物館所蔵の有名な「土面」が発見された発戸遺跡が所在する。

#### 弥生時代

弥生時代の遺跡は少ない。加須市樋ノ口遺跡（6）から、縄文時代晚期終末から弥生時代初頭にかかる荒海式併行期の土器が発見された（埼埋文2019c）。羽生市屋敷裏遺跡（32）からは中期後半の堅穴住居跡1軒、方形周溝墓1基が見つかっている。四隅切れの周溝墓を伴う小規模な集落跡と考えられ、中部高地の栗林系土器が出土したこと、また、弥生中期の方形周溝墓としては太平洋側では最東端に位置することも含め、系譜関係は注目される。柿沼幹夫のいう「方形周溝墓の最前线」（柿沼2015）を示す好例といえる。他には天王遺跡（39）から後期の土器が採集されている。

#### 古墳時代

古墳時代前期では、羽生市屋敷裏遺跡（32）から堅穴住居跡44軒が検出された。北陸系や東海系、畿内系、山陰系など遠隔地域に由来する土器が出

土する点が最大の特徴である。奈良県纏向遺跡から全国の土器が出土することに、現象的には類似した事象といえる。古墳時代成立期の社会的な変動を象徴する「土器の動き」といえるかもしれない。いずれにせよ、古墳時代前期の拠点的な集落と考えられる。屋敷裏遺跡の上流約2kmにある米の宮遺跡（38）からは堅穴住居跡1軒（埼埋文2018c）、羽生市街地に位置する大道遺跡からは堅穴住居跡24軒が検出され（羽生市2009）、埋没ローム台地を集落域として、周辺低地の開発が進行したと推測される。

古墳時代中期から後期になると、遺跡数が増加する。本田遺跡の上流側隣接地点（約0.8km）に位置する宮東遺跡（4）では、古墳時代中期から後期の集落が発見された。遺物は、朝鮮半島南部に由来する多孔瓶や、須恵器の把手付壇など特殊な遺物が出土した。また、旧河道跡から多くの土師器が出土しており、中核的な集落が形成されていたのであろう（埼埋文2021）。大越には、他に正伝木遺跡（7）、別所遺跡（11）が所在するが、詳細は不明である。宮東遺跡も含め、大越古墳群に関わる遺跡と考えられる。

羽生市屋敷裏遺跡（32）では中期の堅穴住居跡2軒、後期の堅穴住居跡19軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡4基、円形周溝状遺構1基他が検出されている。このうち第10・13号住居跡からは、本来は古墳の副葬品など祭祀用具として使用される須恵器脚付長頸壺が堅穴住居跡から出土した。近接する村君古墳群にある永明寺古墳（34）（羽生市2016・2017）との関わりも想定され、注目される。

利根川対岸に位置する加須市（旧北川辺町）飯積遺跡（23）では、5世紀後半代の住居跡が22軒、6世紀代の住居跡が69軒、7世紀代の住居跡が45軒検出され、奈良時代まで集落が継続的に営まれた（埼埋文2007）。集落は砂質の自然堤防上に構築され、低地の開発が本格的に始まったことがわかる。それに伴い、周辺の埋没ローム台地を中心

に古墳群が造られるようになる。

本田遺跡の南方約1kmには桶遣川古墳群が位置し、御室塚古墳（14）、浅間塚古墳（15）、稻荷塚古墳（16）が現存する。また、現在は消滅した宮西塚古墳からは、方格四獸鏡、ガラス玉、馬具等が出土し、6世紀中葉頃の築造とされている。文化・文政年間（1804～1829）に編まれた『新編武藏風土記稿』の「桶遣川村」項には「穴乍塚、諸塚、石子塚、稻荷塚、浅間塚、宝塚、宮西塚。以上の塚を桶遣川の七塚と云い」（蘆田1968）と記されており、かつては7基の古墳が存在したことがわかる。

遺跡の西方約1.2kmには、加須市大越古墳群が位置し、稻荷塚古墳（9）、浅間塚古墳（10）、八幡塚古墳（8）の3基が現存し、人物埴輪、円筒埴輪の出土が伝えられている。

本田遺跡の北西約5.2kmには、羽生市村君古墳群がある。全長78m、高さ7mの前方後円墳である永明寺古墳（34）を盟主墳として御廟塚古墳（37）、稻荷塚古墳（36）の現存する3基のほか、浅間塚跡、上村君八幡塚跡などの小円墳が存在したと伝えられている。永明寺古墳からは挂甲小札や衝角付胄などの武具、銀象嵌装大刀、鉄鎌などの武器、鉄鋸（工具）や環状鏡板付轡などの馬具と埴輪・土器といった豊富な遺物が発見されており、埼玉県指定史跡に指定されている（羽生市2016）。出土遺物はやや時期幅があり、5世紀末葉から6世紀中葉～後半に位置付けられている。埼玉政権と密接な関わりをもつ地域屈指の首長墓と考えられる。

#### 古代

本田遺跡周辺では、利根川右岸で宮西遺跡（3）（埼埋文2021）や宮東遺跡（4）、長竹遺跡（5）、桶ノ口遺跡（6）、茂手木遺跡（29）、屋敷裏遺跡（32）、米の宮遺跡（38）、利根川左岸では加須市飯積遺跡（23）から古代の集落が検出された。

利根川右岸域では平安時代、特に9世紀～10

世紀にかけての集落が広域に拡散する傾向が認められる。武藏国の末野窯産、南比企窯産、東金子窯産をはじめ、下野国の三毳窯産、常陸国的新治窯産、下総国の三和窯産といった各地の須恵器が出土し、国境の集落を象徴する遺物様相といえることもできる。

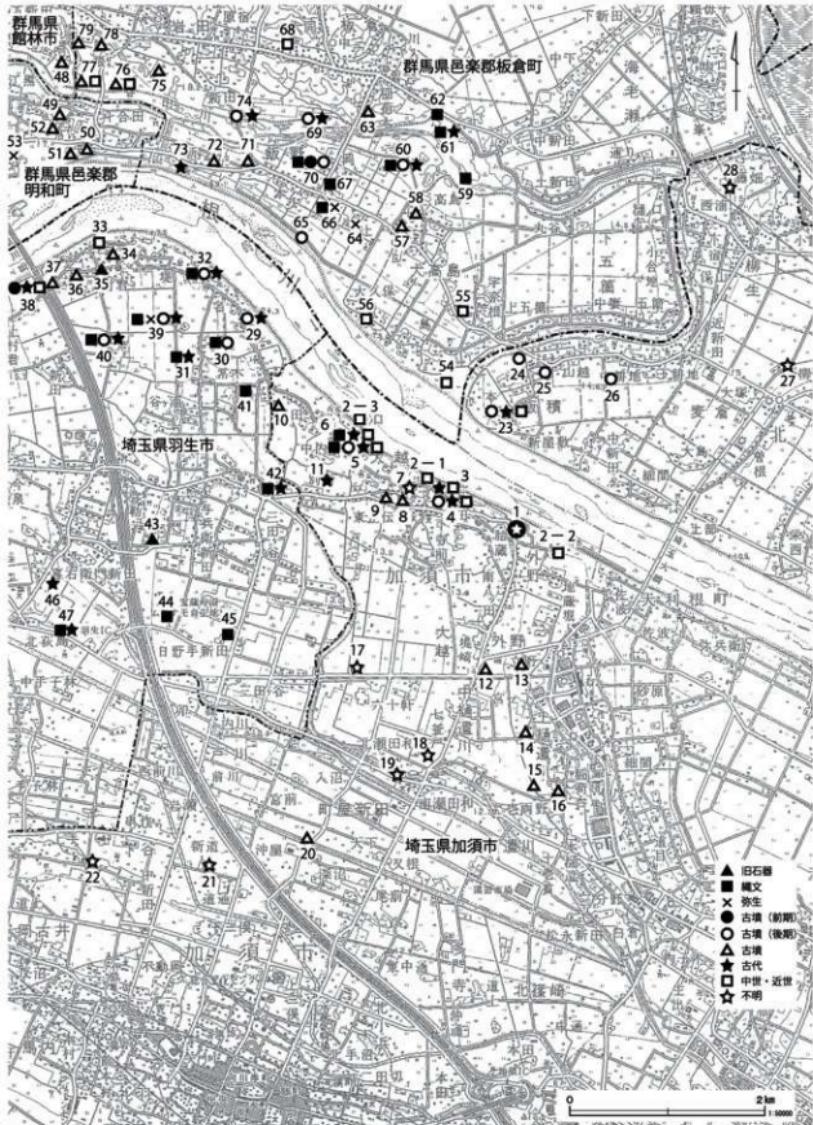
本田遺跡の西側至近距離には宮西・宮東遺跡が位置する。宮西遺跡（3）は9世紀中葉から後半の短期間に営まれた平安時代の集落で、東海地方の「三河型甕」が発見された。

宮東遺跡（4）は古墳時代から続く長期継続型集落で、奈良・平安時代の堅穴住居跡が44軒発見された。10世紀前半まで存続したことが調査で判明したが、中でも弘仁地震に伴う噴砂が床面を覆っていた住居跡、すなわち被災住居跡が確認できたことは特筆されよう。

宮西・宮東遺跡の北西側に位置する長竹遺跡（5）では、8世紀中葉から10世紀後半にかけての堅穴住居跡が57軒検出されている。一時期2～3軒程度の散居的な集落で、10世紀前半に最盛期を迎える。また長竹遺跡の西側に隣接する加須市桶ノ口遺跡（6）でも、10世紀代の堅穴住居跡10軒とほぼ同時期の土器焼成坑が発見されており、注目される（埼埋文2019c）。

北西2.5kmにある羽生市茂手木遺跡（29）からは、9世紀中葉～後半にかけての住居跡が19軒と、10世紀中葉の住居跡が1軒検出された。9世紀中葉～後半の短期集中型の集落が形成された背景として洪水による地形改変が想定されている。9世紀中葉の京都産綠釉陶器碗と、底部に「寺」と墨書された土師器杯が出土した（埼埋文2018b）。

遺跡の北西約3kmにある屋敷裏遺跡からは、9世紀から10世紀前半の住居跡が26軒検出され、他にも掘立柱建物跡1棟、土壙12基、井戸跡6基、畠跡4箇所が確認された。長竹遺跡と同じく10世紀前半に最盛期を迎える集落であり、10世紀初頭の第45号住居跡から、古代の楽器である鉄製口琴



第3図 周辺の遺跡分布

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在	時期	No.	遺跡名	所在	時期
1	本田遺跡	埼玉県 加須市	近世	38	米の宮遺跡	埼玉県 羽生市	古墳・古墳・古代・中世
2-1	旧利根川堤防跡 (大越)		中世・近世	39	天王遺跡		縄文・弥生・古墳(後)・古代
				40	砂田遺跡		縄文・古墳(後)・古代
2-2	旧利根川堤防跡 (外野)		近世	41	坂口遺跡		縄文
				42	三田ヶ谷本村遺跡		縄文・古代
2-3	旧利根川堤防跡 (樋ノ口)		近世	43	内谷遺跡		旧石器
				44	弥勒人馬遺跡		縄文
3	宮西遺跡		古代・中世	45	惣連遺跡		縄文
4	宮東遺跡		古墳(後)・古代・中世・近世	46	内野遺跡		古代
5	長竹遺跡		縄文・古墳(後)・古代・中世	47	高橋遺跡		縄文・古代
			・近世	48	源ノ上古墳		古墳
6	樋ノ口遺跡		縄文・古代・中世・近世	49	栗王寺古墳		古墳
7	正伝木遺跡		不明	50	富士塚古墳	群馬県 館林市	古墳
8	八幡塚古墳		古墳	51	稲荷神社古墳		古墳
9	稲荷塚古墳		古墳	52	愛宕媛古墳	群馬県 邑楽郡	古墳
10	浅間塚古墳		古墳	53	斗合田遺跡		弥生
11	別所遺跡		古代	54	鳥巣途遺跡	明和町	中世
12	石子塚古墳		古墳	55	宇那根中世墓		中世
13	穴吹塚古墳		古墳	56	大久保中世墓	明和町	中世
14	御室塚古墳		古墳	57	大塚山古墳		古墳
15	浅間塚古墳		古墳	58	稲荷神社古墳	群馬県 邑楽郡	古墳
16	稲荷塚古墳		古墳	59	小保呂第1貝塚		縄文
17	中町南遺跡		不明	60	伊勢ノ木遺跡	明和町	縄文・古墳(後)・古代
18	七釜戸遺跡		不明	61	小保呂第2貝塚		縄文・古代
19	下桶遺川遺跡		古墳	62	板倉遺跡	群馬県 邑楽郡	縄文
20	鶴ヶ塚古墳		古墳	63	藤ノ木古墳		古墳
21	下谷遺跡		不明	64	登戸遺跡	板倉町	弥生
22	道上遺跡		古墳	65	城遺跡		古墳(後)
23	飯積遺跡		古墳(後)・古代・中世	66	辻遺跡	群馬県 邑楽郡	縄文・弥生
24	須賀遺跡		古墳(後)	67	岡村遺跡		縄文
25	山越遺跡		古墳(後)	68	宝福寺遺跡	板倉町	中世
26	麦倉遺跡		古墳(後)	69	花和田遺跡		古墳(後)・古代
27	新田遺跡		不明	70	岡西遺跡	群馬県 邑楽郡	縄文・古墳(前・後)
28	藤原遺跡		不明	71	松ノ木古墳		古墳
29	茂手木遺跡	埼玉県 羽生市	古墳(後)・古代	72	中古墳	群馬県 邑楽郡	古墳
30	本宮遺跡		縄文・古墳(後)	73	新村下遺跡		古墳
31	鍋田遺跡		縄文・古代	74	沼田南遺跡	板倉町	古代
32	星敷裏遺跡		縄文・古墳(後)・古代	75	道明山古墳		古墳(後)・古代
33	東堀遺跡		中世・近世	76	八反遺跡	板倉町	古墳
34	永明寺古墳		古墳	77	長良遺跡		古墳・中世
35	谷田遺跡		旧石器	78	筑波山古墳	群馬県 邑楽郡	古墳・中世
36	稲荷塚古墳		古墳	79	船山古墳		古墳
37	御廟塚古墳		古墳				

が出土した。遺跡の西約4.5kmに位置する米の宮遺跡からは、9世紀から10世紀にかけての竪穴住居跡が4軒検出されている。

利根川を挟んだ対岸には飯積遺跡(23)が位置する。古墳時代に最盛期を迎える集落だが、古代の竪穴住居跡も40軒検出され、8世紀初頭から8世紀前半頃の住居跡が大半を占める。右岸集落が

平安時代を中心とするのに対し、奈良時代を中心とする点で対照的である。

西方約6kmに位置する羽生市北尾崎北遺跡では、10世紀代を主体とする集落跡が調査された。この内、10世紀中葉の住居跡からは、八稜鏡と槍先、雁股鏡が出土し、特殊な遺物群が同一住居跡から検出された点で注目される(埼理文2020)。

内陸部には東北自動車道の建設に伴い発掘調査が行われた加須市水深遺跡がある。7世紀末葉～9世紀初頭頃までの49軒の竪穴住居跡と土師器焼成坑（土師器窯址）64基などが発見された。非ロクロ土師器生産を長期にわたって行った集落として著名である。（埼玉県遺跡調査会1972）。

### 中・近世

中・近世は、利根川東遷に伴い利根川堤防が築造される時期にあたる。隣接する宮西遺跡、宮東両遺跡では、計300基を超える多数の井戸跡が検出された。また、「鎌倉街道」の「上道」と「中道」を結ぶ「羽根倉道」と推定される古道が通り、その脇には、真言宗豊山派徳性寺や加須市指定史跡の「小山朝政の墓」とされる宝篋印塔が現存している。この宝篋印塔には貞和元年（1345）の年号が刻まれている。『吾妻鏡』には、小山朝政は嘉禎4年（1238）、84歳で卒去したと記されており、この宝篋印塔が小山朝政に関わるものであるならば、子孫らが建てた供養塔ということになろう。

宮西遺跡の西側に隣接して位置する加須市旧利根川堤防跡（2-1）では、15世紀から16世紀後半にかけての集落や井戸・墓域が調査された。126基もの土壙墓が検出され、人骨や錢貨などが副葬されていた。16世紀後半段階に洪水の被害を受け、その後から築堤工事が始まること、その後現在までに4回にわたって築堤・補強工事が実施されたことが確認された（埼理文2019a）。

その他、加須市内には騎西城跡及び関連する武家屋敷跡が所在している。これまでに溝跡400条以上、土壙1,600基以上、井戸跡200基以上、障子掘5箇所などが調査され、多くの陶磁器類や木製品等の遺物が出土した。主体は16世紀から17世紀前半にかけての時期である（騎西町2001）。

羽生市米の宮遺跡（38）は主に13世紀後半～15世紀前半にかけての遺跡で、四面底の掘立柱建物跡や馬小屋と推定される竪穴状遺構が検出された（埼理文2018c）。

東畠遺跡（33）からは16世紀後半を主体とする遺構が発見され、井戸跡から多数の板碑や石臼、種実類が出土した。また、屋敷の区画溝から多くの近世の陶磁器類とともに鉄鍋、鉄瓶といった鉄物製品が出土した（埼理文2018e）。

利根川の下流側に位置する久喜市栗橋では日光道中栗橋宿の宿場跡や本陣跡、脇本陣跡、関所番士屋敷跡の発掘調査が行われている。番士屋敷跡では、栗橋関所に勤番した番士の屋敷跡が検出された。屋敷跡が築かれていた盛土は18世紀前半以降、洪水対策として徐々に積み上げられ、建物跡が繰り返し建て替えられた様子が確認された（埼理文2018a）。また、栗橋宿跡第1地点からは、移築された久喜市の指定有形文化財「吉田家水塚」に関わる石垣と盛土が調査された（埼理文2018d）。

天明の浅間山噴火（1783）による利根川の河床の上昇の影響で、それ以降洪水が頻発するようになった。栗橋の下河岸が使用できなくなったのもそれが原因であるとともに、利根川中・下流域における水塚増加の大きな要因になったと思われる。埼玉県東部地区文化財担当者会では、行田市から三郷市に至る埼葛・北埼玉地区的水塚の分布調査を実施し、1437件のデータを収集するなかでその特質を明らかにした（東部地区担当者会2013）。利根川対岸の群馬県板倉町でも、水塚が多数残されており、分布調査が実施されている（板倉町2004）。

利根川下流の茨城県五霞町にある新田遺跡では、水塚跡が1基調査された（茨城県教育財团2015）。長軸長18.7m、短軸長17.2mの不整長方形、高さ約2mの規模で、18世紀後半に築造されたことが明らかになった。水塚上に建物は存在しなかつたが、確実に江戸時代中期に遡る初期の事例として貴重である。発掘調査された事例としても本田遺跡、栗橋関所番士屋敷跡と共に稀有な例であり、注目される。

### III 遺跡の概要

本田遺跡は、加須市大字外野字本田203-5に位置する。北側には利根川が南東方向に流れ、利根川右岸の堤防裾まで100mと間近に迫る。遺跡は標高約14.1～14.2mの道路に沿って南北方向に延びる自然堤防上に立地している。

本田遺跡は県道60号（主要地方道羽生・外野・栗橋線）の東側に面した場所にあり、調査面積は591m<sup>2</sup>である。

発見された遺構は水塚盛土1基と建物跡1棟、蔵跡1棟、埋設桶2基、土壙1基、石垣5基、石階段3基、石列1条、排水管3基がある。

水塚自体は元土地所有者の敷地北西部（母屋北西部）にあり、南北長約30m、東西長20mの範囲に残されていた。その内、水塚盛土は調査区北側の南北17.5m、東西20.9mの範囲から検出された。盛土の見かけの高さは1.8～1.9mである。盛土上面には南北12m、東西16mのほぼ台形の平坦面が造り出され、第1号建物跡が建てられていた。

南側の低位面には明確な盛土は確認できないが、周囲の標高に比べて約0.8m高いことから造成・整地作業がなされたと考えられる。ここからは第1号蔵跡が検出された。

南側に蔵、その背後の盛土上に建物が配置されたことがわかる。南北辺と東辺は概ね方位に沿っているが、盛土西辺は道路に沿うように北北西から南南東方向にやや斜行していた。3基の石階段と第4号石垣は南と東側の緩斜面に沿って造られており、盛土（水塚）は崩落したものではなく、当初からの形状をほぼ保っていたと考えられる。

第1号建物跡は、長軸長10.5m、短軸長5.55mのほぼ東西棟の縦柱礎石建物跡である。身舎は大型の方形礎石で区画された範囲と考えられる。4間×2間半の縦柱建物で、南・東・西側にそれぞれ3尺幅の庇が取り付く。規模は桁行長7.3m、梁行長4.5m、面積は32.85m<sup>2</sup>である。身舎の隅柱

と桁行側柱の中央柱に凝灰岩切石を縦置き（柱状）した大型礎石が設置されていた。いわゆる蟻燭地業と考えられ、建物の主柱を支えたと推定される。身舎の東側3尺にある凝灰岩切石の礎石を敷いた建物は手洗い（便所）、その南側の掘り込み（攢乱）は中に含まれていた廃棄物から風呂と考えられる。

身舎の第1列と第2列間の柱間が半間と、柱間が狭いことから、この部分（建物北側の1列～3列）は高床構造（床張り）となっていた可能性がある。

礎石の下には基礎地業が認められた。その構造は、各礎石の下部に多数の石材を積み重ねるとともに、周辺に瓦片や石屑を敷き均していた。土層断面からは明確には確認できなかつたが、平面的には9箇所の瓦敷が検出され（瓦敷1～9）、最も深いものは上面から1.6mまで掘り込まれていた。

第1・2号排水管は南西部の底柱に接続するよう、雨樋を受ける排水管と考えられる。第3号排水管は建物北東端部に位置し、北に傾斜していた。

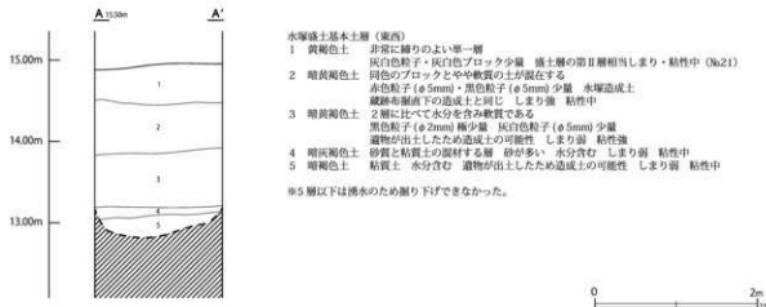
石階段は3基検出された。第1号石階段は盛土東斜面北側にある。第2号石階段は東斜面中央に位置し、建物跡と母屋を最短距離で繋いでいる。第3号石階段は南斜面東寄りにあり、幅広で最も規模が大きいことから、敷地内から建物の正面玄間に至るメインの階段と思われる。

第1号蔵跡は長軸長8.20m、短軸長5.15mの南北に主軸を持つ長方形建物跡で、南妻側は大半が削平されていた。底面には凝灰岩の長方形切石が基礎（土台）として設置されていた。蔵跡の基礎地業は石列毎に帯状の布掘りが設置されていた。深さは0.7m前後である。建物内部からは焼土が多量に出土し、火災により焼失したと推定される。

埋設桶は2基検出された。第1・2号土壙は第



第4図 遺跡位置図（1）



第5図 基本土層

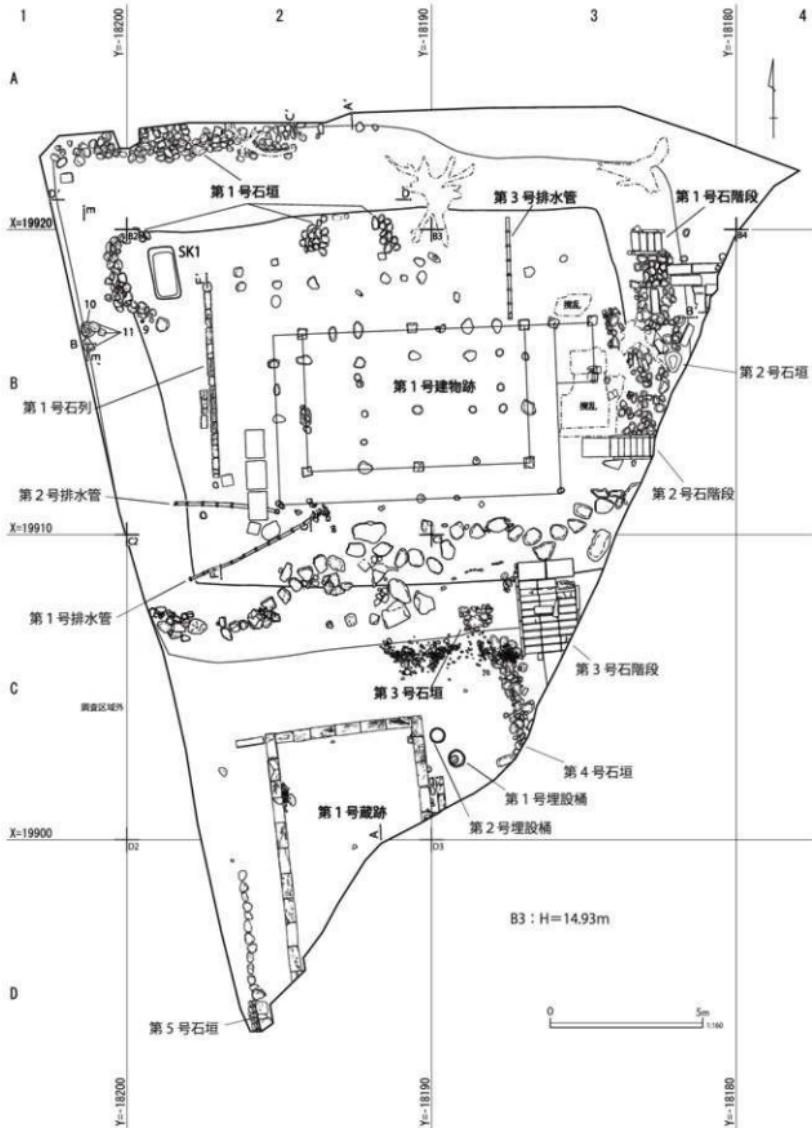


第6図 遺跡位置図（2）

1号蔵跡の東側に近接して位置する。第1号蔵跡同様焼失した状況が認められた。いずれも内部に桶状容器を設置した痕跡が認められた。

土壌は1基あり、盛土北西隅の盛土中から検出された。内部に瓦片が敷かれており、上部に礎石はないが、建物跡の瓦敷の様相に類似していた。また、盛土北西隅には石垣が弧状に巡っており、何らかの構造物が存在した可能性が高い。

第1号建物跡の年代は出土遺物から19世紀後半末葉頃、第1号蔵跡は幕末から明治時代初頭（19世紀後半）と推定され、構築時期に差があることが判明した。水塚の築造時期そのものは不明確であるが、建物の建設とほぼ同時期か、より古いことは確実である。蔵・水塚・建物が一体となって建築されたのではない点が確認されたのは大きな成果といえよう。



第7図 遺跡（水塚盛土）全体図



第8図 遺跡（水塚盛土）空中写真測量図

## IV 遺構と遺物

### 1 遺構と遺物

#### (1) 水塚盛土

水塚盛土の調査は、中央に十字の調査区を設定して掘り下げを行い、土層の記録と石垣・石階段・第1号建物跡の調査を並行して進めた（第7・9図水塚盛土・石垣A-A'、B-B'）。一部にトレンチを追加して土層の記録を行った（第7・9図水塚盛土・石垣（1）C-C'）。

水塚は利根川の自然堤防上に位置し、現在の県道60号沿いに造られている。周辺は、利根川が複数箇所に渡って流路を変えていた場所にあたる。調査当初、旧流路の堤防が水塚下にあり、それを利用して水塚を築いた可能性が想定された。微地形を観察すると、県道60号の東西に低地（水田）が南北方向に入り込んでおり、県道を含めた遺跡とその周辺が微高地になっていることがわかる（第4図）。

調査の結果、旧利根川の堤防を積極的に改変した痕跡は認められなかったが、自然堤防の高まりを利用して造られたことが推定された。水塚は調査区全体を整地・造成した上で、第1号建物跡を建築する予定地である北部に盛土を行い築かれていた。盛土の範囲は、南北17.5m、東西20.9mである。ほぼ方位を揃えて各斜面が形成されており、斜面上には石垣や石階段が設置されていた。これらが斜面に確認されたことから、盛土は一部が崩落や削平を受けているものの、築造当時と大きく変わらなかつたと判断できる。

盛土頂部の平坦面は平面形が台形で、南北辺・東辺が直線的となり方位と概ね軸を揃える。西辺は道路上に沿うように南東方向に斜行する。平坦面の規模は、南北12m、東西16mである。

斜面の構造について観察すると、北側と西側斜面は、東側と南側斜面に比べて傾斜が急である（第8図）。利根川に面する斜面の傾斜を強くするこ

とで、水害時の川の氾濫に備えたと考えられる。

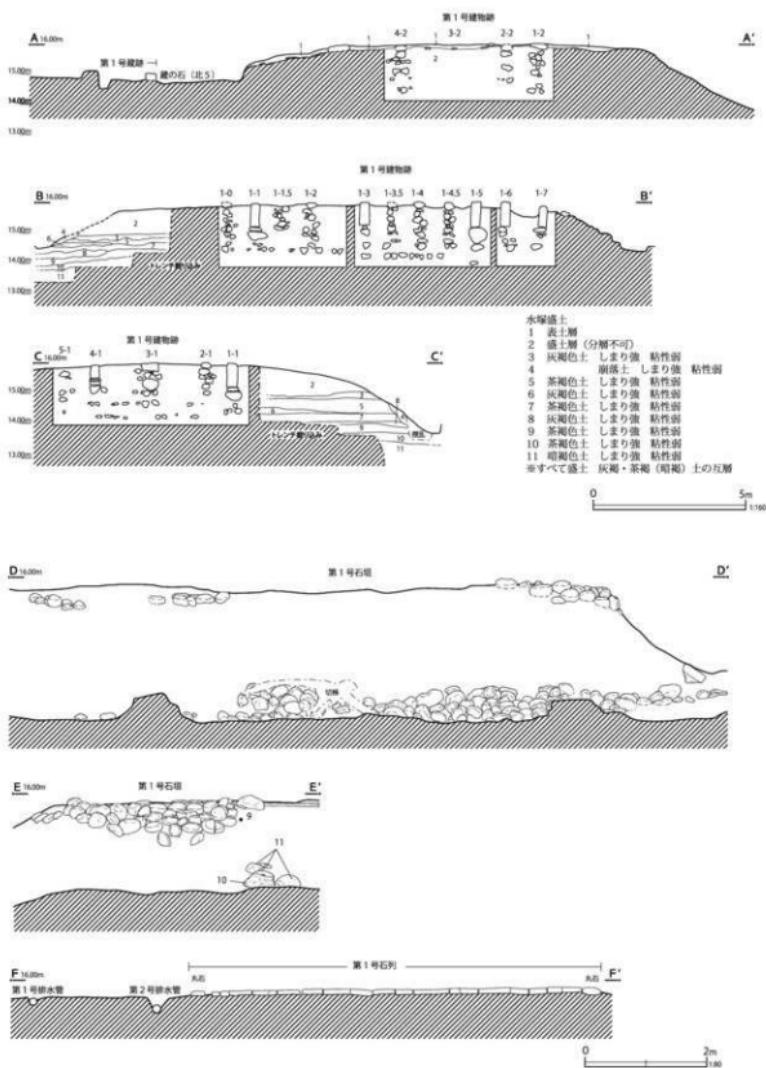
盛土の基本土層（第5図）は第1号建物跡の乗る盛土の南端近くの平坦面で確認した（第8図）。第1層～第3層は黄褐色土系の均質な土で構成され、水平堆積である。また、第3層～5層からは瓦片や櫛鉢細片が出土しており、人為的な造成土の可能性が高い。

水塚盛土は表土層と盛土層の大きく2層に分けられる。第9図B-B'の西側トレンチやC-C'の北部トレンチでは、盛土の細かい水平堆積を確認できたが、中央部は非常に均質な土のため分層できなかった。分層できた箇所も、色調がやや異なる程度の違いで、含有物は少なく砂礫等も認められなかった。部分的ではあるが、水平堆積が確認でき、かつ第1号建物跡の基礎地業の状況から、全体的に水平を意識した盛土方法であると考えられる。

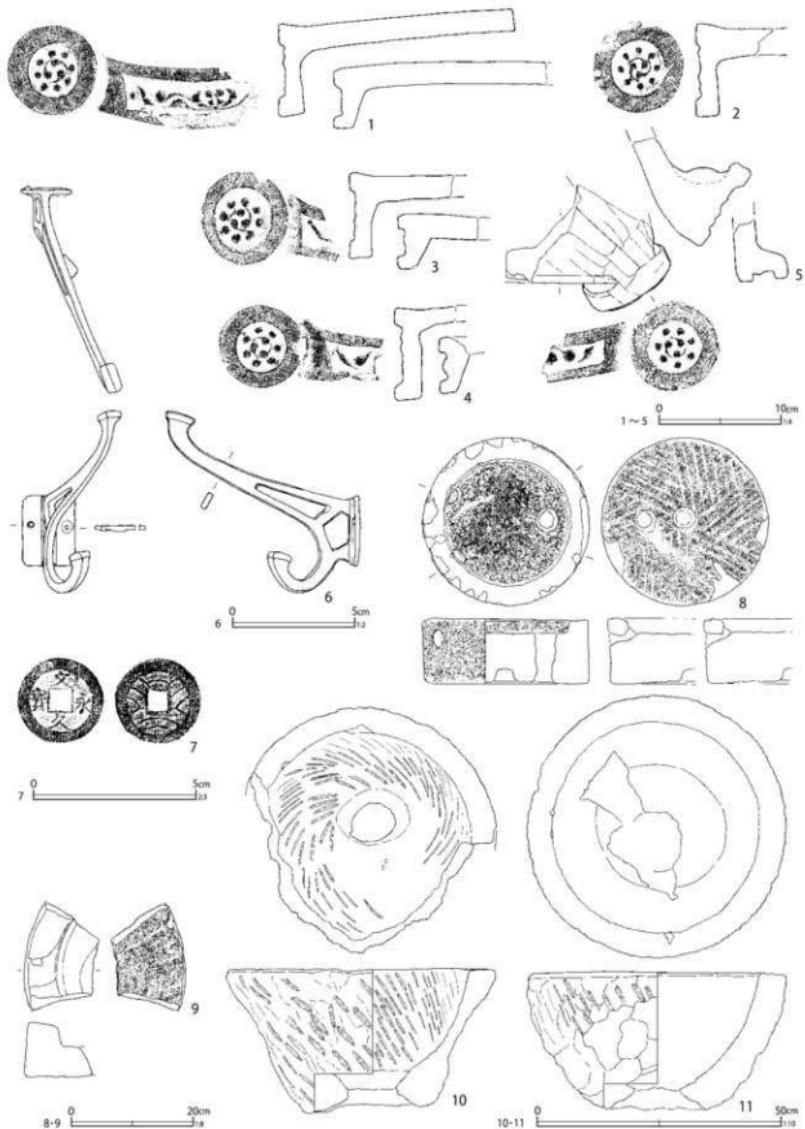
盛土に関連する遺構として、石垣5基、石階段3基、石列1条、排水管3基が検出された。

#### 第1号石列（第7・9図）

第1号石列は、B-2グリッドに位置する。主軸方位はN-2°-Wで長方形の石材が南北方向に2列並ぶ。1列目は13個の長方形石材が並び、その両端に丸石が1個ずつ配置される。2列目は1列目の西側に隣接し、2個の石材が並ぶが、本来は1列目と同等の規模の列が存在した可能性がある。石材は所々破断し、規模は長軸長6.74m、短軸長0.53m（石材1個の長さは約0.2m）である。個々の石材は長方形に加工されており、上面端部は丸みを帯びる。石材下に掘り方ではなく、単に盛土上に置かれた状態であった。性格は明らかではないが、第1号建物跡と方位を揃えること、傾斜の変換点に位置することから土留め、または区画施設と推定される。遺物は出土しなかつた。



第9図 水堀盛土・石垣断面図



第10図 水塚盛土出土遺物

第2表 水塚盛土出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	重さ	胎土	焼成	色調	備考	団版
1	瓦	軒桟瓦	19.4	[20.5]	1.9	[10.2]	—	CIK	普通	灰白	八連珠左巻三巴文 銀化 燐す 同文別個体4あり	
2	瓦	軒桟瓦	[6.3]	[7.6]	—	[7.7]	—	CEIK	普通	灰白	八連珠右巻三巴文 燐す 銀化	
3	瓦	軒桟瓦	[9.1]	[14.6]	2.0	[7.0]	—	EHIK	普通	灰白	七連珠右巻三巴文 燐す 弱く銀化	
4	瓦	軒桟瓦	[5.3]	[11.6]	—	[7.7]	—	EIK	普通	灰白	八連珠右巻三巴文 燐す 銀化	
5	瓦	隅瓦	[10.3]	[13.4]	1.8	[7.9]	—	CIK	普通	灰白	七連珠右巻三巴文 上面ミガキ状光沢 燐す	25~3
6	銅製品	掛金具	鍵7.4	横7.9	厚さ0.2		40.8	—	—	北西 亞みあり 取付釘1(鉄製)一部残存	25~11	
7	銅製品	錢貨	径26.2mm	厚さ1.0mm			3.4	—	—	表採 文久永寶	25~12	
8	石製品	石臼	径27.9	高さ10.7			11500.0	—	—	安山岩 上臼 下面擂目 平穿孔1 穿孔3	25~16	
9	石製品	石臼	[17.3]	[12.3]	—	8.9	2117.0	—	—	安山岩 Nai 上臼 下面擂目 (摩滅)	26~1	
10	石製品	石鉢	口径 (66.8)	器高 29.4	底径 (22.8)		24000	—	—	安山岩 Nai 内外面サキノミ状工具痕か 底面磨耗 底部穿孔		
11	石製品	石鉢	口径 43.8	器高 28.2	底径 (20.4)		38500	—	—	安山岩 Nai・4・5・6 外面サキノミ状工具痕か 内面・口縁端部研磨か 底部穿孔		

## 第1～3号排水管（第7図）

排水管は、盛土の南西部と北東部から計3基検出された。いずれも土管を接続したもので、本来は第1号建物跡に接続していたと考えられる。

第1号排水管は、B-2・C-2グリッドに位置する。主軸方位はN-63°-Eで、北東から南西方向に排水される配管となっている。規模は長さ4.8mである。遺物は検出されなかった。

第2号排水管は、B-2グリッドに位置する。主軸方位はS-86°-Eで、東から西方向に排水される配管となっている。規模は長さ3.4mである。遺物は検出されなかった。

第3号排水管は、A-3・B-3グリッドに位置する。主軸方位はN-3°-Wで、ほぼ南北軸をとり、傾斜に沿って南から北方向に排水される配管である。規模は長さ3.3mである。土管単体の規格は、長さ50cm、直径16cmである。

第1号排水管と第2号排水管は、第1号建物跡の庇を受ける南西隅の礎石列に接することから、雨樋を受けた排水管と想定される。一方、第3号排水管は、建物跡北東隅にあり、北側桁行を構成する礎石列に接する。建物水回りに関わる排水管の可能性がある。いずれの排水管も、盛土を浅く掘り窪めた中に設置されていた。端部に昭和時代以降の管が接続されるといった変更が施されていたことから、第1号建物跡の建設に伴い設置され

て以降、廃絶するまで使用されたと推定される。遺物は出土しなかった。

盛土からは磁器385.2g、陶器253.1g、土器75.6g、丸瓦1088.6g、軒桟瓦8245.8g、道具瓦1298.6g、銅製品44.2g、石製品76117gが出土地した。

盛土表採・盛土表土の遺物は盛土の遺物として取り扱った。陶磁器は出土量が極めて少ない上、近・現代遺物が混在するため、出土遺物から盛土構築時期を判断することはできなかった。

第10図は盛土から出土した遺物で、瓦（1～5）・銅製品（6）、銭貨（7）、石製品（8～11）である。1～4は黒色素焼きの軒桟瓦で、いずれも江戸式瓦に類似する文様構成をもつ。5は隅瓦で上面にはヘラナデ調整がある。6は銅製掛金具、7は文久永寶（1863年初鋤）である。

8・9は安山岩製石臼の上臼で、8は側面上部から内底面まで届く貫通孔が2箇所ある。また、内底面と外下面はビシャン仕上げ状、内側面と外上面には小タタキ仕上げ状に、平行する斜めの線状痕が認められる。

10は灰色粗粒の安山岩製石鉢で、外面には切石石材等によくみられるツルハシ状工具痕に類似した長さ5.0～5.5cm前後の工具痕が廻っている。工具による整形は底部側から口縁部側に向かって放射状に施されている。内面には放射状に広がる長

さ4.2cm前後、幅0.6cm程度のサキノミ状工具痕が残り、内面全面が平滑である。底部には穿孔がある。11は灰色粗粒の安山岩製石鉢で、外面上位には10と同様の工具痕が廻っている。外面下位の工具痕は不明瞭で、粗割成形状となっている。内面は一部が滑らかになっている。成形は底部側から口縁部側に向かって放射状に施されている。底部には穿孔がある。

## (2) 石垣・石階段

### 第1号石垣（第7図）

第1号石垣はA-1・2、B-1・2グリッドに位置する。盛土北西部の頂上端部と盛土頂上北辺中央付近、北辺裾、西辺に沿って検出された。盛土北西部、北辺裾、盛土北辺中央部の大きく3箇所に分かれる。全体の分布範囲は長さ11.43m、幅6.8m、高さ2.33mである。

径20～50cm大の河原石状の自然礫（円礫）をランダムに積んでいた。北辺では裾から5段程度は確認できるが、それより上部は崩落したためか不明である。北辺中央部の礫が石垣の一部か否かも不明である。また、西辺裾からは2個の石鉢（第10図10・11）が出土した。使用後、斜面に廃棄したものであろうか。

盛土上の北西部隅角には円礫が長さ約3.5mに渡って弧状に配置されていた。聞き取りではかつて水塚北西部に稲荷社が祀られていたとのことである。正確な位置関係は不明ではあるが、第1号土壙とした瓦敷きとほぼ重なる位置関係と推定される。いざれにせよ、石垣の一部は建物（稲荷社？）を囲む区画施設であった可能性がある。遺物は出土しなかった。

### 第2号石垣（第11図）

第2号石垣はB-3グリッドに位置する。盛土東斜面から、第1・2号石階段に挟まれる形で検出された。石垣の分布範囲は長さ7.05m、幅4.1m、高さ1.35mである。崩落した石材が多く、確実に原位置を留めていたのは、第1号石階段隣接

部に限られていた（第11図H-H'）。扁平な自然石を「乱積み」に積んでおり、表面は「打込接ぎ」のように比較的平坦に面揃えしていた。遺物は出土しなかった。

なお、この石垣の西側からは砂で埋め戻された3箇所の搅乱が発見された。内部から便槽や風呂場に敷かれたタイル、これに接続されていたと思われる管が存在したため、第1号建物跡に付属した風呂・手洗い関係の施設と考えられる。

### 第3号石垣（第12図）

第3号石垣はC-3グリッドに位置する。第3号石階段の西側、盛土南部の斜面から検出された（第12図）。礫の分布範囲は長さ1.15m、幅0.9m、高さ0.55mである。斜面のごく狭い範囲から礫が確認されたのみで、大半は崩落していた。石垣は径10～50cmの自然礫を乱積みしていた。遺物は出土しなかった。

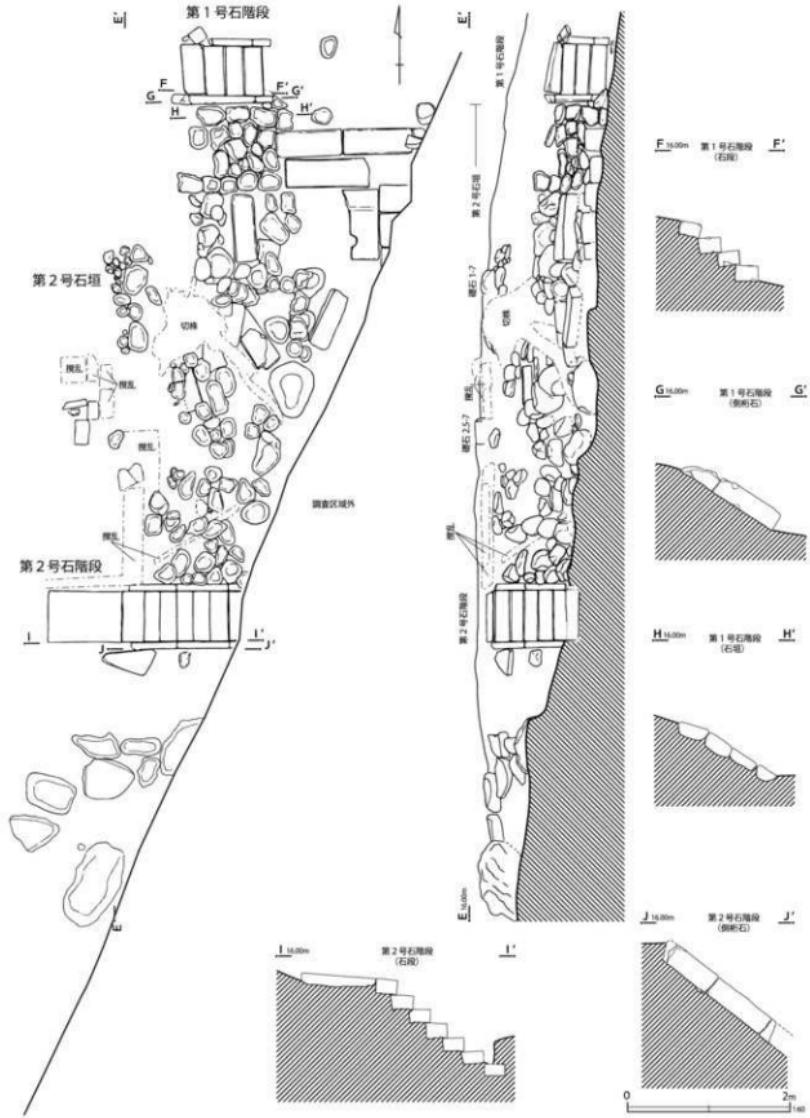
### 第4号石垣（第12図）

第4号石垣はC-3グリッドに位置する。第1号蔵跡東部の斜面から検出された（第12図）。検出された石垣の分布範囲は長さ4.35m、幅1.85m、高さ0.5mである。

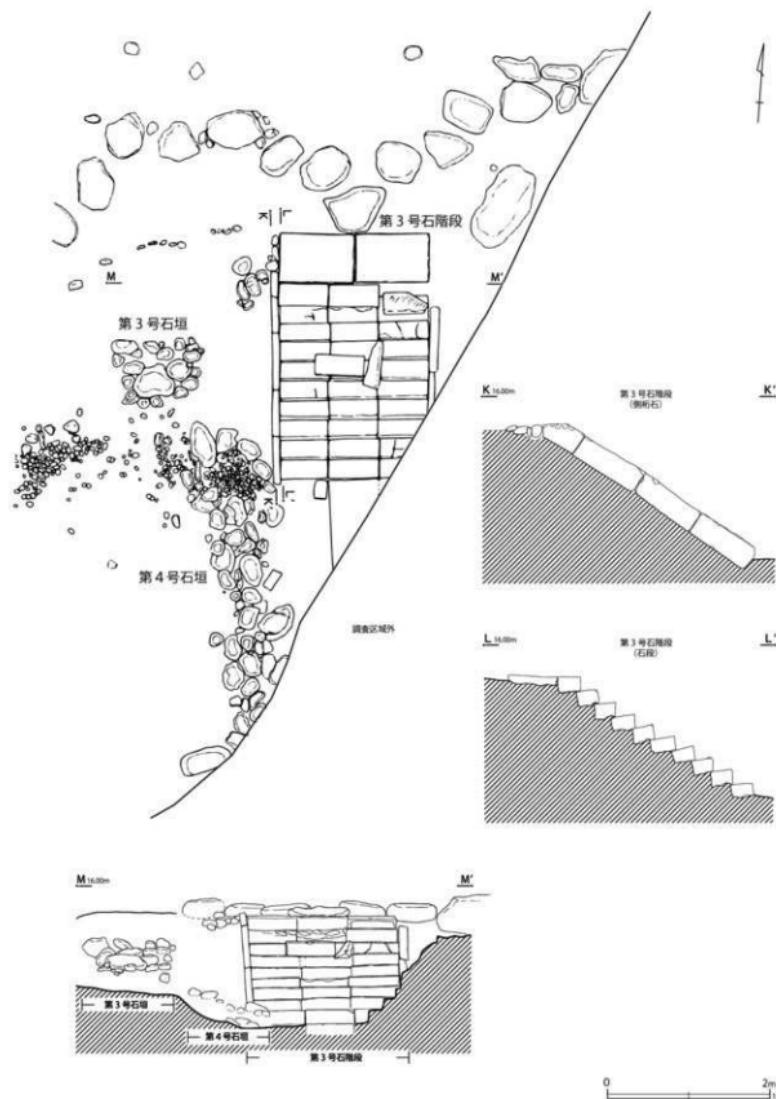
この石垣は、第1号蔵跡と第3号石階段を区画する。第3号石階段の西側桁に沿って南北に礫が積まれていた。礫は直径20～60cm大の自然礫である。北側は石階段の基底部から3段目付近をトップに、南側は石階段に沿って調査区外に延びていた。遺物は出土しなかった。

### 第5号石垣（第31・33図）

第5号石垣はD-2グリッドに位置する。第1号蔵跡西側斜面から検出された。第1号蔵跡と一緒に調査を進めたため、図は第31・33図に掲載した。分布範囲は長さ8.7m、幅0.8m、高さ1.1mである。この石垣は水塚と西側の県道60号線を区画する位置にあたることから、本来は敷地境となっていた可能性がある。全体は礫を1段設置するのみだが、南端部のみ5段前後の石積みが認め



第11図 石垣・石階段 (1)



第12図 石垣・石階段 (2)

られた。最上段と礫が1段しかない箇所は、礫を一列並べるだけの構造で、南側の石積みに比べて簡素であることから、後世に付け足された可能性がある。なお、第1号～第5号石垣には礫を設置する際の裏込めではなく、直接礫を設置していた。

#### 第1号石階段（第11図）

第1号石階段はB-3グリッドに位置する。水塚盛土の北東部斜面から、第2号石垣に接する形で検出された（第11図）。主軸方位はN-90°で東西方向に向く。

規模は長さ1.25m、幅0.8m、高さ0.75mである。階段の構造は、踏み段となる4段の切石（長さ0.6m（2尺）×幅0.3m（1尺）×厚さ0.18m（6寸））を置き、側枠に板石（長さ0.85m（2尺8寸）×幅0.25m（約8寸）×厚さ0.09m（3寸））を設置する。石材は凝灰岩と推定される。本来は盛土頂部まで5段目以降も設置されたと考えられるが、崩落していた。遺物は出土しなかった。

#### 第2号石階段（第11図）

第2号石階段はB-3グリッドに位置する。第1号石階段の南6mに平行して位置する。水塚盛土の東部斜面にあり、第2号石垣に接する（第11図）。主軸方位はN-90°で東西方向に向く。

規模は長さ1.47m、幅0.8m、高さ1.1mである。東側は調査区域外に延びる。構造は、踏み段となる7段の切石を置き、側枠に板石を設置する。各石材は第1号と同じ大きさである。階段の最上部には、1枚の板石（長さ0.9m（3尺）×幅0.6m（2尺）×厚さ0.15m（5寸））が置かれ、踊り場としていた。遺物は出土しなかった。

#### 第3号石階段（第12図）

第3号石階段はC-3グリッドに位置する。水塚盛土の南東部斜面から、第3・4号石垣に接する形で検出された（第12図）。主軸方位はN-3°-Wでほぼ南北方向に向く。

規模は長さ3.1m、幅2.05m、高さ1.45mである。南東部は調査区域外に延び検出できなかった

が、最下段から最上段まで完全に遺存していた。

階段の構造は、南北方向に踏み段となる10段の切石を置き、側枠に板石を設置する。この階段のみ、各段に切石を3枚並べ踏み段を幅広くしていた。階段の最上部に2枚の板石、最下部に1枚の板石（長さ1.1m以上（4尺か）×幅0.6m（2尺）×厚さ0.1m以上）が置かれ、踊り場を構成する。踏み段と最上部踊り場の石材規格は、他の階段とはほぼ同様である。遺物は丸瓦が1点出土した。

いずれの階段も裏込めは認められず、盛土を削り込み石材を設置していた。

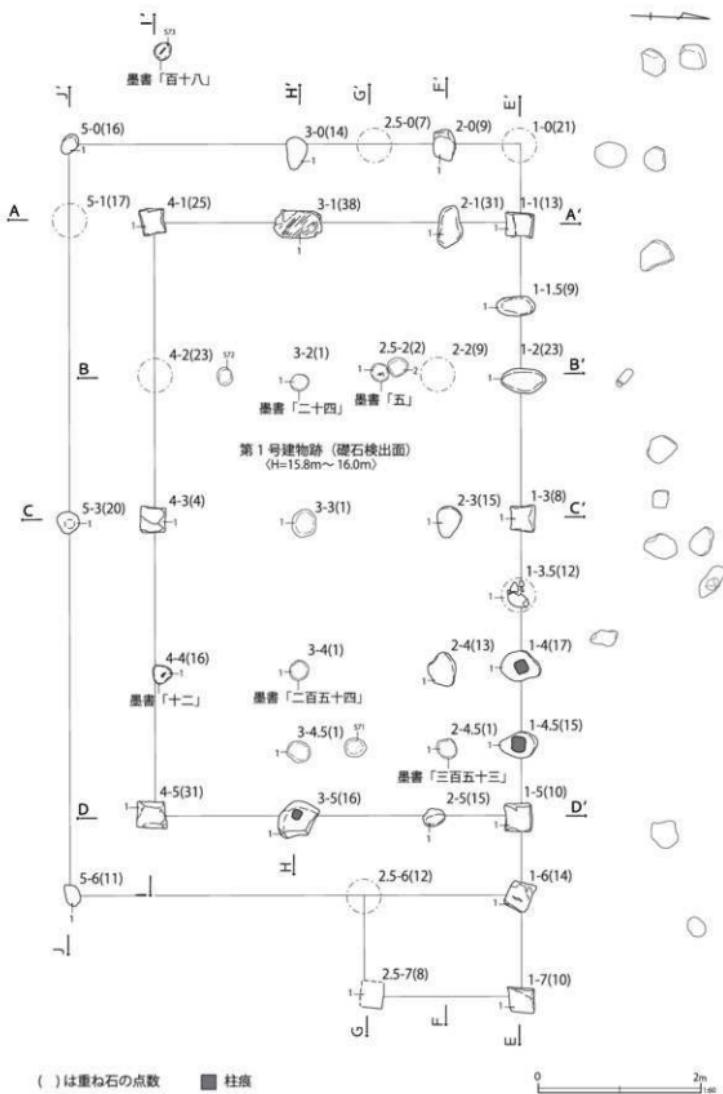
石階段は水塚と敷地内を行き来するための施設であり、盛土の東側と南側に限定して造られた。第3号石階段が最も規模が大きいことから、第1号建物跡と敷地内を結ぶ正面階段と考えられる。第3号石階段を上った先には、長さ0.6～1.0mの扁平な大型礫が、飛び石状に第1号建物跡の南側に配置されていた。建物の正面玄間に統いていたと考えられる。なお、飛び石上の石列は蛇行して西に延びているが、斜面にある石材は小さく、二次的に移動した可能性がある。

#### （3）建物跡

##### 第1号建物跡（第13図～第23図）

第1号建物跡は、調査の序盤で水塚盛土を遺構確認した結果、礎石が検出された。これらの礎石は、南北軸・東西軸をとり、方形の大型石材と円形の石材が配置された状況が確認された。また、この周辺にも複数の石が配置されていた。

こうした状況を踏まえ、方形の大型石材に囲まれた範囲を身舎と想定し、礎石に番号をつけた。番号は北西隅の方形石材を「1-1」とし、東方向に「1-1.5、1-2、1-3・・」と枝番を付した。そして南側に列が移るに従い、「2-1」、「3-1」と頭番号を変え、「5-1」列までの番号を付けた。ただし、調査の進行に従い、建物跡に関連する礎石が増えた結果、「1-1～5-1」列の西側に「0」の枝番（1-0、2-0等）を付けるとともに、「2.5-0～2.5-7」と



第13図 第1号建物跡（1）

いう第2列と第3列の中間の列を追加した。

第1号建物跡の基礎地業中では、複数の石材が礎石下で積み重ねられた状況が確認された。これらについては、「1-1-No1」、「1-1-No2」、「2-2-No1」、「2-2-No2」という様に、礎石ごとに石材番号を振った。また、各礎石の範囲から外れた石も確認され、これらは「S1」、「S2」と単独の石番号を付けた。

基礎地業については、礎石を取り囲むように瓦片を敷き詰めた箇所が計9箇所確認され、それぞれ「瓦敷1」～「瓦敷9」の名称を付した。瓦敷は複数面確認され、瓦敷6で4面検出されたことを基準として、これに対応するように第1面～第4面の番号を付した。

調査は、水塚盛土中央に設定した十字調査区とともに、各礎石列の南側（一部北側）と東側を掘り下げ、礎石と基礎地業の堆積状況、遺物出土状況を確認しつつ、記録を作成した。平面図は、最上面の礎石検出状況とともに、基礎地業の瓦敷検出面を基準として、石材と瓦敷の検出状況を計6枚に示した（第13図～第18図）。遺物は、瓦敷の各面（最大4面）から集中して出土した（第22図・23図）。石材の一覧表は本報告では割愛した。

第1号建物跡は、B-2・B-3グリッドに位置する。盛土上に造られ、建物全体の規模は、長軸長10.5m（5間5尺）、短軸長5.55m（約3間）である。長軸方位はN-87°-Eで、ほぼ東西棟の建物である（第13図）。

身舎は4間×2間半の総柱建物で、南、東、西側にそれぞれ3尺幅の下屋または庇が取り付く。身舎の規模は、桁行長7.3m（4間）、梁行長4.5m（2間半）、平面積は32.85m<sup>2</sup>である。桁行の柱間は一間を基本とするが、部分的に三尺間隔の箇所がみられる。特に、北側桁行（1列）では1-2と1-3間を除き、すべて三尺間隔の柱間で堅牢な構造となっている。身舎桁行と中間柱は凝灰岩切石を鉛直方向に据えたいわゆる「蠶燭地業」である。2列と4列は1間間隔で礎石を設置し、鉛直

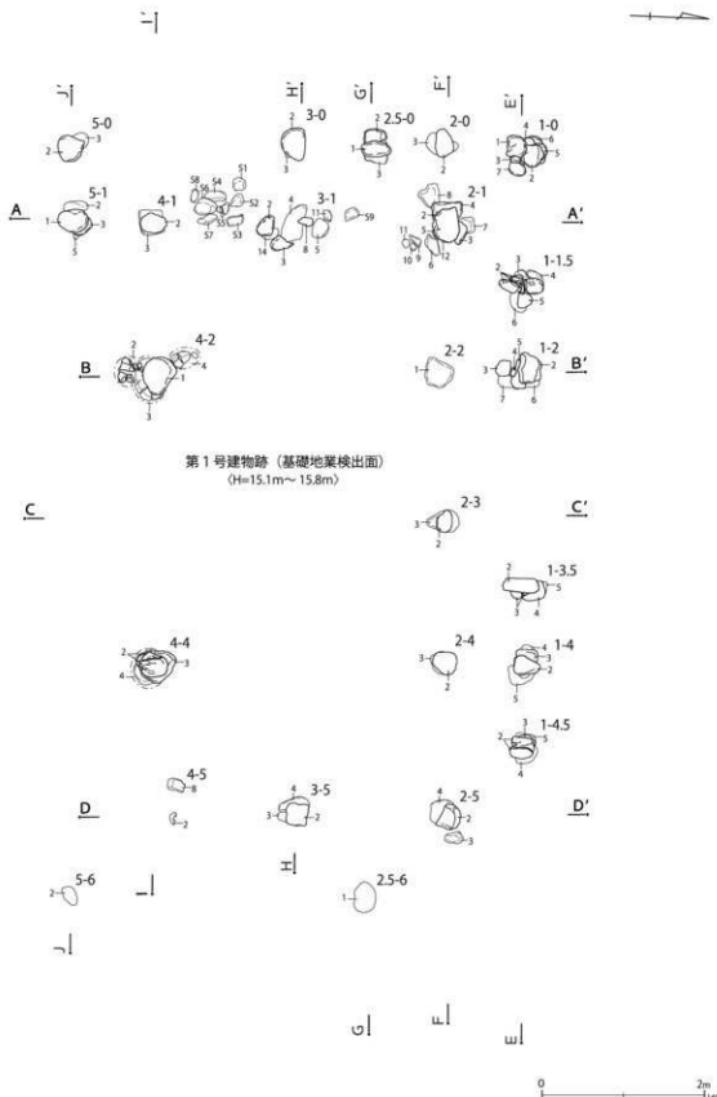
方向に扁平な石を重ねる「重ね石地業」とも言うべき構造を採用している（2-4.5を除く）。

一方、3列桁行の妻桁以外の礎石（3-1～3-4.5）は「重ね石地業」は採らず、1個の置石で対応している。梁行は1列と2列間は三尺、それ以外は一間を基本とする。側柱・妻柱以外は簡単な礎石構造である。

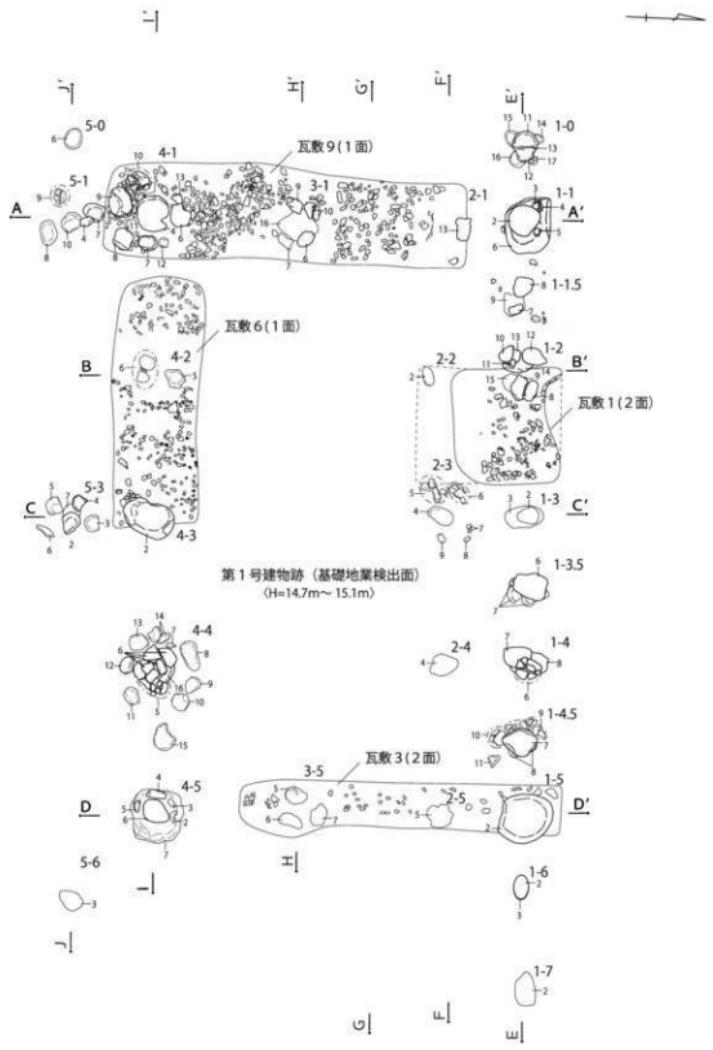
建物内部の間取りについて詳細は不明であるが、北東部（1-4.5と1-5の間）に第3号排水管が位置することから、建物北東部に水回り（台所）が設けられていたと推定される。建物構造が二階建てか平家であったのかは不明であるが、1列から3列までの柱間が一間半と南側と異なり、床束を支えたと推定される礎石が存在することから、建物北側はより耐荷重の高い二階建て構造であった可能性もある。礎石1-2と4-2間、1-4と3-4間、1-4.5と3-4.5間は簡易な東石が設置されており、床張り（高床）構造であった可能性がある。

加須市の古民家では建物中央から東側に入口が付き、その奥に土間と台所が付く例が多い（加須市1990）ことから、南側桁柱4-3と4-4間に玄関、その奥（北側）が土間となろうか。建物西半は床張り（座敷）と推定される。建物跡南側には第3号石階段から飛び石状に配置された平石が並んでいる。石階段からも近く、建物に最も接近する飛び石の位置を考慮して、4-3と4-4間に正面玄関があつたと想定しておきたい。また、北桁行の1-4と1-4.5礎石、東妻側の中間柱3-5では上面に柱痕（変色部位）が確認された。

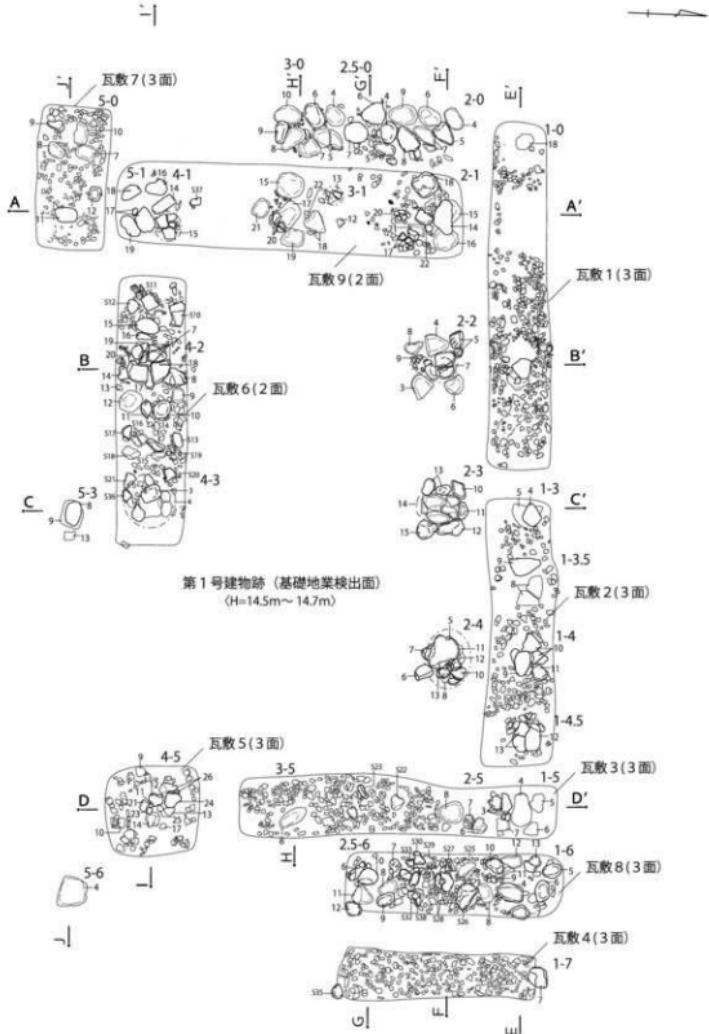
建物北東側には4尺×6尺の付属する建物が取り付く。礎石1-6、1-7、2-5-7は堅牢な蠶燭地業である。2.5-6は上面の石は抜かれていたが、「重ね石地業」が確認された（断面E-E'・G-G'）。この付属施設の範囲内に、砂で埋め戻された跡（搅乱とした）が位置し、手洗い（便所）が設けられていた可能性がある。また、その南側にも同様人為的に埋め戻された痕跡（搅乱）があり、廃棄物



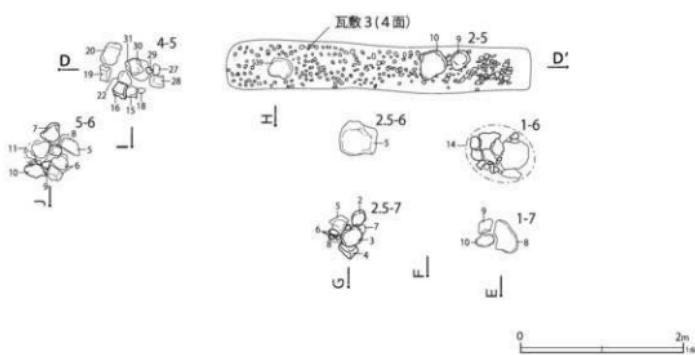
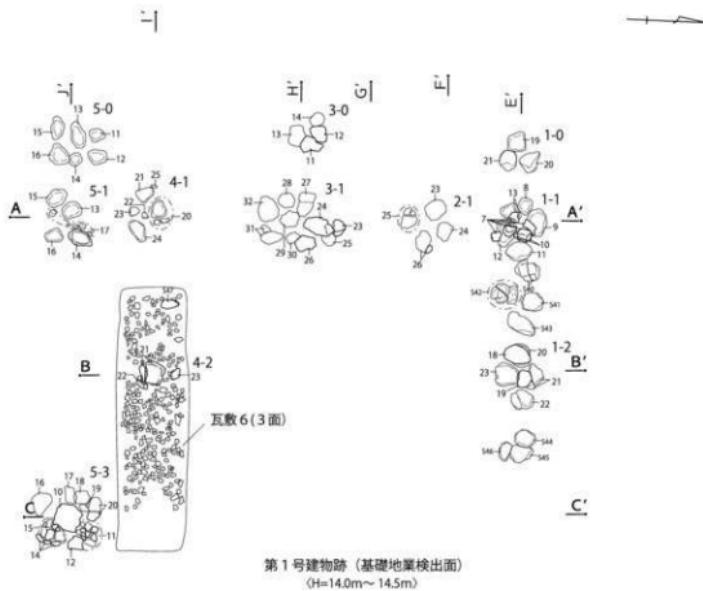
第14図 第1号建物跡 (2)



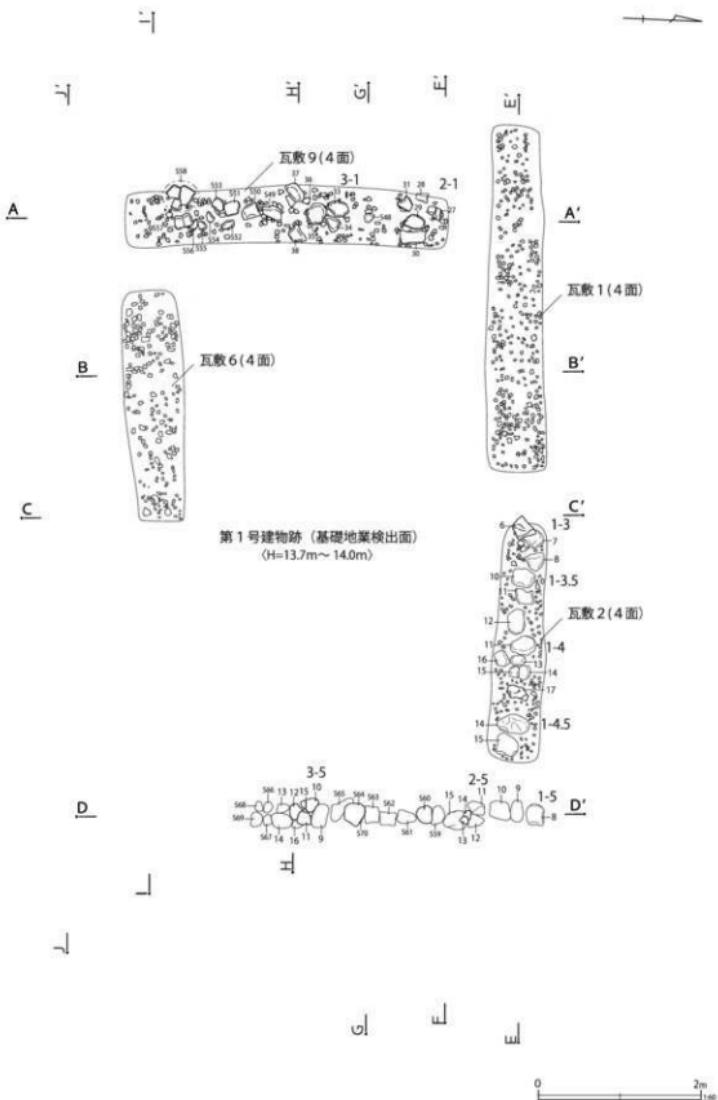
第15図 第1号建物跡（3）



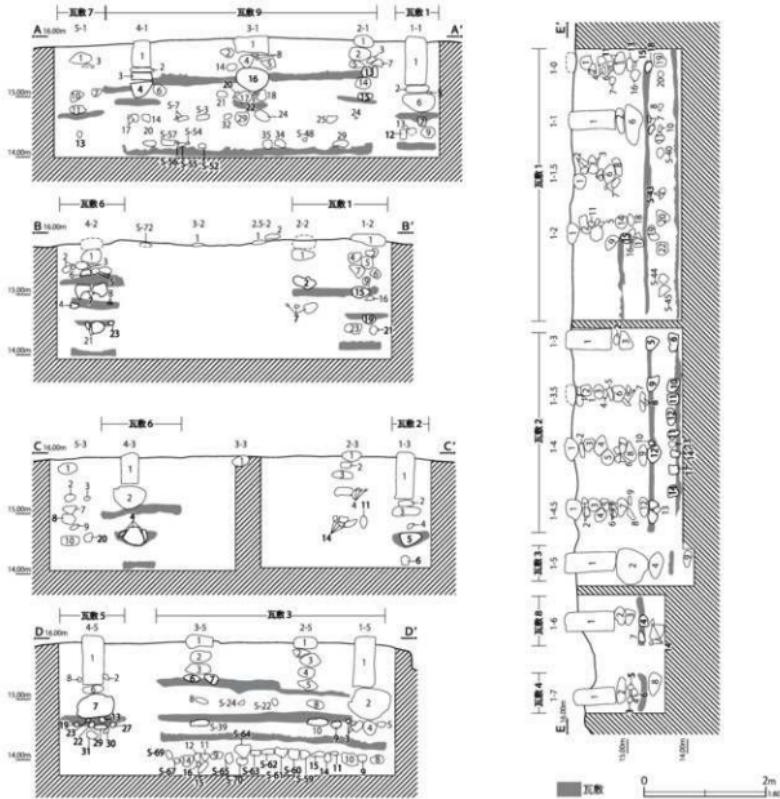
第16図 第1号建物跡 (4)



第17図 第1号建物跡（5）



第18図 第1号建物跡 (6)



第19図 第1号建物跡（7）

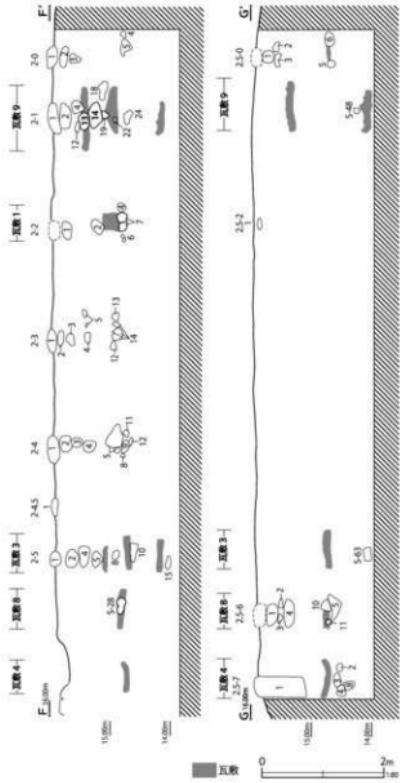
から風呂だったと考えられる。

礎石は、基礎地盤中に使われた石材を含めて582点検出された。

石材の内訳は、黒色溶岩石（243点41.7%）、砂岩（94点16.1%）、凝灰岩（79点13.5%）、赤色溶岩石（18点3%）、チャート（15点2.5%）、角閃石安山岩（10点1.7%）、花崗岩（5点0.8%）、片岩（4点0.6%）、黒色石（2点0.3%）、赤色石（1点0.1%）、その他不明（111点19%）と様々だが、黒色溶岩石の割合が高かった。

加工の度合いは、未加工（465点79.8%）、加工あり（44点7.5%）、割石（19点3.2%）、切石（10点1.7%）、加工屑（22点3.7%）、転用（8点1.3%）、不明（14点2.4%）と未加工が大半である。加工を施す石材は凝灰岩に多い。

最上面の礎石に注目すると、1-1-No.1、1-3-No.1、1-5-No.1、1-6-No.1、1-7-No.1、2.5-7-No.1、4-1-No.1、4-3-No.1、4-5-No.1の9点は、凝灰岩を直方体に加工した大型の礎石で、垂直方向に設置していたことから、いわゆる「蠍燭地業」と考えられる。大



第20図 第1号建物跡（8）

きさは、平均で長さ（南北方向）0.32m（1尺）、幅（東西方向）0.28m（9寸 $\frac{1}{2}$ 尺か）、厚さ（鉛直方向）0.76m（2尺5寸）である。この規格は第1号蔵跡の基礎に使用された石材とほぼ同じであり、注意される。これらは身舎の隅角と桁行の中央に配置され、荷重の掛かる主柱を支えたと考えられる。

その他の礎石は、切石の3-1-No.1を除き、円形や不定形の自然石が使用されていた。

墨書の記された礎石は6点ある。2-4.5-No.1

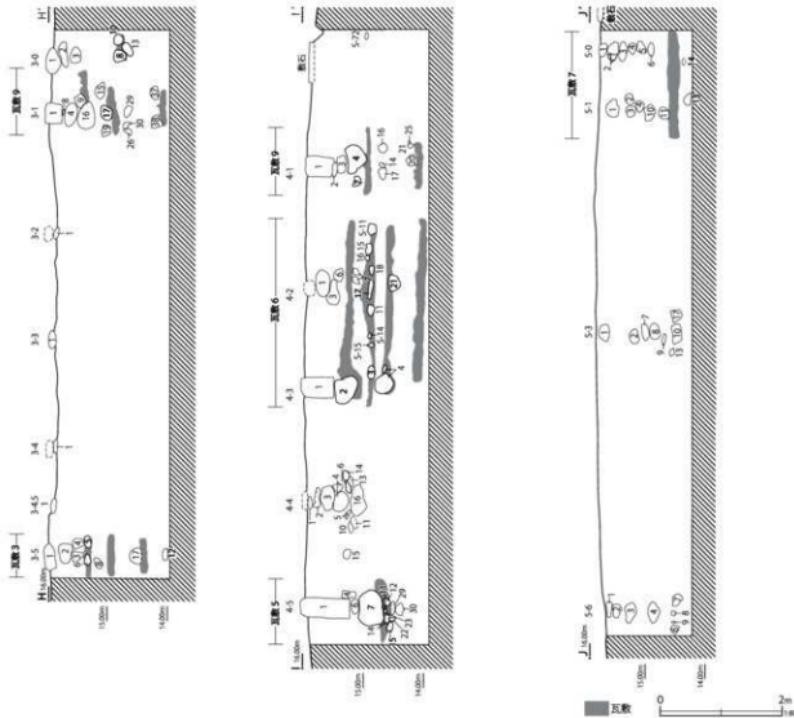
は「三百五十三」、2.5-2-No.1は「五」、3-2-No.1は「二十四」、3-4-No.1は「二百五十四」、4-4-No.1は「十二」、S73は「百十八」と、いずれも漢数字が記されていた（第13図）。墨書礎石は縦に重ねられた礎石の中では最上面にあるという共通性はあるが、柱の配列を示すような規則性は読み取れず、現状では意味は不明である。なお、1-4-No.1、1-4.5-No.1、3-5-No.1の礎石表面には柱を据えた痕跡が陰影として転写されていた。

礎石は38箇所、509点検出された。各礎石に使用された石材数は第13図に○内に示した。例えば3-1（38）では3-1に位置する礎石では38点の石が重ねて使用されたことを示した。その他、礎石に該当しない石材は73点あった。

礎石に使用された石材数の平均は1箇所13点だが、3-2～3-4.5は1点に対し、3-1は38点、4-5は31点と差が大きい。3-2～3-4.5、2-4.5の他、2.5-2は2個使用しているが、並列しており、実質的には1個使用と同じである。これらは簡易的な礎石、床張りの東石と考えるのが妥当と思われる。

礎石下には基礎地業が検出された。その構造は、各礎石下に多数の石材を積み重ねるとともに、周辺に瓦片や石屑を敷き均していた。土層断面からは布掘りや壠堀といった掘り方の立ち上がりを確認することができず、石材の積み上げ順序や瓦片・石屑の堆積を確認するにとどまった。平面的には瓦片・石屑の範囲を確認できた。

各瓦敷は隅丸方形ないしは隅丸長方形で、1～4箇所の礎石を囲んでいた。最も深い箇所で礎石の上面から深さ1.6m（礎石1-5）あり、全体が盛土中に位置する。瓦敷は10～20cmほどの厚さで瓦片・石屑が敷き詰められていた。瓦片が主体で、石屑のほか、陶磁器等の遺物が混じる。瓦は軒丸瓦・軒棟瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦・鬼瓦・赤瓦を5cm前後の大きさに破碎したもので、法則性を見出すことはできなかった。



第21図 第1号建物跡（9）

瓦敷が検出された面は最大4面あるが、各面の標高はおおよそ共通していた。礎石4-2を基準とすると、第1面は標高15.45m、第2面は標高15.25m、第3面は標高14.95m、第4面は標高14.6mである。

瓦敷1は、礎石1-0～1-2の範囲に位置する。平面範囲は長軸長4.3m×短軸長0.75mで、東西方向に主軸をとる。計3面が検出された。礎石ごとの基礎地業最低面までの深さは、1-0は1.35m、1-1は1.33m、1-1.5は1.28m、1-2は1.35mである。

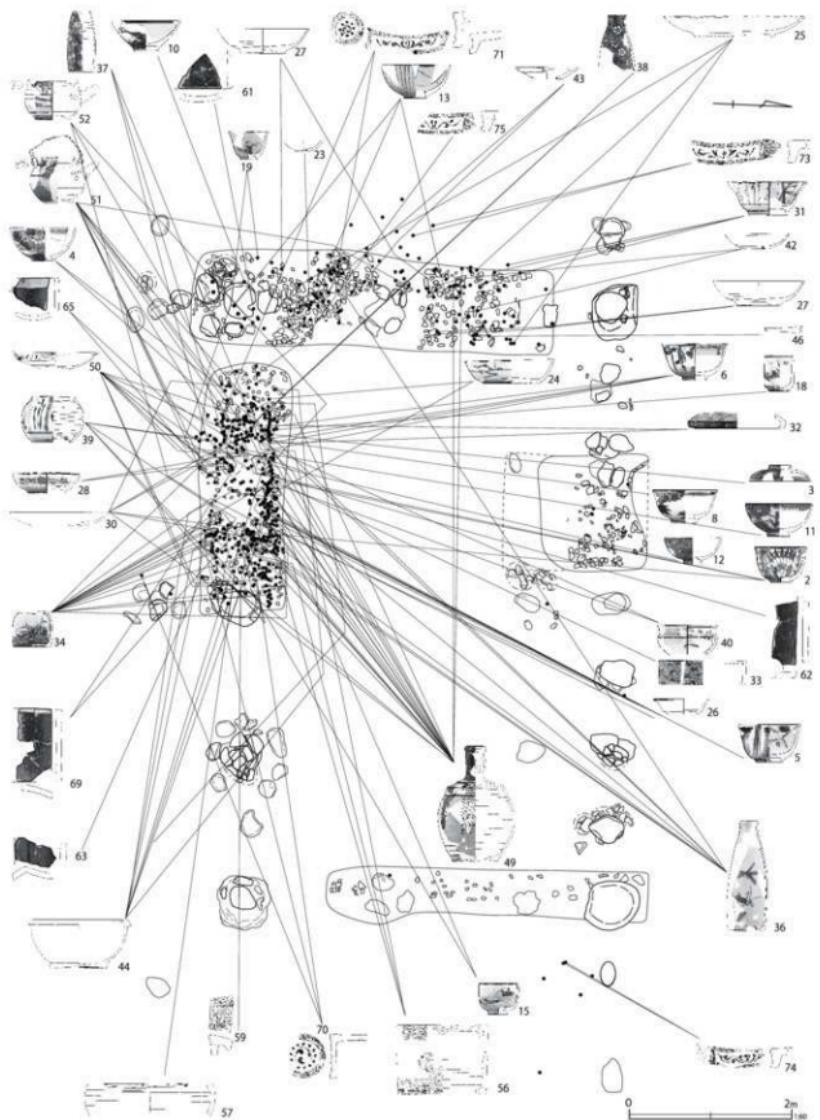
瓦敷2は、礎石1-3～1-4.5の範囲に位置する。平面範囲は長軸長3.3m×短軸長0.85mで、東西方向に主軸をとる。計2面が検出された。礎石ご

との深さは、1-3は1.4m、1-3.5は1.4m、1-4は1.42m、1-4.5は1.4mである。

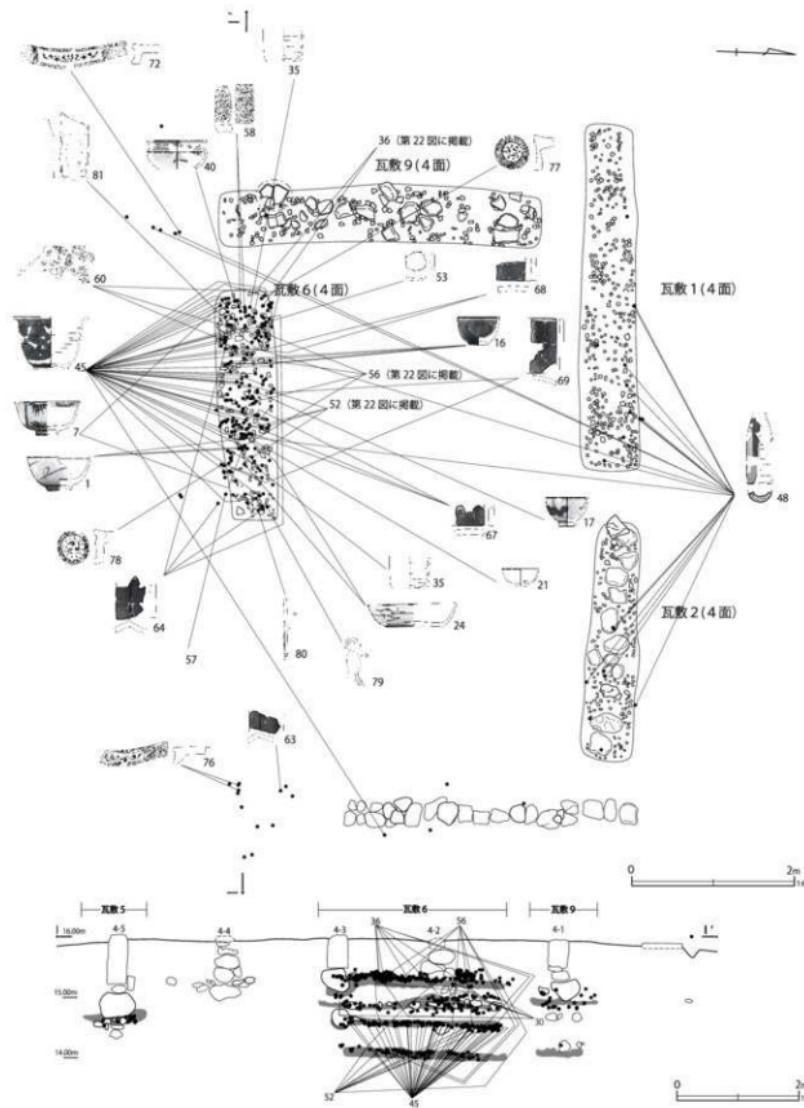
瓦敷3は、礎石1-5・2-5・3-5の範囲に位置する。平面範囲は長軸長3.4m×短軸長0.75mで、南北方向に主軸をとる。計3面の瓦敷とともに、4面下には石材列も検出された。礎石ごとの深さは、1-5は1.6m、2-5は1.47m、3-5は1.52mである。

瓦敷4は、礎石1-7・2.5-7の範囲に位置する。平面範囲は長軸長2.4m×短軸長0.65mで、南北方向に主軸をとる。1面が検出された。礎石ごとの深さは、1-7は1.07m、2.5-7は1.25mである。

瓦敷5は、礎石4-5の範囲に位置する。平面範囲は長軸長1.15m×短軸長1.1mで、隅丸方形で



第22図 第1号建物跡遺物出土状況（1）



第23図 第1号建物跡遺物出土状況（2）

第3表 第1号建物跡基礎地業中の瓦・石屑重量計測表

	瓦敷1		瓦敷2		瓦敷3		瓦敷4		瓦敷5		瓦敷6		瓦敷7		瓦敷8		瓦敷9	
	瓦	石屑	瓦	石屑	瓦	石屑	瓦	石屑	瓦	石屑	瓦	石屑	瓦	石屑	瓦	石屑	瓦	石屑
1面	なし		なし		なし		なし		なし		あり		なし		なし		あり	
2面	あり		なし		あり		なし		15.7	1	あり		なし		なし		あり	
3面	35.7	2.18	38	13.25	36.3	1.05	53.1	-	なし		55	7.28	30	-	33.7	7.80	なし	
4面	94.6	1.1	34.95	2	42.9	5.15	なし		なし		50.7	2.6	なし		なし		51.6	9.1

凡例 単位 (kg)、あり…面として確認したが、未計測の箇所 なし…面そのものが確認されなかった箇所

ある。1面が検出された。礎石の深さは、4-5は1.3mである。

瓦敷6は、礎石4-2・4-3の範囲に位置する。平面範囲は長軸長3.1m×短軸長1.1mで、東西方向に主軸をとる。4面が検出された。礎石ごとの深さは、4-2は1.5m、4-3は1.5mである。

瓦敷7は、礎石5-0・5-1の範囲に位置する。平面範囲は長軸長1.8m×短軸長0.9mで、東西方向に主軸をとる。1面が検出された。礎石ごとの深さは、5-0は1.0m、5-1は1.05mである。

瓦敷8は、礎石1-6・2.5-6の範囲に位置する。平面範囲は長軸長2.65m×短軸長0.75mで、南北方向に主軸をとる。1面が検出された。礎石ごとの深さは、1-6は1.22m、2.5-6は1.1mである。

瓦敷9は、礎石2-1・3-1・4-1の範囲に位置する。平面範囲は長軸長4.45m×短軸長1.15mで、南北方向に主軸をとる。3面が検出された。礎石ごとの深さは、2-1は1.4m、3-1は1.45m、4-1は1.45mである。

その他、礎石2-0、2.5-0、3-0は他の第2～3面相当の標高で石材が並び、間に瓦片が詰められていたが、面的には検出できなかったため瓦敷とはしていない。礎石ごとの深さは、2-0は1.05m、2.5-0は1.05m、3-0は1.07mである。

礎石2-2～2-4、3-2、3-3、4-4、5-3、5-6には瓦敷は認められなかった。礎石ごとの深さは、2-2は0.97m、2-3は0.95m、2-4は1.05m、3-2は0.2m、3-3は0.1m、4-4は0.8m、5-3は1.02m、5-6は0.95mである。

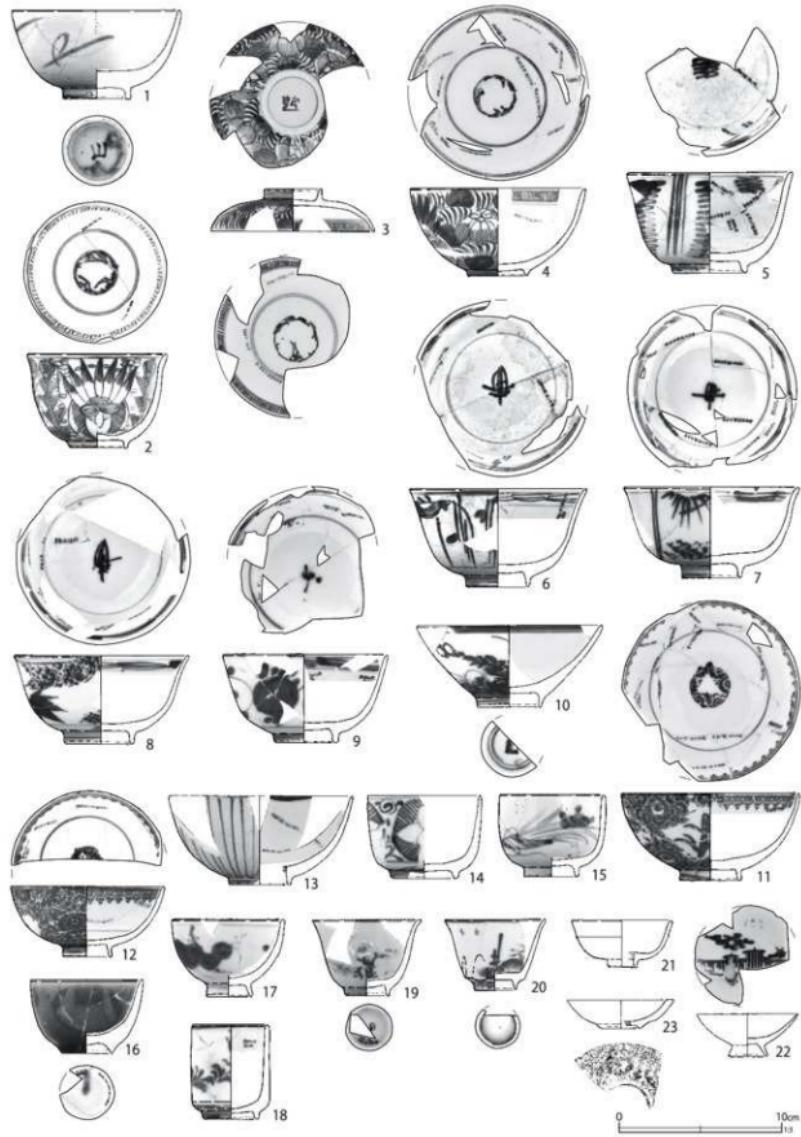
礎石の深さを計測した34箇所のうち、浅い3-2・3-3を除いた32箇所の平均は1.24mである。

建物跡に使われた自然縫を利用した礎石には漢数字を記載した墨書が認められたが、紙数の都合により写真のみとした(図版26-7～12)。7は「三百五十三」、8は「二百五十四」、9は「五」、10は「百十八」、11は「二十四」、12は「十二」と読める。筆跡は類似し、同一人物の文字の可能性がある。柱の配置を表したものかと考えたが、規則性は認められなかった。

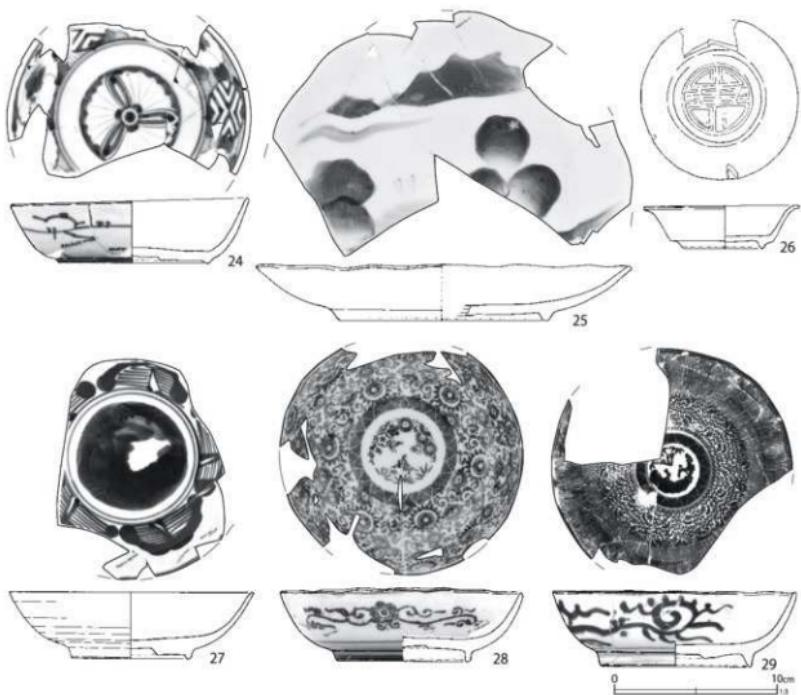
第1号建物跡の布掘り基礎地業と推定される場所からは、磁器7893.1g、陶器12273.6g、土器3399.2g、平瓦188.1g、丸瓦315.4g、軒棟瓦8282.4g、軒丸瓦955.2g、道具瓦899.3g、鬼瓦497.7g、赤瓦5756.1g、鉄製品11.6g、銅製品2.4g、石製品9859.3g、石材7666.2g、硝子製品195.24g、漆喰1.4gが出土した。陶磁器類や瓦は故意に碎かれており、細片主体であったが、接合率は極めて高かった。また、碗類を中心に同文の組物が複数セットみられた。

陶磁器類は、型紙摺絵染付磁器を最新期とし、一定量の出土がみられるほか、酸化コバルト染付磁器が多く含まれている。

出土状況は大きく、上層と下層に分けて第22・23図に示した。大半の遺物が粉々に破碎された状態で敷き込まれていたという特徴的な出土状態が認められた。第27図45の植木鉢は瓦敷6のほぼ全面から小片になって出土した。垂直分布をみると第3面を主体に第1面、第4面からも破片が出土し、接合していた(第23図)。第26図36の徳利は第1～3面、第27図48の徳利と第28図56の火鉢は第1・3・4面から、第27図49の長頸瓶は瓦敷6と瓦敷9の2箇所から、第52図48の燭台は瓦敷



第24図 第1号建物跡出土遺物（1）



第25図 第1号建物跡出土遺物（2）

1と瓦敷2から破片同士が接合した。

このように瓦敷間同士、また、高低差のある破片同士が接合する等、掘削方法や出土状況の共通性から、ほぼ同時期に施工されたと推定される。遺物群全体の一括性が極めて高いといえる。

また、最下層では硝子瓶片が出土している。江戸時代まで遡る陶磁器が若干出土しているが、大多数は明治時代前半頃の所産である。また、陶磁器の出土量が極めて多く詳細な年代の絞り込みが可能である。出土陶磁器の年代観から、第1号建物跡は19世紀末頃構築されたと考えられる。

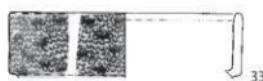
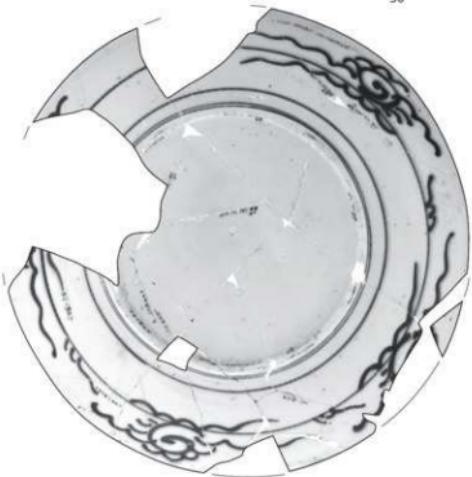
第24～30図には第1号建物跡出土遺物を図示した。第24図1～第27図40は磁器で、1・2・

15・24・25・31は肥前系、その他は瀬戸美濃系である。

11・12は型紙摺絵染付の丸碗である。型紙摺絵は江戸期から存在する技術であるが、本格的に磁器の量産に使用されるのは明治10年代頃である。

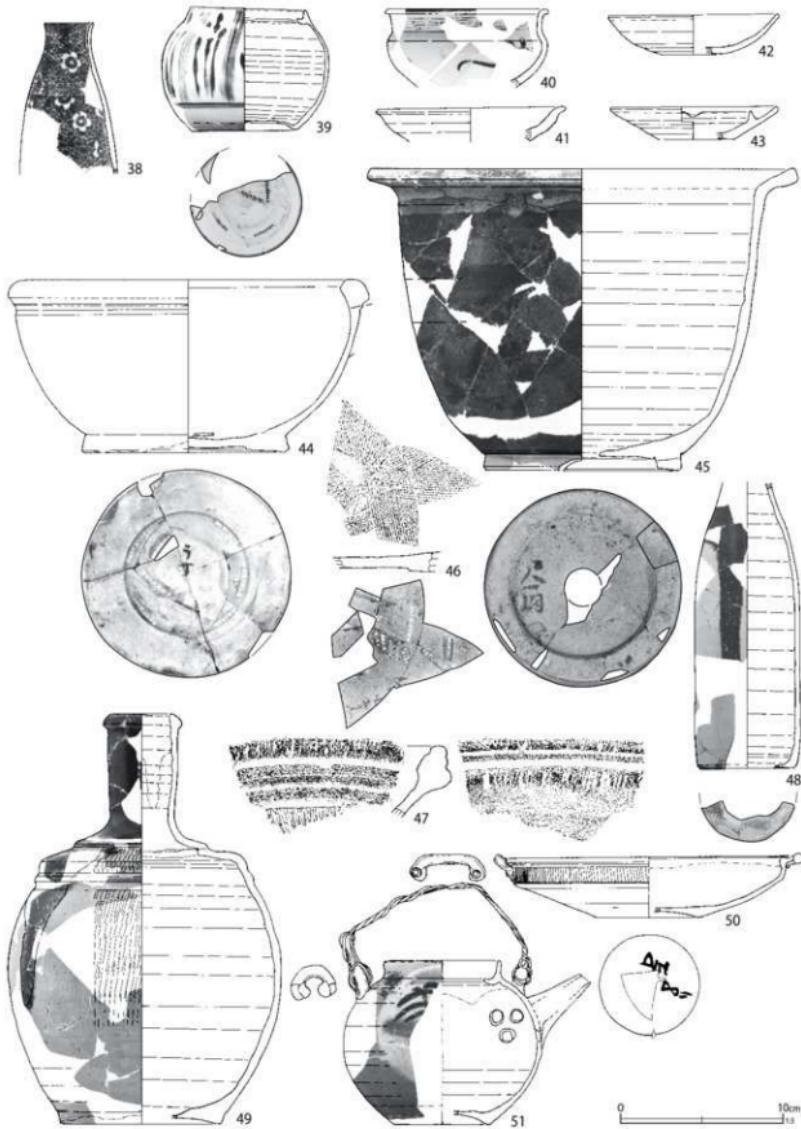
5～9は酸化コバルト染付の端反形碗である。10は酸化コバルト染付の平碗である。酸化コバルト染付技法は明治4年頃以降広まることが知られており、時期限定の材料となる。13は酸化コバルト染付と緑色釉下彩が施される丸碗、19は酸化クロム青磁釉の小坏で、外面に白盛がみられる。

22は高台高が高く、体部が直線的に開く盃状の小坏である。内面には青色の上絵付（江戸絵付け）

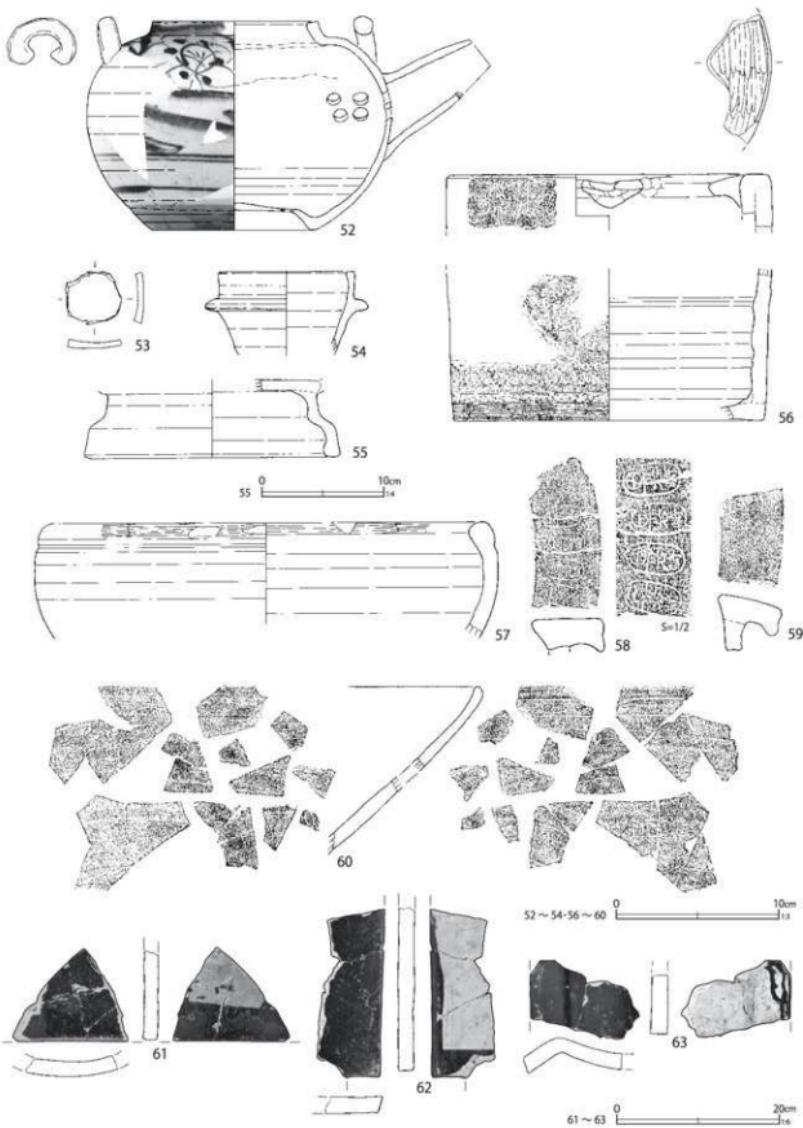


0 10cm

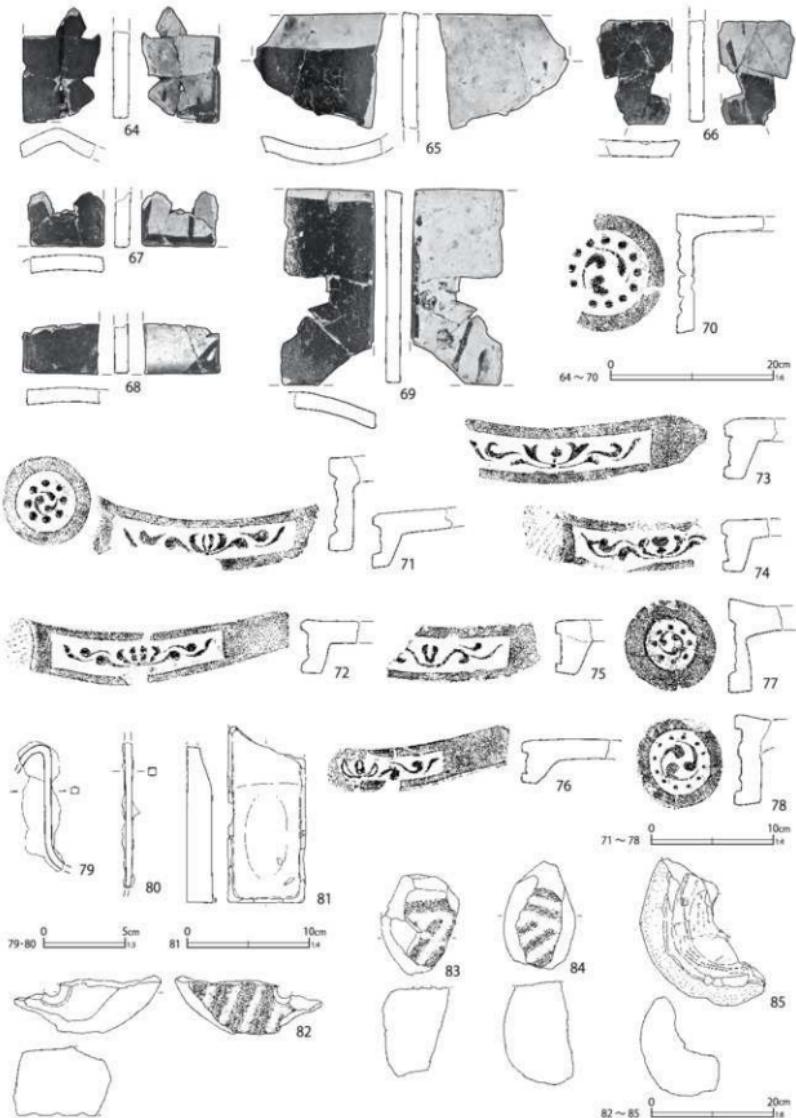
第26図 第1号建物跡出土遺物（3）



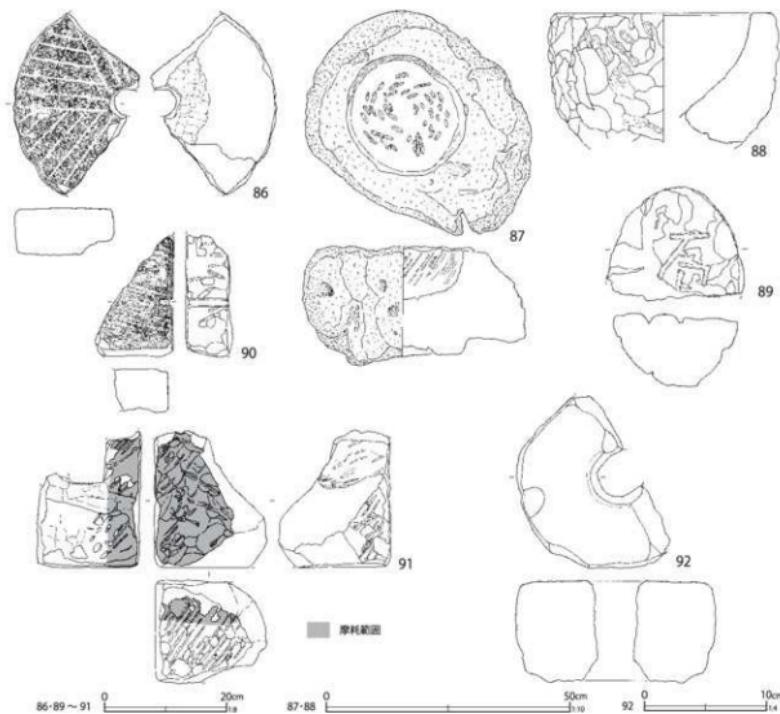
第27図 第1号建跡出土遺物（4）



第28図 第1号建物跡出土遺物（5）



第29図 第1号建物跡出土遺物（6）



第30図 第1号建物跡出土遺物（7）

と金彩が施される。

23は型成形の紅皿である。蜻唐草文の陽刻文がみられる。

28・29は蛇ノ目凹形高台の皿で、型紙摺絵染付が施される。30は型紙摺絵染付の大皿である。底部に窯道具痕が複数みられる。32・33は同文の型紙摺絵染付蓋物の蓋と身である。受口の口径がほぼ一致するため、セットになるものと考えられる。

34は受口状の口縁部を持つ蓋物である。外面に酸化コバルト染付が施される。

35～38は漸戸美濃系の爛徳利で、35は外面に酸化コバルトが散っている。底部に「外野村/石川

□衛門/サトウ」の墨書がみられる。36は酸化クロム青磁釉に昆虫を表現した褐色彩色がみられる。37・38は型紙摺絵染付で、同一個体の可能性がある。

39は酸化コバルト染付の急須で、底部に墨書「サトウ」がみられる。

第27図41～第28図53は陶器である。44は生産地不詳の片口鉢で、内面に長方形の目跡がみられる。底部には墨書「□□」が確認されるが、訛読不明である。

45は生産地不詳の植木鉢である。外面に海鼠釉気味の釉薬が施釉され、底部には「[尺□][両カ]」

と記された墨書がみられる。意味は明らかではない。

46は益子系擂鉢の底部で、高台内に墨書「[□□□□□□]」がみられるが、訛読不明である。

47は堺明石系擂鉢である。口縁端部、口縁凸帶部、下端欠失部に刻み状の二次利用痕がみられる。

49は東北・北関東地方を中心に分布する頭部別づくりの大型長頸瓶で、所謂「すず徳利」である。頸部に接合痕がみられ、外面にトビガンナ状施文が施される。

50は生産地不詳の両手鍋である。外面にトビガンナ状施文、把手に酸化コバルト染付が施される底部に墨書「□□8リ」がみられる。

51は生産地不詳の土瓶である。外面一部に白土、緑釉、鉄絵を施している。紐状把手で、釣手状に鋼製針金が巻き付けである。

52は生産地不詳の白土染付土瓶である。紐状把手で、絵付けには酸化コバルトを使用している。

53は鉢の胴部片を打ち欠いて円盤状に整形した円盤状製品である。

第28図54は施釉土器、55～60は瓦質土器である。54は江戸在地系の釜形土器製品である。粉質な胎土で、透明釉を施釉する。小型だが、露胎部全面に煤が付着しているため、実用品と考えられる。

55は脚台付火鉢である。燃しにより表面は灰色を呈する。底部は無調整の砂目底で、脚台部は段が付く。

56は筒形焜爐である。燃しにより表面は灰～黒色を呈する。底部は無調整の砂目底で、外面にミガキ調整とスタンプ状施文が施される。

58・59は竈鍔で、58の上面には4つの刻印「(一)」「岩崎」、59の上面には2つの刻印「[○○]」がみられる。「岩崎」の刻印は久喜市栗橋宿跡でもいくつか確認されており、竈鍔の生産地を明らかにする手掛かりとなる。

60は薄手の鉢である。混入物が少なく、粉質かつ硬い胎土で、内外面はヨコナデ調整である。県

内の類例としては、北本市二ツ家下遺跡から出土している。

二ツ家下遺跡は中山道鴻巣宿と桶川宿の中間に位置する農村で、19世紀後半に廃絶したと推定される第81号土壙から、3個体の出土が確認されている（埼埋文2014a）。

第28図61～第29図78は瓦である。61～69は鉄釉の陶製瓦で、所謂「赤瓦」である。陶製瓦は江戸時代に北陸・東北・山陰地域等の寒冷地において一般家屋に使用されたことが始まりとされる。江戸遺跡から出土する陶製瓦は、織部系緑釉瓦や東北・北陸等の国許で生産された大名屋敷への搬入品がわずかにあるのみだが、石見津和野藩亀井家江戸中屋敷跡からは291点の赤瓦が、19世紀前半の陶磁器類と共に伴している。この瓦は石見からの搬入品と理解されている（北野他2009）。

一方で、表土から出土する陶製瓦は近代以降の資料がほとんどであり、これらは大正・昭和期以降の三州等の製品とされている。（金子2018）。

61～66は棟瓦である。62・65には隅切りが一部遺存している。67～69は熨斗瓦で、いずれも縱方向の切込み条線に沿って欠損している。破断面には切込み条線の一部が遺存している。

鉄釉の釉調は黒色寄り（61・62・64・66・69）、臘脂色寄り（63・65）、柿釉（67・68）の三種がみられる。また、釉薬にチヂレ状の釉ムラがみられる個体が多い（61～63・65・66・69）。67・68は端部に窯詰時の砂が付着している。

赤瓦の胎土はいずれも石英と径1～5mm前後の赤色粒子が多量に含まれ、黄橙色を基調とした赤色マーブル状である。胎土は総じて堅緻であり、細粒な混入物が極めて多い砂質胎土（61・69）のものがある。

70～78は黒素焼きの瓦である。71、72、74～76は江戸式瓦に類似する。73は大阪式の文様構成を持つが子葉は江戸式で、言わば折衷形態である。瓦当面の縦幅が狭いものがある（76・77）。

第4表 第1号建物跡出土遺物観察表(1)(第24~26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(10.2)	5.4	3.3	-	60	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
2	磁器	碗	8.6	5.8	3.5	K	90	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 同文別個体1あり	22-1
3	磁器	蓋	(10.0)	2.6	3.6	-	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付	22-2
4	磁器	碗	10.8	5.4	3.8	-	80	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 同文別個体2あり	
5	磁器	碗	10.0	6.1	4.4	-	30	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付	
6	磁器	碗	10.7	6.1	3.8	-	60	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 同文別個体1あり	22-3
7	磁器	碗	10.6	5.6	3.6	-	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 同文別個体2あり	22-4
8	磁器	碗	10.6	5.4	4.0	-	60	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 同文別個体2あり	
9	磁器	碗	(10.0)	5.4	3.7	-	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付	
10	磁器	碗	(11.2)	5.0	3.6	-	30	良好	白	No.487 瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付	
11	磁器	碗	10.9	5.3	3.6	-	90	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・型紙模様染付	22-5
12	磁器	碗	(9.6)	4.4	3.0	-	50	良好	白	No.467 瀬戸美濃系 内外面施釉・型紙模様染付	
13	磁器	碗	11.2	5.4	3.6	-	25	普通	白	No.226・248・484 瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 外面緑色彩 同文別個体1あり	22-6
14	磁器	碗	7.0	5.1	4.2	-	45	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
15	磁器	碗	6.4	5.0	3.3	-	80	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面染付	
16	磁器	碗	7.0	4.5	3.0	-	70	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉(外面増構輪)	
17	磁器	碗	7.0	4.7	2.9	-	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面陰刻文・染付	22-7
18	磁器	坏	4.6	5.8	3.2	-	60	良好	白	No.300 瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付	22-8
19	磁器	坏	(6.6)	4.6	2.6	-	70	良好	白	瀬戸美濃系 内面施釉 外面青磁軸・多色彩・白盛り 同文別個体2あり	22-9
20	磁器	坏	(6.2)	4.3	2.5	-	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付	22-10
21	磁器	坏	(6.4)	2.9	(1.8)	-	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 体部中位隆帯1条 同文別個体3あり	
22	磁器	坏	(6.0)	2.6	(4.4)	-	60	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上輪付(青・金)	22-13
23	磁器	紅皿	(6.6)	1.8	2.2	-	40	良好	白	瀬戸美濃系 型成形 内外面施釉	
24	磁器	皿	14.4	4.0	9.2	-	30	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付 高台内ハリ支脚2遺存	
25	磁器	皿	13.0	3.7	12.5	-	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻「寿」文 同文別個体1あり	
26	磁器	皿	(9.6)	2.6	4.8	-	80	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面上輪付(青・金)	
27	磁器	皿	(14.7)	4.0	7.0	-	50	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文・酸化コバルト染付 口紅 同文別個体1あり	22-11
28	磁器	皿	14.8	4.4	8.0	-	80	普通	灰白	No.455・462 瀬戸美濃系 内外面施釉・型紙模様染付	22-12
29	磁器	皿	(14.8)	4.6	9.2	-	50	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型紙模様染付 外面酸化コバルト染付	
30	磁器	皿	28.8	4.2	16.0	-	80	良好	白	No.175・208・383・400・427・449 瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型紙模様染付 外面酸化コバルト染付 高台内ハリ支脚5あり	
31	磁器	鉢	(13.0)	5.5	6.2	-	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 口紅 蛇の目回形高台	
32	磁器	蓋	(13.8)	[2.4]	-	-	10	普通	白	No.304・317 瀬戸美濃系 内外面施釉 外面型紙模様染付 33の蓋	
33	磁器	重復	(14.0)	4.0	-	-	15	普通	白	No.55 瀬戸美濃系 内外面施釉 外面型紙模様染付 32の身	
34	磁器	蓋物	4.2	5.7	5.8	-	90	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付	
35	磁器	燐德利	-	5.2	5.4	-	30	良好	白	No.569・715 瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 底部墨書き「外野村/石川口衛門/サトウ」	22-14

第5表 第1号建物跡出土遺物観察表(2)(第26~28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	国版
36	磁器	燐徳利	3.2	18.0	6.0	-	55	普通	灰白	Na125・172・173・189・370・389・535・632・634 漢戸美濃系 内外面施釉 外面酸化クロム青磁釉・多色彩(茶・緑)	23-1
37	磁器	燐徳利	-	[14.8]	5.6	-	60	普通	白	Na84・325・337 漢戸美濃系 内外面施釉 外面型紙模絵染付 同文別個体1以上あり	23-2
38	磁器	燐徳利	3.0	9.3	-	-	25	良好	白	漢戸美濃系 内外面施釉 外面型紙模絵染付	22-15
39	磁器	急須	7.0	7.6	6.4	-	70	良好	白	Na36・140・425・439・459 漢戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 底部墨書「サトウ」	22-15
40	磁器	香炉	(10.0)	[4.8]	-	-	20	良好	白	漢戸美濃系 内上面位・外面施釉 外面色絵(赤)	
41	陶器	皿	(11.2)	2.0	-	DHK	5	普通	灰白	漢戸美濃系 内外面長石釉 内面鉄釉散る	
42	陶器	皿	(10.6)	2.4	(3.6)	K	40	良好	灰白	京都信楽系 施釉 内面シマ痕2遺存 露胎部煤付着	
43	陶器	灯明皿	10.2	2.1	4.7	-	80	普通	灰白	京都信楽系 施釉 被熱(黒化) 露胎部煤付着	23-8
44	陶器	片口鉢	19.9	10.5	12.3	IK	80	良好	灰白	Na3・11・43・87・90・123・144・191・446・448 内外面施釉 内面角形目跡6あり 高台内墨書 片口部欠失	23-9
45	陶器	楕木鉢	(25.9)	(18.4)	12.0	AIK	65	普通	灰	Na187・501・514・542・543・545・548・549・550・551・552・553・561・567・568・571・582・596・604・609・610・612・618・620・622・624・630・645・647・648・649・652・654・659・661・672・703・704・705・728 外面うのふ縁 口縁部黄褐色被熱(輪彩色) 底部抉り1あり 接点のない2片から復元 高台内墨書	23-10
46	陶器	擂鉢	-	[1.1]	-	DIK	5	良好	にぶい 檻	Na22・158 益子系 内面擂目・檻釉 高台内墨書	23-11
47	陶器	擂鉢	(37.6)	4.5	-	EI	5	良好	灰	堺明石系 内面擂目 口縁端部・外面凸帯部・欠失部に刻み目(軋用)	
48	陶器	燐徳利	-	[18.4]	5.7	HIK	45	良好	淡黄	京都信楽系 外面施釉 頭部青緑釉流しきか 底部黒痕 接点のない2片から復元	
49	陶器	徳利	3.5	25.2	9.7	IK	45	良好	黄灰	外面上位トビガナ状旋文 外面施釉 頭部鉄釉流しきか	24-1
50	陶器	鍋	17.5	3.9	6.2	DHK	70	良好	灰黄	Na167・168・209・339・411・412・458・464・468 外上面上位トビガナ状旋文 内面灰釉 把手灰釉・酸化コバルト染付 底部墨書	24-2
51	陶器	土瓶	(7.0)	10.0	(6.0)	I	40	良好	浅黄橙	外面施釉 外面一部白土・緑釉・鉄繪 手把同線巻付(右挽り) 接点のない2片から復元	
52	陶器	土瓶	(10.0)	12.8	10.0	IK	35	普通	灰白	外面施釉 外面白土染付(酸化コバルト)	
53	陶器	鉢	長さ 幅 厚さ	3.3	3.2	EIK	-	良好	灰白	外面施釉 内盤状製品転用	24-3
54	施釉土器	盃形 土製品	(7.6)	[5.1]	-	HIK	20	良好	檻	江戸在地系 胎土粉質 外面上位・内面施釉 露胎部煤付着	24-4
55	瓦質土器	火鉢	(20.0)	6.4	(17.5)	CDHK	20	不良	灰黄	砂目底 燻す	24-12
56	瓦質土器	焜燄	-	9.2	(19.2)	OII	15	良好	灰黄	砂目底 外面・口縁部ミガキ 体部鹿の子状旋文 燻す 接点のない3片から復元	
57	瓦質土器	火鉢	(26.4)	[6.9]	-	CHIK	5	良好	にぶい 檻	口縁部ミガキ 燻す 被熱か(胎土酸化焼成)	
58	瓦質土器	電鉢	-	[2.0]	-	CHIK	5	普通	にぶい 檻	Na626・627 上面刻印「○/岩崎」 燻す 被熱(一部赤化)	24-10
59	瓦質土器	電鉢	-	3.6	-	CEHIK	5	良好	浅黄	上面刻印「○○」やや酸化焼成 被熱(一部赤化)	24-11
60	瓦質土器	鉢	-	[10.3]	-	AIK	10	良好	灰白	内面焼す 胎土中心部灰色 胎土粉質	24-13

79・80は器種不明の鉄製品である。

81は凝灰岩製の硯で、中央部に摺りによる凹みがみられる。

82～92は第1号建物跡の礎石に転用された石製品である。82～84は花崗岩製の石臼で、82の擂目には小タキ仕上げ状の線状痕がある。

83・84は打ち欠いて二次加工を施される特徴から、同一個体と推定される。86は灰色緻密な角閃石安山岩製石臼の下臼である。上面には擂目、下面には抉り状の加工が施され、中央に穿孔がある。

85・87は浅間石と推定される黒色多孔質の安山岩製の石鉢である。85は推定30cm以上を測る自然

第6表 第1号建物跡出土遺物観察表(3)(第28~30回)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	重さ	釉土	焼成	色調	備考	図版
61	赤瓦	平瓦	[11.5]	[13.5]	1.9	-	-	EHIK	普通	にぶい 黄橙	No.479 上面・下面鉄軸(チヂレ) 開切 遺存	25-1
62	赤瓦	棟瓦	[20.6]	[8.0]	2.0	-	-	EHIK	良好	浅黄橙	No.520 上面・側面・下面鉄軸(チヂレ) 開切 遺存	25-1
63	赤瓦	棟瓦	[10.0]	[13.2]	-	-	-	EHIK	良好	浅黄	No.1・502 上面・側面鉄軸(チヂレ)	25-1
64	赤瓦	棟瓦	[19.3]	[9.6]	1.7	-	-	EHIK	普通	浅黄	No.532・621・664・710 上面・側面鉄軸	25-1
65	赤瓦	棟瓦	[14.5]	[16.3]	1.9	-	-	EHIK	普通	浅黄橙	No.538・534 上面鉄軸(チヂレ) 開切遺存 肢付着	25-1
66	赤瓦	棟瓦	[12.8]	[9.2]	1.9	-	-	EIK	良好	浅黄橙	上面・側面・下面鉄軸(チヂレ) 開切遺存	25-1
67	赤瓦	熨斗瓦	[6.8]	[9.3]	1.8	-	-	ADEH	良好	黄橙	No.722・724・729 上面・側面鉄軸 縦方向は溝 に沿って欠損	25-2
68	赤瓦	熨斗瓦	[6.3]	[9.3]	-	-	-	EHIK	良好	にぶい 黄橙	No.745・763 上面・側面鉄軸 縦方向は溝に 沿って欠損 被熱(弱) 煙付着	25-2
69	赤瓦	熨斗瓦	23.8	[11.2]	2.0	-	-	AEHIK	良好	浅黄橙	No.434・466・638・735 上面・側面鉄軸 縦方 向は溝に沿って欠損	25-2
70	瓦	軒丸瓦	[10.9]	[12.3]	2.1	[15.6]	-	CIK	普通	灰白	No.447・510 十三連珠右巻三巴文 燐十 雪母光 沢あり	25-5
71	瓦	軒桟瓦	[7.5]	[25.2]	1.8	[7.8]	-	CEIK	普通	灰白	No.373・474 八連珠右巻三巴文 燐十 銀化	25-4
72	瓦	軒桟瓦	[6.2]	[23.1]	1.8	[7.1]	-	CIK	普通	灰白	No.96・674 燐十 銀化 被熱 煙付着	
73	瓦	軒桟瓦	[4.4]	-	1.8	[5.0]	-	CEK	普通	灰白	No.350・352 燐十 銀化 被熱 タール状物質・ 煙付着	
74	瓦	軒桟瓦	[4.5]	[15.0]	1.5	[4.5]	-	CEIK	普通	灰白	No.699・702 燐十 銀化 被熱(変色)	
75	瓦	軒桟瓦	[3.2]	[13.0]	-	[5.6]	-	CEIK	普通	灰白	No.215 燐十 雪母付着	
76	瓦	軒桟瓦	[7.9]	[15.2]	1.6	[5.6]	-	CEIK	普通	灰白	No.691・692 燐十 弱く銀化	
77	瓦	軒桟瓦	[4.3]	[10.1]	-	[7.9]	-	CEIK	普通	灰白	No.659 八連珠右巻三巴文 燐十 銀化	
78	瓦	軒桟瓦	[3.0]	[7.8]	-	[7.4]	-	IK	普通	灰白	No.539 十三連珠右巻三巴文 燐十 銀化	
79	鉄製品	不明	[5.3]	0.3	0.3	-	9.1	-	-	-	No.711 屈曲する棒状品	
80	鉄製品	不明	[5.9]	0.3	0.3	-	2.6	-	-	-	No.712	
81	石製品	硯	[14.4]	6.4	-	2.0	299.5	-	-	-	延灰岩 No.76 中央凹み	
82	石製品	石臼	[9.4]	[24.2]	-	11.3	2786.2	-	-	-	4-5-No.4 花崗岩 上臼 下面攢目・小タキ仕 上げ状の線状痕 穿孔1 打ち削による二次加工	26-4
83	石製品	石臼	[16.4]	[12.8]	-	[14.6]	4020.9	-	-	-	3-5-No.16 花崗岩 上面攢目 打ち削による二 次加工 84と同一個体 被熱(一部黒化)	
84	石製品	石臼	[17.6]	[11.5]	-	[16.8]	4659.3	-	-	-	S69 花崗岩 上面攢目 打ち削による二次加工 83と同一個体 被熱(一部黒化)	
85	石製品	石鉢	[24.0]	[20.6]	-	16.2	2494.1	-	-	-	4-5-No.18, 27, 28, 30 安山岩 多孔質 黒色 外側自然面 内面刃幅5cmの幅広工具痕 底部穿孔	
86	石製品	石臼	[29.8]	[16.4]	-	7.7	5890	-	-	-	4-2-No.17 角閃石安山岩 白臼 上面攢目 下面 工具痕	26-3
87	石製品	石鉢	50.3	37.7	-	24.4	23000	-	-	-	安山岩 磁石4-2-⑦ 多孔質 黑色 外側自然面 下面 内側面幅広工具痕 内底面サキノミ状工具痕	
88	石製品	石鉢	口径 36.8	器高 [26.5]	-	-	-	-	-	-	1-3.5-No.8/2.5-0-No.2.3 安山岩 外面粗削 ツルツル状工具痕に類似する形態 内面摩滅	
89	石製品	基礎石	[18.6]	22.6	12.1	-	2019.7	-	-	-	2-1-No.25 多孔質 黑色 下面自然面 上面刻書 「石」	26-2
90	石製品	切石材	[19.8]	[12.7]	7.2	-	1928.0	-	-	-	2-1-No.21, 22 砂岩(基灰質 粗粒硬質) 両面・ 側面サキノミ状工具痕	
91	石製品	不明	[22.5]	[18.4]	17.1	-	6000.0	-	-	-	3-0-No.11 延灰岩 サキノミ状工具痕 被熱(一 部黒化・煙付着) 上半部摩耗	
92	石製品	不明	[14.1]	[6.7]	8.4	-	1645.0	-	-	-	4-5-No.2 角閃石安山岩 穿孔あり(径4.8cm) (径16.4cm)	

穂を加工し、外面には自然面が大きく残されている。内面には、刃幅5cm前後のチョウナ状と推定される刃幅の広い工具による成形痕が残る。底部には穿孔が施されている。

87は最大長53cmを測る大形の自然縞を加工しており、自然面が大きく残る。内側面は刃幅4.3

cm前後の刃幅の広い工具痕があり、内底面にはサキノミ状工具と推定される工具痕が放射状に広がる。底部中央には、内側面と同様に刃幅の広い工具痕がある。栗橋宿跡第6地点の第212号土壙で同質石材の類似する製品が出土している(埴埋文2019d)。

88は黒色粗粒の安山岩製の石鉢である。外面は粗削状の成形が施されるが、第10図10・11の石鉢と同様に切石材等に観察されるツルハシ状工具痕に類似する溝状工具痕がみられた。内面は研磨したかのように滑らかである。

89は85・87と同石材の黒色多孔質安山岩製で、基礎石用に作られたものと推定される。下面は自然面で、上面には刻書「石」がある。

90は切石材と考えられ、凝灰質で粗粒、硬質の砂岩である。表面には平行する線状の工具痕が、側面にツルハシ状またはサキノミ状工具による加工痕と横断面角形の溝状加工痕が残る。

91は切石材状の不明石製品で、方形の貫通孔がみられる。サキノミ状工具による成形痕がみられ、上半部は摩耗している。92は環状の石製品で、本来の用途は不明である。

#### (4) 蔵跡

##### 第1号蔵跡（第31図～第34図）

第1号蔵跡は、調査前は蔵上部や周辺に石材が山積していた。その石材を外して構造確認を実施した結果、原位置を保った石材が検出された。石材は南北方向に二列、東西方向に一列に並び、コの字形に配置された状態であったことから、これを蔵跡と捉え、石材に番号を付して調査を行った。

番号は各列で分け、それぞれ「北1～7」、「東1～8」、「西1～10」、「南1」とした。南列は調査区内で1点確認した。石材の総数は26点である。

調査は蔵跡の中央に十字形にトレーナーを設定し、土層堆積を確認しつつ、石材の平面・立面的記録を作成した。その後、各列に沿って調査区を設け、

基礎地業の堆積状況と平面構造を記録した。

第1号蔵跡は、C-2・C-3・D-2グリッドに位置する。水塚盛土南側の一段低くなった造成土上に造られている。南側は調査区域外のため全体は検出されなかつた。規模は長軸8.2m(4間半)、短軸5.15m(2間5尺)、高さ0.34m(基礎地業を含めると1.12m)で、平面形は長方形を呈する。長軸方位はN-7°-Wで、ほぼ南北方向を向く。この方位と位置取りから、第4・5号石垣と共に建築計画のもとに造られたと考えられる。

石材に囲まれた内側は、表土直下に炭化物を含む焼土層が堆積していた(第4層)。外側には、焼土層とともに、漆喰や瓦の小片といった壁材や屋根材の一部が認められたため、第1号蔵跡は最終的には火災で廃絶したと考えられる。ただし、周辺には火災痕跡は認められないことから、被災範囲は蔵に限定されたものと推定される。

蔵の出入口は母屋との関係から考えると、東側か南側に設けられたと考えられる。なかでも蔵の東側には、東6～8の石材が東1～5に沿って置かれていた。これらの石材の東側は、調査区域外のため状況は明らかでないが、第4号石垣が南に続いていると推定される。現状では東側に出口を想定しておきたい。

蔵に関わる石材は26点検出された。いずれも凝灰岩を直方体に加工した石材である。北1と東6～8は他と規格が異なる。

蔵の土台となる石材は、北2～7、東1～5、西1～10、南1の22点である。いずれも凝灰岩

第7表 第1号蔵跡石材計測表

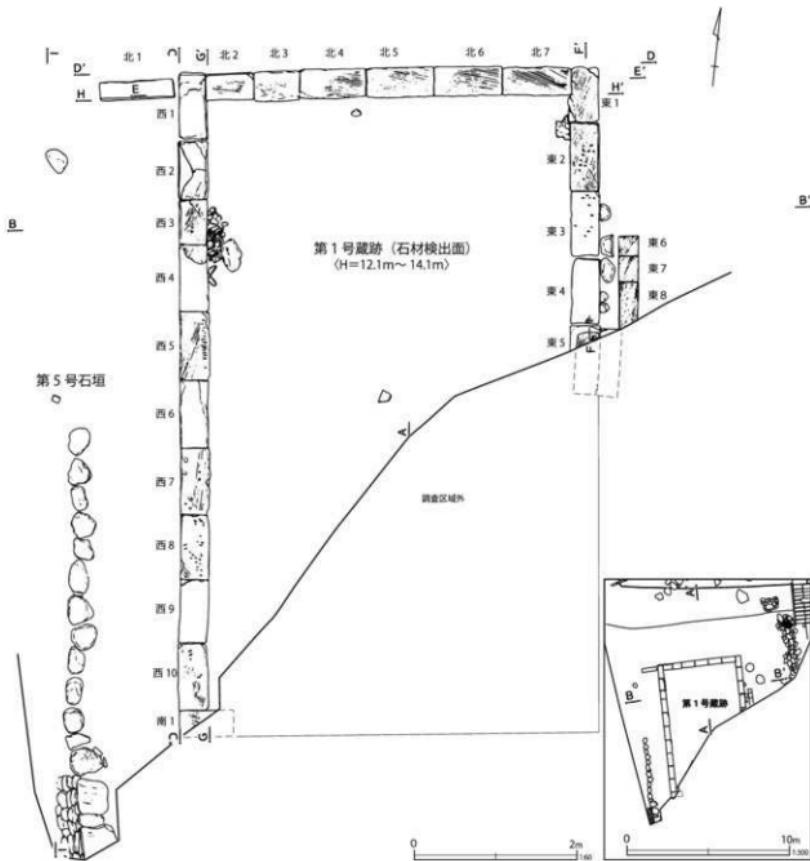
No.	名称	長軸	短軸	厚さ	No.	名称	長軸	短軸	厚さ	No.	名称	長軸	短軸	厚さ
1	東1	69.0	36.0	33.0	9	北1	93.5	22.5	21.5	17	西2	72.5	34.0	31.0
2	東2	84.0	35.0	32.5	10	北2	58.5	35.0	30.5	18	西3	55.0	35.0	31.0
3	東3	80.0	35.0	34.0	11	北3	57.0	38.0	33.5	19	西4	83.5	37.0	31.5
4	東4	81.0	34.0	29.0	12	北4	81.0	38.5	32.5	20	西5	84.5	36.0	32.5
5	東5	-	37.0	32.0	13	北5	83.0	36.5	34.0	21	西6	83.5	34.0	33.0
6	東6	24.0	24.0	-	14	北6	83.0	37.5	30.5	22	西7	82.0	36.0	33.0
7	東7	30.0	24.0	-	15	北7	84.0	37.0	33.0	23	西8	79.0	34.5	33.0
8	東8	58.0	24.0	-	16	西1	81.0	33.5	31.0	24	西9	78.5	35.0	32.5

凡例  
単位(cm)、平均値は、東5～8、  
北1・南1を除いた

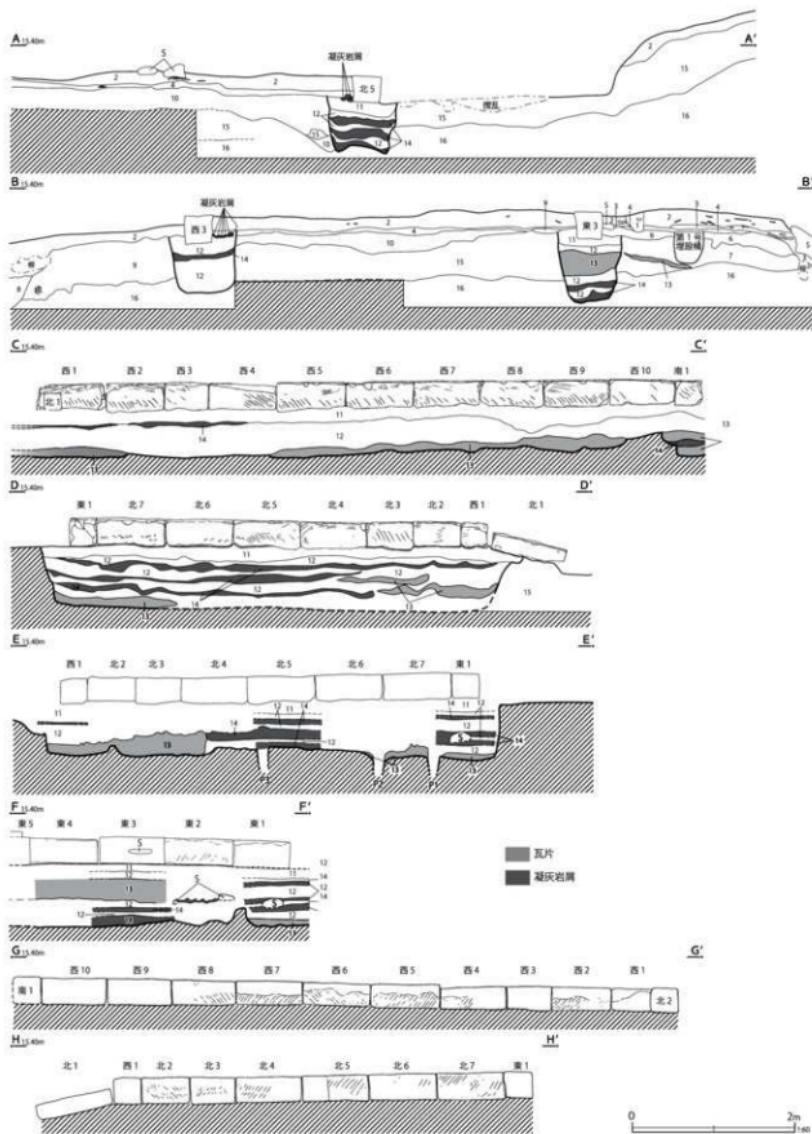
で、大きさは平均で長軸長77.05cm、短軸長35.73cm、厚さ32.2cmである（第7表）。長軸長のばらつきが大きいため、東列と西列の石材配置をみると、大きさを揃えて設置しているわけではないことが分かる。

個々の石材の表面には加工痕が残っていた。藏に対して上面、外面を中心とした斜め方向の線状の工

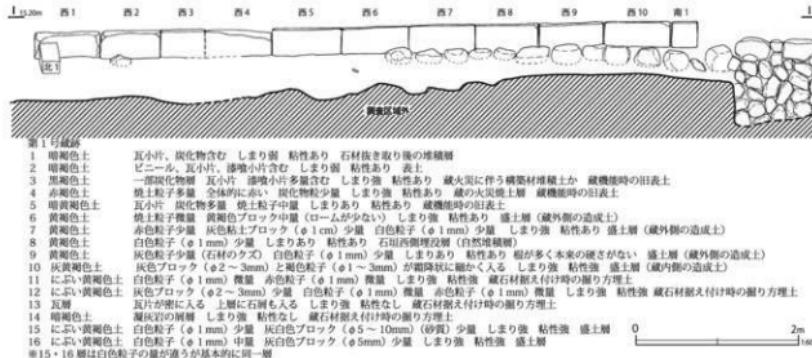
具痕が残る。藏に対する内面は、上方が反るようには抉られた加工がみられる（第32図A-A' 北5、B-B' 西3・東3断面図参照）。それ以外の面は平滑に整えられている。また、石材同士が接する面については、隅角のみ片方の石材を逆L字形に加工し、密着を強めている（第31図北7と東1）。これらの石材加工は、多量の石層が基礎地業を中



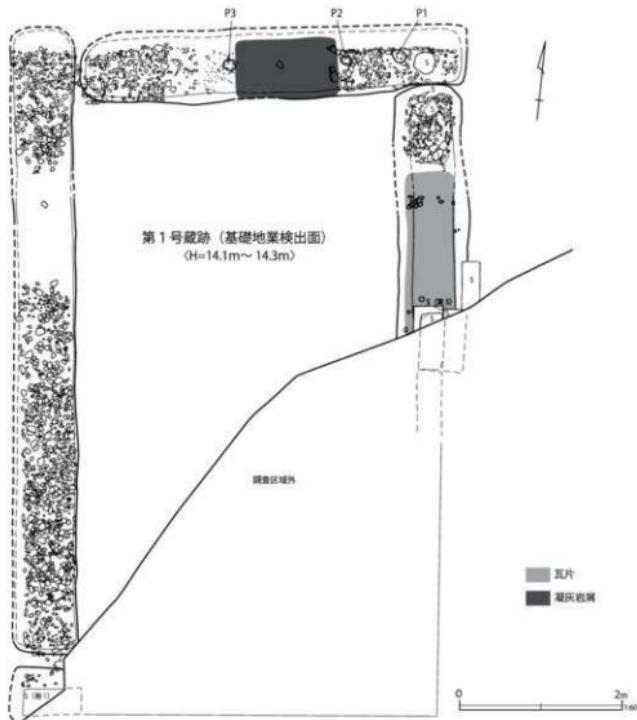
第31図 第1号藏跡（1）



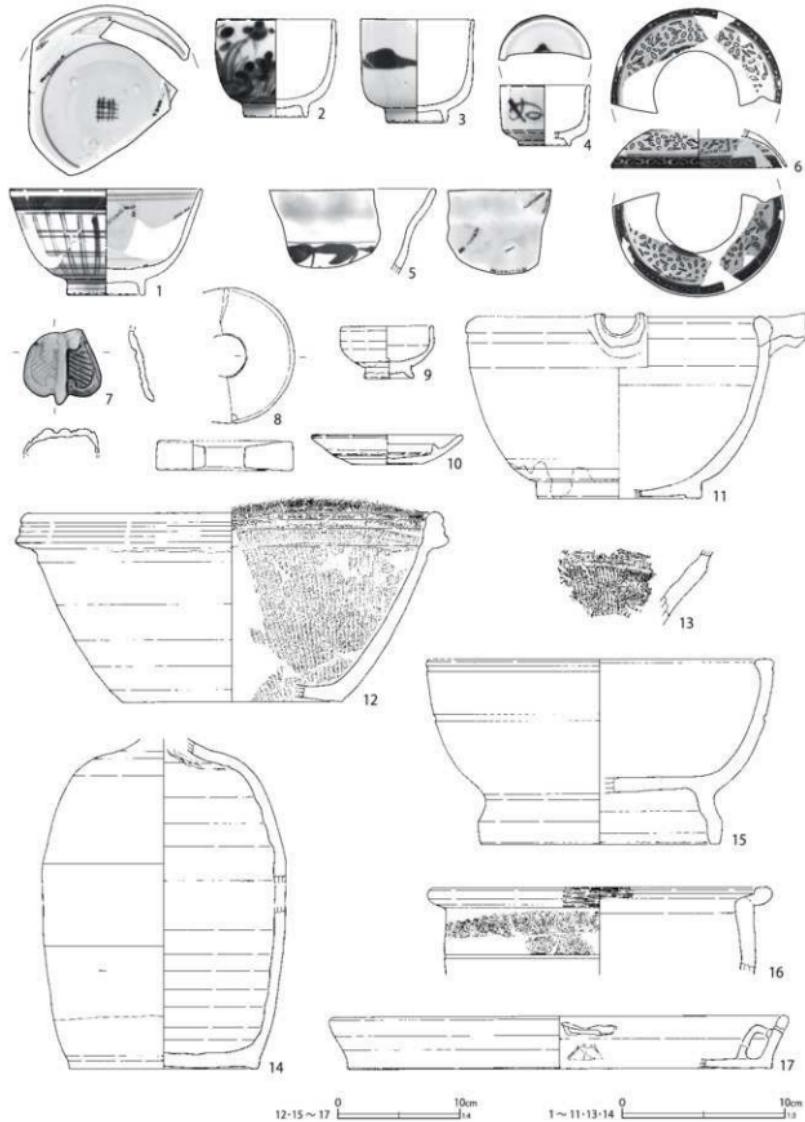
第32図 第1号藏跡 (2)



第33図 第1号蔵跡 (3)



第34図 第1号蔵跡 (4)



第35図 第1号藏跡出土遺物（1）



第36図 第1号蔵跡出土遺物（2）

心に出土したことから、現地で最終調整を行ったと考えられる。

蔵跡の基礎地業は、設置された石材を支持するように布掘りが施されていた。布掘りは石列ごとに設けられ、掘り方は隅丸長方形である。東列と南列は一部が検出されたのみである。掘り方の規模は、西列は長軸長7.75m×短軸長0.75m×深さ0.7m、北列は長軸長4.73m×短軸長0.9m×深さ0.75m、東列は長軸残存長3.13m×短軸長0.9m×深さ0.75m、南列は長軸残存長0.7m×短軸長

0.65m×深さ0.65mである。掘り方の規模や形態は各列で共通する。

内部は瓦片・石屑層と黄褐色土層を、水平に互層状に埋め戻していたが、埋め戻し方法は各列で若干異なる。北列と東列は7層前後で細かい互層状の堆積だが、西列は土を主体に4層前後で埋め戻されており、北から1.8m～3mの範囲には瓦片や石屑は認められなかった。瓦片と石屑層では石屑層の方が比較的割合が高く、陶磁器等の遺物は両者から出土した。

第8表 第1号藏跡出土遺物観察表(1)(第35図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(11.6)	6.5	4.6	-	25	良好	白	Na1・3・25・43 肥前系 内外面施釉・染付 内面ハリ支 跡3あり	23-3
2	磁器	碗	(7.2)	6.0	3.6	-	65	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	23-4
3	磁器	碗	(6.8)	6.3	3.6	-	30	普通	白	Na288・291 瀬戸美濃系 内外面施釉 外面陰刻文・染付	23-5
4	磁器	杯	(5.4)	3.7	(3.0)	-	30	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	23-5
5	磁器	鉢	-	[5.2]	-	-	-	普通	白	肥前系 外面・内面上位青磁釉 内面下位施釉・染付	23-6
6	磁器	蓋	(10.6)	[2.4]	-	-	30	良好	白	Na224 清朝景德鎮窯系 内外面施釉・染付・透彫り(釉充填)	23-6
7	磁器	水滴	長さ [5.1]	幅 [5.6]	-	-	20	良好	白	肥前系 型成形 上面施釉(鉄釉かけ分け)	23-7
8	磁器	戸車	外径 (8.3)	厚さ 1.8	内径 2.6	K	50	良好	白	肥前系 侧面施釉	24-5
9	陶器	壺	(5.5)	3.2	2.8	IK	40	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉	
10	陶器	灯明皿	(9.0)	1.8	4.3	I	35	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉(外面下位・底部釉ふきとり) 体部中位輪状重ね軸 体部煤付着	24-6
11	陶器	片口鉢	17.5 (11.2)	10.0	DEIK	40	普通	淡黄	瀬戸美濃系 内外面灰釉 目跡1遺存	24-7	
12	陶器	植鉢	(33.2)	15.5 (18.0)	DGI	15	普通	纈	切石目系 内外面擂目(9条/単位)		
13	陶器	植鉢	-	[4.7]	-	DEIK	5	普通	淡黄	瀬戸美濃系 内外面施釉(光沢なし) 内面擂目	
14	陶器	德利	-	[20.2]	11.6	DEIK	40	普通	淡黄	瀬戸美濃系 外面灰釉 外面下位・底部ふきとり 接点のない2片から復元	24-8
15	瓦質土器	火鉢	(26.4)	(15.2)	(19.4)	HK	25	普通	黄灰	胎土粉質 やや酸化焰焼成 接点のない3片から復元	
16	瓦質土器	火鉢	(26.4)	[7.2]	-	HK	10	普通	灰	口縁部・体部下位ミガキ 体部上位波状施釉 胎土粉質 纈	
17	瓦質土器	焙烙	(37.0)	4.5	34.7	DGIK	50	良好	纈	底部シワ状痕(ほぼ酸化焰焼成) 体部被熱(黒化) 補修痕 6(鋼羅付1あり) 把手欠失3か所	24-9

第9表 第1号藏跡出土遺物観察表(2)(第36図)

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	重さ	胎土	焼成	色調	備考	図版
18	瓦	軒平瓦	[8.6]	[20.9]	1.9	[6.4]	-	EIK	普通	灰白	Na244・262 燐寸 銀化 同文別個体1あり	
19	瓦	軒棟瓦	[6.9]	[13.8]	-	[7.8]	-	IK	普通	灰白	Na81・85 九連珠か 右巻三巴文 刻印「㊱」 燐寸 銀化 雲母付着	25-6
20	瓦	軒棟瓦	[5.0]	[23.5]	-	[8.0]	-	IK	普通	灰白	Na46・84 八連珠右巻三巴文 燐寸 銀化 21と同文	25-7
21	瓦	軒棟瓦	[6.3]	[17.9]	1.8	[5.5]	-	CRIK	普通	灰白	Na168・228 燐寸 銀化 同文別個体3以上あり	
22	瓦	軒棟瓦	[8.7]	[19.8]	-	[6.6]	-	AIK	良好	灰白	Na275 燐寸 銀化 同文別個体4以上あり	
23	瓦	軒棟瓦	[9.7]	[19.4]	2.1	[6.4]	-	AEIK	普通	灰白	Na107 東海式 燐寸 黄く銀化	
24	瓦	軒棟瓦	[5.3]	[12.4]	-	[7.5]	-	EIK	普通	灰白	Na109 東海式か 右巻三巴文 燐寸 黄く銀化	
25	瓦	軒棟瓦	[4.1]	[8.7]	1.9	[5.8]	-	EIK	普通	灰白	Na70 燐寸 銀化 同文別個体1あり	
26	瓦	軒棟瓦	[3.8]	[9.0]	-	[6.2]	-	IK	普通	灰白	Na158 燐寸 銀化	
27	瓦	軒棟瓦	[5.5]	[13.5]	1.7	[7.3]	-	IK	普通	灰白	八連珠右巻三巴文 燐寸 銀化	
28	瓦	軒棟瓦	[2.0]	[6.3]	-	[3.4]	-	EK	普通	灰白	燐寸 雲母細粒付着	
29	銅製品	針金	縦4.7	横2.8	0.1	-	1.6	-	-	-	Na32 縦約2cmと1cmの棒状品を連結していた痕跡あり	
30	銅製品	錢貨	径2.85	-	0.13	-	5.3	-	-	-	南北・613-2層中 寛永通寶(新) 11波	25-13
31	銅製品	錢貨	径2.48	-	0.08	-	2.1	-	-	-	南北・613-2層中 寛永通寶(新)	25-14
32	石製品	硯	[14.1]	6.0	2.4	-	293.8	-	-	-	粘板岩 №91 裏面刻書「[桜] 上本高嶋硯」近江産 中央凹み	26-5
33	石製品	基礎石	[21.6]	[10.1]	[9.1]	-	1412.0	-	-	-	安山岩 外面刻書「二十八」	26-6

これに対して基礎地業中には、石材はほとんど認められなかった。ただし、北東隅のみ(12・14層中)に径25cmの円形石が設置されていた。

北列掘り方の底面には、3基のピットが検出された。掘り方の中央に位置し、東から西方向に軸を揃えて並ぶ。規模は、P 1は長軸長0.18m×短軸長0.15m×深さ0.1m(確認長)、P 2は長

軸長0.13m×短軸長0.11m×深さ0.15m(確認長)、P 3は径0.15m×深さ0.1m(確認長)である。いずれも中に瓦片や石屑が充填されていた。これらのピットの性格は不明である。

第1号藏跡の布掘り基礎からは磁器1231.6g、陶器4416.9g、土器3352.9g、丸瓦290.5g、軒棟瓦7933.2g、道具瓦1017.5g、銅製品2.3g、

石製品1705.8g、石材5353.9gが出土した。第1号建物跡と同様に出土遺物は意図的に碎かれており、接合率が極めて高いのが特徴である。

陶磁器類は、幕末期まで遡る陶磁器を主体としており、近代的な遺物は含まれていない。出土陶磁器の年代から、藏跡は19世紀後葉、具体的には幕末から明治時代初頭頃の構築と考えられる。

第35・36図には第1号藏跡出土遺物を図示した。1～8は磁器である。3は瀬戸美濃系の湯呑形碗である。外面に陰刻文染付が施される。4は小法量の瀬戸美濃系筒形碗である。外面に染付文字「ぬ」がみえる。

6は清朝景德鎮窯系磁器碗の蓋である。透かし彫り後に透明釉を充填する所謂「螢手」である。体部から口縁部にかけて極めて薄造りである。

螢手製品は江戸遺跡でも類例が少なく、御家人屋敷跡である四谷三丁目遺跡で推定廃絶期19世紀第3四半期の第19号遺構から本製品と同文の「大清嘉慶年製」銘碗が出土している（新宿区1991）。また、長崎市唐人屋敷跡では19世紀の石垣裏込めから螢手の小坏が出土している（長崎市2003）。

9～14は陶器である。9は瀬戸美濃系小坏である。10は瀬戸美濃系柿釉灯明皿（油受皿）である。体部に直重ね焼き痕がみられる。11は瀬戸美濃系の丸碗形状口鉢である。12は堺明石系擂鉢である。13は瀬戸美濃系擂鉢で、光沢のない鉄釉が施釉される。14は瀬戸美濃系の灰釉一升徳利である。下半部はケズリ調整が釉越しにみえる。

15～17は瓦質土器である。15は火鉢で、輪高台状の脚台が付く。ほぼ酸化焰焼成であるため、表面は橙色を呈する。胎土は混入物が少ない粉質で、脚台部中位が屈曲している。内外面の調整はヨコナデである。16は火鉢で、輪高台状の脚台が付く脚台付火鉢と推定される。口縁部は受口状で、ミガキ調整が施される。胎土は混入物が少ない粉質である。焼しにより、表面は灰～黒色である。17は平底焰炉である。ほぼ酸化焰焼成であり、

表面は橙色を呈する。口縁端部は丸みがあり、内耳は上位が口縁部よりやや下の位置で逆L字に付く。底部に無調整のシワ状痕、体部にはヨコナデ調整がみられる。

18～28は黒色素焼きの軒桟瓦である。19は刻印「㊀」がみられる。20・21と同文の可能性が高く、稀な文様構成である。23は東海式瓦である。24は瓦当面の子葉形態から東海式瓦の可能性がある。18・25・26・28は江戸式瓦に類似する。

29は銅製針金、30・31は新寛永通宝である。

32は粘板岩製の硯で、裏面には刻書「[極]上本高嶋硯」がみえる。高嶋硯は現在の滋賀県高島市で製作されている平安時代から現代まで続く硯の名品とされる。高嶋硯は虎斑石・玄生石と呼ばれる二種の石材を用いて作られ、硯背の「覆手」と呼ばれる抉り内に、「高嶋石」、「本高嶋上石」、「極上本高嶋石」等の刻書銘がみられる場合が多い。

33は安山岩製の基礎石と思われる石製品である。破片であるため全体像は不明である。刻書「二十八」がみられるが、数字の意味するところは不明である。

## （5）埋設桶

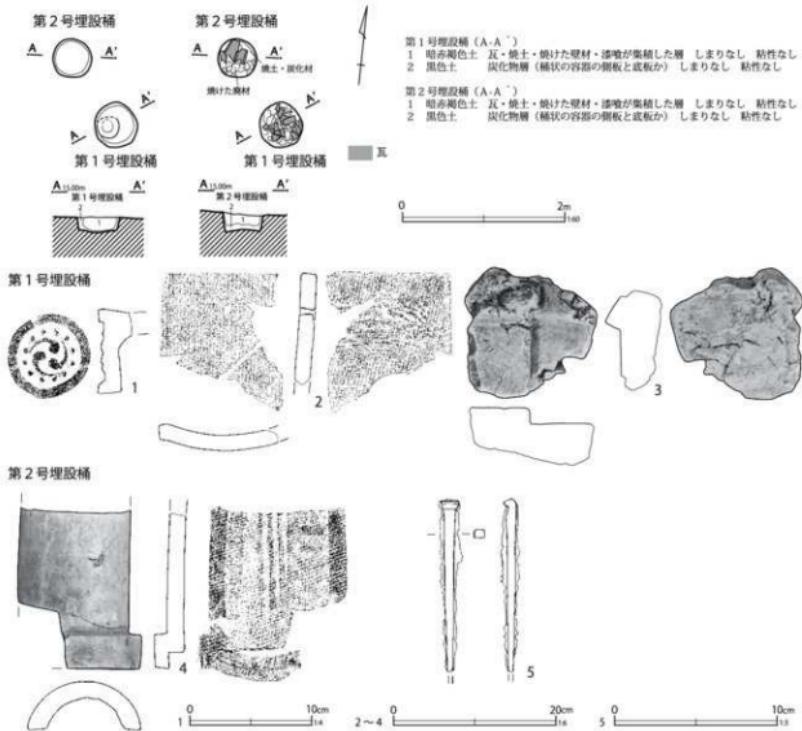
### 第1号埋設桶（第37図）

C-3グリッドに位置する。第1号藏跡の東側に位置する。直径0.53m、深さ0.18mで、平面形は円形である。焼けた瓦、焼土、壁材、漆喰等が堆積していた。底面付近に炭化物層があり、桶状容器の側板や底板が認められたため、桶状容器を埋設した埋設桶と考えられる。藏跡の焼失に伴い廃棄物が投棄されたと推定される。

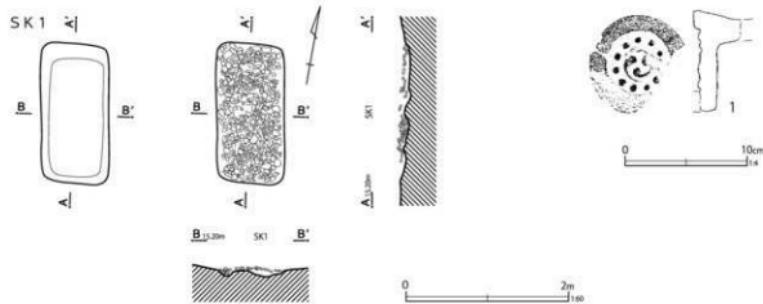
第1号埋設桶からは、平瓦5006.5g、軒桟瓦108.2g、土壁材1491.3gが出土した。

陶磁器類は出土しなかった。廃絶時期は不明である。第37図1～3に瓦と土壁材を図示した。

1は軒桟瓦である。被熱により橙色化している。瓦当面は十二連珠で、巴文は右巻きである。2は桟瓦で、被熱により一部が橙色化している。焼成



第37図 第1・2号埋設坑、出土遺物



第38図 第1号土壤・出土遺物

第10表 第1・2号埋設桶出土遺物観察表（第37図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	重さ	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	[5.7]	[7.6]	-	[6.9]	-	EHK	普通	にぶい 黄橙	十二連珠右巻三巴文 優す 銀化 被熱(橙色化)	
2	瓦	棟瓦	[17.5]	[15.4]	2.0	[3.4]	-	HIK	普通	灰白	焼成前穿孔1 釘・針金残存 下面柳目 優す 銀化 被熱(一部橙色化)	25-8
3	土製品	壁材	[15.7]	[15.2]	[5.0]	-	-	ACEI	普通	概	壁の角の部分 蔵に伴うもの 軟質 被熱(橙色化)	25-9
4	瓦	道具瓦	[19.3]	14.0	2.4	7.4	-	CBK	普通	浅黃橙	面面ゴザ目 被熱(橙色化)	25-10
5	鉄製品	釘	[7.1]	0.4	0.3	-	7.8	-	-	-		25-15

第11表 第1号土壤出土遺物観察表（第38図）

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	高さ	重さ	胎土	焼成	色調	備考	図版
1	瓦	軒桟瓦	[3.9]	[8.0]	-	[7.9]	-	EIK	普通	灰白	十一連珠右巻三巴文 優す 銀化	

前穿孔が1箇所あり、鉄釘・銅線の一部が遺存する。凸面には櫛目がみられる。

3は軟質な土壁材で、被熱により橙色化している。壁の角にあたる材で、土蔵の一部を構成していたものと考えられる。

#### 第2号埋設桶（第37図）

C-2・C-3グリッドに位置する。直径0.47m、深さ0.27mで平面形は円形である。覆土の堆積状況は第1号土壤と同様で、埋設桶と考えられる。

第2号埋設桶からは平瓦2104.8g、道具瓦899.3g、鉄製品7.8g、壁土155.3g、漆喰6.8gが出土した。陶磁器は検出されなかったため、廃絶時期は不明である。

第37図4に道具瓦を図示した。被熱により橙色

化している。接地面は平坦である。5は鉄製の角釘である。上端部は曲げられている。

第1・2号埋設桶は第1号蔵跡に伴う施設で、第1号蔵跡と消長を共にしたと考えられる。

#### (6) 土壌

##### 第1号土壤（第38図）

B-2グリッドに位置する。水塚盛土の北西部、盛土中から検出された。長軸長1.72m、短軸長0.83m、深さ0.18mで、平面形は隅丸長方形である。掘り込みは浅く、内部に瓦片が堆積していた。

第1号土壤からは、磁器2.6g、陶器9.2g、軒桟瓦26.2gが出土した。陶磁器の出土が極めて少ないため、廃絶時期は不明である。

第38図1に軒桟瓦を図示した。瓦当面の連珠は十一連と推定される。巴文は右巻きである。

## V 調査のまとめ

### 1 水塚・蔵・建物の構築順序

#### (1) 構築順序

本田遺跡は、水塚盛土1基とその南に接して蔵跡1棟・埋設桶2基からなる。水塚からは建物跡1棟と土壤1基、石階段3基、石垣5基、排水管3基が発見された。

第1号建物跡の乗る北側の水塚盛土は標高約16m、第1号蔵跡の位置する南側は標高約15mと約1mの比高差がある。地盤の標高は約14.1mであるため、見かけの高さは約0.9m～1.9mとなる。

まず、水塚盛土と第1号建物跡、第1号蔵跡の先後関係を土層断面から確認する。最初に土地全体に土を入れ、整地・造成を行う。この層は蔵跡下から水塚盛土に至るまで確認された層で、性質の異なる土壤粒子はおろか、砂礫等もない均質な土であった。盛土との識別はつかなかつたため、調査時には同一層として把握した。そのため、構築順序は土地の造成から水塚盛土まで間を置かずに行われた可能性が想定された。但し、造成土と盛土が同じ種類の土であっても、異なるタイミン

グで施工された可能性もある。

#### (2) 蝶燭地業と下部構造

後述するように、出土遺物の検討からは、第1号蔵跡の建築は幕末から明治時代初頭頃、水塚上の第1号建物跡は19世紀末に建築されたと推定された。第1号蔵跡建築から約20年経た後に第1号建物跡が水塚上に建築されたことになる。

第1号建物跡は4×2.5間で、二階建ての可能性もある建物と推定された。身舎の西・南・東に3尺の庇または下屋が巡る構造で、「蝶燭地業」を取り入れた強固な下部構造を採用していた。東に手洗いと風呂が付属した居住用施設と考えられた。

土地造成・水塚築造→第1号蔵建築→第1号建物建築という先後関係が想定されたが、何故本来水防施設として最も重要なはずの蔵が相対的に低い位置に造られたのか、何故、水塚上を一定期間空閑地として放置したのか疑問点もあり、今後の再検討が必要である。

### 2 水塚盛土と基礎地業の関係

#### (1) 盛土と基礎地業

第1号建物跡の基礎地業は、礎石下に多数の石材を重ねるとともに、複数面に渡って瓦片や石材を面的に敷いた入念な構造が確認された。発掘調査段階から注意された点の一つに、水塚盛土と基礎地業の構造的関係がある。

すなわち、両者の構築順序としては、前述したように水塚盛土の築造後に第1号建物跡を造るわけだが、調査時に水塚盛土に対する第1号建物跡基礎地業の掘り方が認められなかつたことは注意を要する。基礎地業の構造と使用された多数の石材や瓦片の状況から、当然布掘り状の掘り方の存在が調査前から想定されたが、複数箇所を複数人

で確認した結果においても、明瞭な掘り方は確認できなかつたのである。

こうした調査結果を踏まえると、第1号建物跡の建築方法として2種類の工法が想定された。

一つは盛土の作業と並行して、建物の基礎地業を行つたという工法である。

二つは盛土の完成後に、盛土を掘り込んで建物の基礎地業を行つたという工法である。

一つ目の工法では、盛土をしつつ、不安定な礎石を積んでいくことは至難である。二つ目の工法に関して掘り方の存在を推定する根拠として、基礎地業において瓦片・石材が面的に複数面検出されたことが挙げられる。これは平面的には9箇所

確認され、それぞれが立面上に3～4面に分けられた。

## (2) 遺物出土状況の検討

一つ目の工法では版塗状に細かく填圧していく必要があるが、その痕跡が認められないこと、コスト的にかなり増えることが予想され、あまり現実的ではないように思われる。二つ目のそれでは、実際には掘り方は存在したもの、盛土完成後から短期間で、なおかつ同一材料で建築したために、層序としての認識ができなかった可能性がある。調査時には断面観察から、土地造成と水塚築造は間に置かず施工されたと考えられたが、水塚を一定期間放置したと考えないと蔵と建物の建築時

期に差があることの説明ができなくなってしまう。

遺物の出土状況を検討すると、一つの陶磁器がばらばらに破碎された状況でなおかつ、高低差を有する破片や別の瓦敷の破片と接合する事例が複数確認された（第22・23図）。

このことは第1号建物跡の建築に際して、同時期に礎石を配置したことを如実に示している。肉眼的には確認が難しかったが、基礎地業のそれぞれの範囲が実際には掘り方の位置を示していると考える方が妥当ではないかと考えられる。後述するように、栗橋閣所番土屋敷跡加藤家屋敷跡（第41図）で類似した基礎地業が検出されている点は参考になるかもしれない。

## 3 出土遺物の検討

第1号建物跡からは型紙摺絵染付の磁器碗や皿・大皿が出土している。型紙摺絵技法は江戸時代から存在するが、美濃で量産され普及するのは明治15年（1882）以降であるという（仲野1994）。

第1号蔵跡には外面に陰刻文をもつ磁器碗（第35図3）が存在する。同種の陰刻文碗は幕末から出現することが知られている。清朝景德鎮窯系磁器碗（第35図6）は「螢手」と呼ばれる薄造りの製品で江戸遺跡でも非常に類例が少ない。新宿区四谷三丁目遺跡第19号遺構（19世紀第3四半期）から出土が知られている（新宿区1991）。

また、酸化コバルトの染付がみられない点も特

徴である。酸化コバルト染付は、瀬戸では明治4・5年頃出現する（仲野前掲書）とされることから、第1号蔵跡出土遺物には確実に近代に降る遺物ではなく、幕末から明治時代初頭（概ね19世紀後葉頃）、1860～1870年代頃の遺物群と考えられる。

先行する第1号蔵跡が幕末から明治時代初頭（19世紀後葉）頃、第1号建物跡が明治10～20年代（19世紀末）頃建築されたと推定される。

その他、第1号建物跡から陶製の「赤瓦」が出土したことでも特筆される。類例は非常に少なく、その由来が注目される（註1）。

## 4 類例の検討

大河川の中・下流域は沖積平野（低地）に位置し、豊かな水田地帯が形成されてきた反面、洪水にも見舞われてきた歴史がある。荒川や利根川流域には多くの水塚が造られてきた。「洪水といった水害に対する備えとして設けられた、周りよりも土地が高い避難用施設」という定義が共通項となろう（東部地区担当者会2013）。本田遺跡を含む利根川水系の低地帯には多数の水塚が確認され

ている。

小林文男は埼玉県内の利根川・中川・江戸川筋を対象に水塚の分布と実態調査を綿密に行った。立地、構造、機能、築造時期から過去の水害史に至るまで深く掘り下げ、水塚研究の先駆けとして高く評価できる（小林1987）。その後、埼玉県東部地区文化財担当者会により水塚の悉皆調査が実施され、行田市から八潮市・三郷市にかけての埼



第39図 水塚の分類

東部地区文化財担当者会『埼玉・北埼玉の水塚』より



第40図 水塚の類例

葛・北埼玉地域を対象に1439件の水塚データが収集された(東部地区担当者会2013)。羽生市三田ヶ谷地区では、地域に残る水塚を丹念に調査し記録として残した(三田ヶ谷地区地域史発掘事業実行委員会2010)。地域に根差した調査記録として貴重である。また、利根川対岸の群馬県板倉町でも詳細な水塚の実態調査が実施され(板倉町教育委員会2004)、千葉県では、逆井芳男が千葉県野田市(旧関宿町)の水塚の調査研究を行ってきた(逆井1997・1999)。

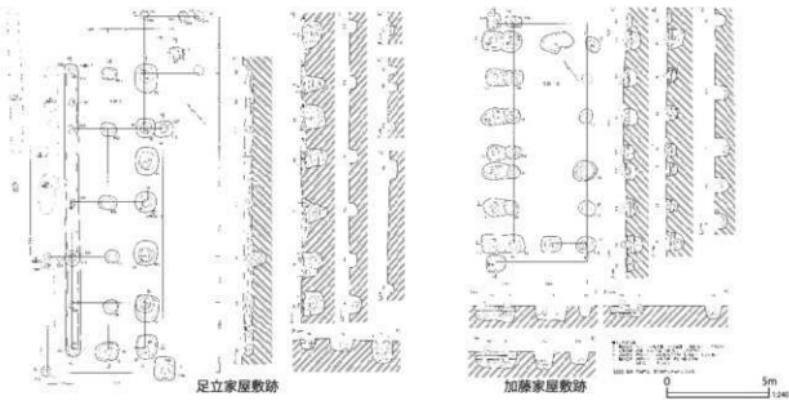
しかし、水塚の調査は聞き取り調査や若干の記

録に頼る場合が多く、築造年代や構造は不明確な例が大多数である。水塚自体が発掘調査となるのは非常に稀で、埼玉県内では栗橋閑所番土屋敷跡(埼埋文2018a)と栗橋宿跡吉田家水塚跡(埼埋文2018d)で一部調査された程度である。近県では茨城県猿島郡五霞町の新田遺跡で江戸時代中期、18世紀後半に遡る水塚が調査されている(茨城県教育財団2015)。新田遺跡では水塚上に建物は検出されていない(第40図)。

栗橋閑所番土屋敷跡で調査された足立家屋敷跡第1・2号建物跡は5×2間の総柱構造の礎石建物である(第41図左)。注目すべきは、布堀りまたは壺地業の掘方に据えた礎石の直下に、数個の石を縦に設置(仮称「重ね石地業」)していることである。また、加藤家屋敷跡第1b号建物跡では、礎石下の「重ね石地業」ともいるべき地業の石と石の間層に、瓦敷が互層となって敷かれていた(第41図右)。本田遺跡第1号建物跡の瓦敷きとほぼ同じ構造ということができよう。

本田遺跡第1号建物跡身舎の隅柱と側柱中間柱は柱状の凝灰岩切石が縱長(立石状)に配置されている。栗橋宿跡「吉田家水塚」の大蔵、栗橋本陣跡第301号建物跡(埼埋文2019b)に採用されたいわゆる「蟻燭地業」と同一構造である。本田遺跡例では特に強度の要求される箇所に蟻燭地業、それ以外に「重ね石地業」という使い分けがなされたと考えられる。

栗橋閑所番土屋敷跡例は19世紀前半～後半のなかで捉えられている。栗橋宿跡「吉田家水塚跡」大蔵は幕末頃の築造といわれている。栗橋本陣跡第301号建物跡は19世紀後半の構築と推定されている。「蟻燭地業」を採用する建物は東京都江戸



第41図 栗橋閘所番士屋敷跡の建物跡

川区昇覚寺鐘楼が知られている（昇覚寺鐘楼保存修理委員会1985）。鐘楼の下部構造に採用されたものであるが、18世紀後半～19世紀の中で特定は難しいようである。本田遺跡第1号建物跡の地業方法も近世から明治時代に流行した工法が採用されたと考えられよう。

さて、第39図には水塚の断面類型を示した。最も一般的なものはII類、母屋は低い位置にあり、水塚上に土蔵や物置などの非常に時に備えた建物を建てるものである（東部地区担当者会前掲書）。小林の分類も同様であるが、小林は住居の代用として水塚を使う場合があったこと、用便（便所）を備えたものはないことを指摘している。

茨城県新田遺跡は水塚上に建物は検出されず<sup>1</sup>

類、栗橋宿吉田家水塚跡はII類、栗橋閘所番士屋敷跡は番士の居住施設であるためIV類と考えられる。本田遺跡例はII類またはIV類に相当すると考える。本来の母屋は別にあるが、ほぼ同様の機能を有する恒常性の高い居住施設を水塚上に置き、蔵（土蔵）を相対的に低い位置に造る点に特徴がある。

調査により蔵と建物跡の建築時期に時間差が存在したこと、更に建物跡基礎の具体的な構造が判明したことは大きな成果である。その一方で、何故水塚と蔵跡の構築時期に差があるのか、何故通常とは異なり蔵を水塚よりも低い位置に置いたのか、基礎地業の系譜と時期的な変遷など、今後に残された課題も多い。調査例の増加に期待したい。

註1 赤瓦の類例は江戸遺跡も含め非常に少ないという。山崎吉弘氏に御教示を得た。

#### 引用・参考文献

- 蘆田伊人編 1968『新編武藏風土記稿（再版）』第10巻 大日本地誌体系（10）雄山閣
- 板倉町史編纂委員会 1989『板倉町史別巻9 板倉町の遺跡と遺物』
- 板倉町教育委員会 2004『水防建築「水塚」調査報告書』
- 井上尚明 2010「水の災害史－遺跡から見た洪水の歴史－」洪水への備えを考える講演会－埼玉低地の水塚と鎮守の森－資料 さいたま文学館
- 茨城県教育財団 2015『新田遺跡 上原遺跡 殿山塚』 茨城県教育財団文化財調査報告第395集
- 大成可乃 2011『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）』『東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要7』

- 柿沼幹夫 2015 「方形周溝墓の最前線」『考古学ジャーナル』No.674 ニューサイエンス社
- 加須市教育委員会 1990 『加須市の民家』加須市文化財調査報告書第1集
- 加須市教育委員会 1993 『利根川旧堰堤跡』加須市文化財調査報告書 第4集
- 加藤誠洋 2001 「水防建築「水塚」について—板倉町の「水塚」調査中間報告ー」『文化財調査研究誌vol. 6 波動』
- 金子 智 2018 「江戸・東京の瓦にみる幕末・明治一瓦の近代化への流れー」『江戸遺跡研究会第31回大会 遺物にみる幕末・明治』江戸遺跡研究会
- 北野信彦・毎田佳奈子・高山 優・藤根 久・米田恭子 2009 「Ⅲ. 津和野藩亀井家江戸中屋敷の施釉瓦」『石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡発掘調査報告書Ⅱ』港区教育委員会
- 騎西町教育委員会 2001 『騎西町史』考古資料編 I
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『島應途遺跡』財团法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第376集
- 小林文男 1987 「埼玉県東部低地の風土と人間生活—特に水塚を事例としてー」『昭和61年度埼玉県教育委員会長期研修員(社会科)研修報告』埼玉県教育委員会
- 埼玉県遺跡調査会 1972 『水深』埼玉県遺跡調査会報告第13集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2007 『飯積遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第334集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2014a 『諏訪北Ⅰ/諏訪北Ⅱ 諏訪南/二ツ家下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第409集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2014b 『長竹遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第413集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2016 『屋敷裏遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第422集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018a 『栗橋問所番士屋敷跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第436集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018b 『茂手木遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第438集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018c 『米の宮遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第439集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018d 『栗橋宿跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第448集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018e 『東畑遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第449集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019a 『旧利根川堤防跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第450集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019b 『栗橋宿本陣跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第451集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019c 『桶ノ口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第455集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019d 『栗橋宿跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第456集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2020 『さいたま埋蔵文化リポート2020』公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報40
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2021 『宮西Ⅰ/宮東Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第467集
- 逆井芳男 1997 「関宿町における水塚の研究」『研究報告』創刊号 千葉県立関宿城博物館
- 逆井芳男 1999 「関宿町における水塚の研究Ⅱ」『研究報告』第3号 千葉県立関宿城博物館
- 昇覚寺鐘楼修理保存委員会1985 『法灯』昇覚寺鐘楼修理保存・発掘調査報告
- 新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991 『四谷三丁目遺跡』
- 大正大学文学部歴史学科・羽生市教育委員会 2012 『羽生古墳群—利根川中流域右岸における古墳の測量調査ー』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)1997年度』『東京大学構内遺跡調査研究年報』2別冊
- 東部地区文化財担当者会 2013 『埼葛・北埼玉の水塚』東部地区文化財担当者会報告書第7集
- 長崎市教育委員会 2003 『唐人屋敷跡一天后堂前広場整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー』
- 仲野泰祐1994 「19世紀の窯業」『化学史研究』21- 2
- 羽生市教育委員会 2009 『大道遺跡』羽生市発掘調査報告書第2集
- 羽生市教育委員会 2016 『埼玉県指定記念特別展 永明寺古墳とその時代—武藏国村君の大古墳ー』
- 三田ヶ谷地区地域史発掘事業実行委員会 2010 『三田ヶ谷地区的水塚調査報告書』羽生市三田ヶ谷公民館
- 矢口孝悦・瀧瀬芳之 1996 「羽生市小松1号墳の調査」『埼玉考古』第32号

## 写真図版



1 調査区遠景（南東から：利根川を望む）



2 調査区遠景（北から：加須市方面を望む）

図版 2



1 調査区近景（垂直写真）



2 調査区近景（南西から）



1 水塚全景（北から：精査前）



5 水塚全景（北から：遺構精査状況 1）



2 水塚全景（北西から：精査前）



6 水塚全景（北西から：遺構精査状況 2）



3 水塚全景（北から：遺構検出状況）



7 水塚全景（北から：遺構精査状況 3）



4 水塚全景（北西から：遺構検出状況）



8 水塚全景（北西から：遺構精査状況 4）

図版4



1 第1号石垣1（南東から）



5 第2号石垣・第2号階段（北東から）



2 第1号石垣2（南から）



6 第4号石垣（北東から）



3 第1号石垣3（南から）



7 第5号石垣1（西から）



4 第1号石垣4（南から）



8 第5号石垣2（北から）



図版 6



1 第3号石階段 1 (南西から)



5 第3号石階段側面 3 (西から)



2 第3号石階段 2 (北東から)



6 第3号石階段側面 4 (西から)



3 第3号石階段側面 1 (南西から)



7 第3号石階段側面 5 (西から)



4 第3号石階段側面 2 (西から)



8 第3号石階段側面 6 (西から)



1 第1号建物跡基礎石列1(北から)



2 第1号建物跡基礎石列2(北から)



3 第1号建物跡基礎地業(北から)

図版 8



1 第1号建物跡礎石 1-0-No 1・2・4・11 (北から)



5 第1号建物跡礎石 1-1.5-No 1～3 (北から)



2 第1号建物跡礎石 1-0-No 13～17 (北から)



6 第1号建物跡瓦敷1 (礎石 1-1～1-2間) (北から)



3 第1号建物跡礎石 1-1-No 1・2・6 (北から)



7 第1号建物跡礎石 1-2-No 1・14 (北東から)



4 第1号建物跡礎石 1-1-No 6 (北から)



8 第1号建物跡礎石 1-2-No 17・18 (北から)



1 第1号建物跡瓦敷1（礎石1-2~1-3間）（北から）



5 第1号建物跡礎石1-3-5・No.67、1-4・No.8・10、1-4-5・No.8～11、瓦敷2（北から）



2 第1号建物跡瓦敷1（礎石1-2東側）（北から）



6 第1号建物跡礎石1-4・No.1～4・7・8（北西から）



3 第1号建物跡礎石1-3・No.1～3（北から）



7 第1号建物跡礎石1-5・No.1・2（北西から）



4 第1号建物跡礎石1-3-5・No.1～3・5・6（北から）



8 第1号建物跡瓦敷3・8周辺（礎石1-5・No.2）（北西から）

図版 10



1 第1号建物跡基礎石 1-6- No. 1



2 第1号建物跡基礎石 1-6- No. 4,  
S25~34、2.5-6- No. 6~12、  
瓦敷 8 (東から)



3 第1号建物跡基礎石  
1-7- No. 1・2 (西から)



1 第1号建物跡礎石 1-7・No.7、S35、瓦敷 4（東から）



2 第1号建物跡礎石 2-0・No.1～3（南から）



4 第1号建物跡礎石 2-1・No.1・2・4・12・13（南から）



3 第1号建物跡礎石 2-0・No.4～9、2.5-0・No.4～7、  
3-0・No.4～10（西から）



5 第1号建物跡礎石 2-1・No.23～26（南から）

図版 12



1 第1号建物跡礎石 2-1-No 25(刻字)(南西から)



5 第1号建物跡礎石 2-5-No 2~5(西から)



2 第1号建物跡礎石 2-2-No 1~3(南東から)



6 第1号建物跡礎石 2-5-No 8、S22~24、3-5-No 8、瓦敷3南側(西から)



3 第1号建物跡礎石 2-3-No 1~4(南から)



7 第1号建物跡礎石 2-5-2-No 1(南から)



4 第1号建物跡礎石 2-4-No 1~3(南から)



8 第1号建物跡礎石 2-5-6-No 1・3・4(南から)



1 第1号建物跡礎石 3-0-No 1～3（南から）



5 第1号建物跡礎石 3-3-No 1（南から）



2 第1号建物跡礎石 3-1-No 1～3（南から）



6 第1号建物跡礎石 3-5-No 1・4・5（南西から）



3 第1号建物跡礎石 3-1-No 22・24～32（東から）



7 第1号建物跡礎石 4-1-No 1～4（南から）



4 第1号建物跡礎石 3-2-No 1（南から）



8 第1号建物跡礎石 4-1-No 13～18（東から）

図版 14



1 第1号建物跡瓦敷 6・9 (礎石 4-1周辺) (南西から)



5 第1号建物跡瓦敷 6 (礎石 4-2~4-3間) (南から)



2 第1号建物跡礎石 4-2、4-3、5-3周辺 (南から)



6 第1号建物跡瓦敷 6 (礎石 4-2~4-3間) (北から)



3 第1号建物跡礎石 4-2-No 1~3・5・6 (東から)



7 第1号建物跡礎石 4-3-No 1 (南から)



4 第1号建物跡礎石 4-2-No 7~12 (北から)



8 第1号建物跡礎石 4-3-No 1・2 (南東から)



1 第1号建物跡礎石 4-3- No 2・3（北から）



5 第1号建物跡礎石 4-4- No 1（墨書）（上から）



2 第1号建物跡礎石 4-3- No 4（南から）



6 第1号建物跡礎石 4-5- No 1・2・6（北西から）



3 第1号建物跡礎石 4-3- No 4（南東から）



7 第1号建物跡礎石 5-0- No 1～4（北から）



4 第1号建物跡礎石 4-4- No 1～6・11～13（南から）



8 第1号建物跡礎石 5-0- No 6～10（南から）

図版 16



1 第1号建物跡礎石 5-1-No 1・3・4（北東から）



5 第1号建物跡礎石 5-3-No 10～20（南西から）



2 第1号建物跡瓦敷 7（南から）



6 第1号建物跡礎石 5-6-No 1～3（南から）



3 第1号建物跡礎石 5-3-No 1（南から）



7 第1号建物跡礎石 5-6-No 5～11（南から）



4 第1号建物跡礎石 5-3-No 10～20（南から）



8 第1号建物跡瓦敷 9（南西から）



1 第1号蔵跡基礎検出状況（北から）



2 第1号蔵跡北東隅角基礎検出状況（南西から）



4 第1号蔵跡基礎（西3・4）内側加工痕（東から）



3 第1号蔵跡基礎（北4）外側加工痕（北から）



5 第1号蔵跡基礎（西5）内側加工痕（東から）

図版 18



1 第1号蔵跡基礎地業堆積状況1  
(基礎北列東西方向: 北西から)



2 第1号蔵跡基礎地業堆積状況2  
(基礎北7東西方向: 北から)



4 第1号蔵跡基礎地業堆積状況4  
(基礎東3内側: 北西から)



3 第1号蔵跡基礎地業堆積状況3  
(基礎南1南北方向: 西から)



5 第1号蔵跡基礎地業堆積状況5  
(基礎東5: 北から)



1 第1号蔵跡基礎地業検出状況1（北から）



2 第1号蔵跡基礎地業検出状況2（北から）



4 第1号蔵跡基礎地業検出状況4（北西隅：北から）



3 第1号蔵跡基礎地業検出状況3（北東隅：北から）



5 第1号蔵跡基礎地業検出状況5（西側：北西から）

図版 20



1 第1号藏跡基礎地業掘り方1（北から）



2 第1号藏跡基礎地業掘り方2（東側：北から）



4 第1号藏跡基礎地業掘り方4（北東隅：東から）



3 第1号藏跡基礎地業掘り方3（東側凹凸面：北から）



5 第1号藏跡基礎地業掘り方5（西側：北から）



1 第1・2号埋設構瓦検出状況（北から）



5 水塚土層断面1（礎石3-2～3-3の間）（南から）



2 第1・2号埋設構（北から）



6 水塚土層断面2（SB1B-B'の北端）（南から）



3 第1号土壤瓦検出状況（南から）



7 水塚土層断面3（SB1B-B'の北端）（南から）



4 第1号土壤（南から）



8 水塚基本土層断面（A-A'）（南から）

图版 22



1 第1号建物跡（第24図2）



2 第1号建物跡（第24図4）



3 第1号建物跡（第24図6）



4 第1号建物跡（第24図7）



5 第1号建物跡（第24図11）



6 第1号建物跡（第24図13）



7 第1号建物跡（第24図17）



8 第1号建物跡（第24図18）



9 第1号建物跡（第24図19）



10 第1号建物跡（第24図20）



11 第1号建物跡（第25図27）



12 第1号建物跡（第25図28）



13 第1号建物跡（第24図22）



14 第1号建物跡（第26図35）



15 第1号建物跡（第27図39）



1 第1号建物跡（第26図36）



2 第1号建物跡（第26図37）



3 第1号藏跡（第35図1）



4 第1号藏跡（第35図2）



5 第1号藏跡（第35図4）



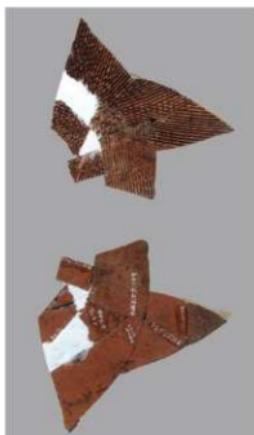
8 第1号建物跡（第27図43）



6 第1号藏跡（第35図6）



7 第1号藏跡（第35図7）



11 第1号建物跡（第27図46）



9 第1号建物跡（第27図44）

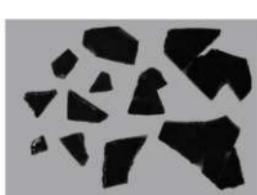
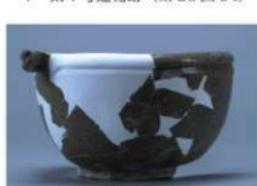


10 第1号建物跡（第27図45）



11 第1号建物跡（第27図46）

图版 24





1 第1号建物跡 (第28・29図61-66)



2 第1号建物跡 (第29図67-69)



3 水塚盛土  
(第10図5)



4 第1号建物跡 (第29図71)



5 第1号建物跡  
(第29図70)



6 第1号隧道  
(第36図19)



7 第1号藏跡 (第36図20)



8 第1号埋設桶 (第37図2)



9 第1号埋設桶  
(第37図3)



10 水塚盛土 (第10図7)

10 第2号埋設桶 (第37図4)



11 第2号埋設桶  
(第37図5)



12 水塚盛土 (第10図6)



13 第1号藏跡 (第36図30)



14 第1号藏跡 (第36図31)

16 水塚盛土 (第10図8)

图版 26



## 報告書抄録

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第471集

## 本田遺跡

首都圏氾濫区域堤防強化対策における

埋蔵文化財発掘調査報告

令和3年9月8日 印刷

令和3年9月24日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒 369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

0493 (39) 3955

<https://www.saimaibun.or.jp>

印刷／山進社印刷株式会社